

EXPLANATORY TEXT OF THE QUATERNARY TECTONIC MAP OF JAPAN

APPENDIX 5

ABSTRACTS OF PAPERS ON THE QUATERNARY TECTONICS  
(IN JAPANESE)

第四紀地殻變動図説明書  
付録 5

第四紀地殻變動文献抄録集

昭和48年 3月

科学技術庁

国立防災科学技術センター

*Published by the National Research Center for Disaster Prevention*

*Science and Technology Agency*

*Tokyo March 1973*

## 例 言

1. 本抄録集は、第四紀地殻変動図の作成に必要なデータを得ることを目的として、地殻変動の要素のうち、隆起・沈降・断層・褶曲について、第四紀地殻変動に関連する従来の研究成果を抄録したものである。
2. 本抄録集の作成は、地震予知連絡会と第四紀地殻変動研究グループ(Research Group for Quaternary Tectonic Maps; 略称 QTMグループ)が共同であった。
3. 本抄録集には、1921年から1967年までに発表された日本人の調査研究による第四紀地殻変動に関連する文献資料を収録した。また、講演要旨、総説的な文献も収録した。
4. 本抄録集の文献抄録記載方法は、別記の通りである。
5. 本抄録集の文献抄録の配列は、抄録者名(ヘボン式ローマ字綴り)のアルファベット順で、かつ、抄録者の抄録番号順に配列した。
6. 本抄録集の主著者別索引は、文献中筆頭に記述されている著者名を、ヘボン式ローマ字綴りのアルファベット順に配列した。なお、この主著者別索引は、本来ならば抄録の後におくべきであるが、抄録を切り離して、カードとして使用されること(従って、抄録は片面刷りにしてある)を考慮して、抄録の前においた。
7. 付表として、(1)抄録した文献誌名およびその略称一覧表、(2)抄録番号・事項対照表をつけた。なお、付表(2)は、主著者別索引の直前へそう入してある。

付表(1) 抄録した文献誌名およびその略称(または発行所名)一覧表

抄 録 誌 名	略称(または発行所名)
A	
秋田大学鉱山学部地下資源開発研究所報告 Geological Society of America Bulletin	秋田大鉱地研報 Geol. Soc. Am. Bull.
C	
地学双書	(地学団体研究会)
地学雑誌	地学雑
地球科学	(地学団体研究会)
地理学評論	地理評
地理科学	(地理科学学会)
地質調査所月報	地調月報
地質調査所報告	地調報
地質学雑誌	地質雑
地質ニュース	(地質調査所編)
地質図幅 (5万分の1)	(地質調査所)
"    (    "    )	(北海道開発庁)
"    (    "    )	(北海道立地下資源調査所)
Agenda Item VI, Contribution from the Government of Japan to ECAFE 3rd Petroleum Symposium	(地質調査所)
Crust of the Pacific Basin	( American Geophysical Union)
D	
第四紀研究	四紀研
E	
愛媛の地学 Erdkunde	(愛媛地学会) Erdk.
F	
Annales Academiae Scientiarum Fennicae	Ann. Acad. Sci., Fennicae
G	
岩石鉱物鉱床学会誌	岩 鉱

抄 録 誌 名	略称(または発行所名)
岐阜大学学芸学部研究報告	岐阜大学芸研報
Journal of the Geodetic Society of Japan	J. Geod. Soc. Japan.
Japanese Journal of Geology and Geography	Japan J. Geol. Geogr.
日本地質学会講演要旨	(日本地質学会)
日本地質学会総合討論会資料	( " )
Guide Book to Geological Excursion around Matsumoto	(地学団体研究会)
H	
広島県地質図幅説明書 (20万分の1)	(広島県)
北海道水理地質図幅説明書	(北海道地下資源調査所)
I	
伊勢湾台風災害の調査研究報告	(名古屋大学災害科学調査会)
Proceedings of Imperial Academy	Proc. Imp. Acad.
J	
地 震	(地震学会)
K	
香川県地質図 (10万分の1)	(香川県)
河岸段丘—その地形学的研究—	(古今書院)
木曾山脈・伊那谷の形成機構に関する地形学的研究	(有井琢磨・自費出版)
神戸市調査室調査月報	(神戸市調査室)
M	
横山次郎教授 記念論文集	横山記念論集
松下進教授 記念論文集	松下記念論集
N	
日本地方地質誌, 九州地方	(朝倉書店)
日本炭田図	(地質調査所)

## O

- |  |  |
|--|--|
| 岡山大学地学研究報告<br>Journal of Geosciences, Osaka City<br>University | 岡大地学研報<br>J. Geosci., Osaka City Univ. |
| 大阪学芸大学紀要<br>大阪湾の地質   | 阪学大紀<br>(大阪湾音波探査委員会)                   |

## P

- |  |                               |
|--|-------------------------------|
| Proceedings of the 11th Pacific Science<br>Congress in Tokyo | Proc. 11th Pacif. Sci. Congr. |
|--|-------------------------------|

## S

- |                                       |          |
|---------------------------------------|----------|
| 災害の地域的特異性に関する基礎的総合研究<br>(科学研究費特定研究報告) | (文部省)    |
| 石油技術協会誌                               | 石油技誌     |
| 資源科学研究所彙報                             | 資源研報     |
| 震災予防調査会報告                             | 震予報      |
| 新生代の研究                                | 新生研      |
| 測地学会誌                                 | (日本測地学会) |
| 駿台史学                                  | (駿台史学会)  |

## T

- |  |  |
|--|--|
| 天然ガス—調査と資源—  | (朝倉書店)                                 |
| 天然ガス調査報告   | (新潟県)                                  |
| 土地分類基本調査, 表層地質調査(富山<br>5万分の1)  | (富山県商工労働部工業課)                          |
| 東北地理   | (東北地理学会)                               |
| The Science Reports of the Tohoku<br>University, Seven Series (Geography). | Sci. Rep. Tohoku Univ., 7 Ser.(Geogr.) |
| 東海大学紀要   | 東海大紀                                   |
| 徳島県理科学会誌   | (徳島県理科学会)                              |
| Journal of the Faculty of Science,<br>University of Tokyo.                 | J. Fac. Sci., Univ. Tokyo.             |
| 東京大学地震研究所彙報  | 震研彙報                                   |
| 東京学芸大学研究報告   | 東学大研報                                  |
| 東京教育大学地理学研究報告  | 東教大地理研報                                |
| 東京の自然史   | (紀伊国屋新書)                               |

抄 録 誌 名	略称(または発行所名)
東洋大学工学部研究報告 都市地盤調査報告書1—伊勢湾北部臨海地帯 の地盤— 辻村太郎先生古稀記念論文集	東洋大工学研報 (建設省・愛知県・三重県) 辻村先生記念論集
U	
宇都宮大学学芸学部研究論集	宇大芸研論
Y	
有孔虫	(有孔虫研究連絡会)

#### 抄録の記載方法

① H—3 ② U・S・FD—KT—P

③ 武蔵野台地の地形変位とその関東造盆地運動における意義。

④ 貝塚爽平：四紀研，1，1，22—29，1957。

⑤ (1) 武蔵野を扇状地としてみた場合，正常の扇状地の形からずれている。これを関東造盆地運動の影響によって説明するとともに，その変位量を推定した。

(2) 武蔵野面の相対的低下量は，朝霞付近で40m（荒川沿い）。

(3) なし

①……抄録番号。

②……対象コード（地殻変動の様式）—（対象域）—（地質時代）。

③……表題。

④……著者名<sup>\*</sup>：掲載雑誌名，巻，号，頁，年。（<sup>\*</sup>：著者が2以上の場合，筆頭者から2名のみ記入する）。

⑤……記事：(1)論文の目的・方法・結果など，(2)地殻変動に関する資料，(3)その他（備考）。  
地殻変動の様式，対象域，地質時代の略称は次の通り。

a 地殻変動の様式

U：隆起 S：沈降 FT：断層 FD：褶曲

b 対象域

J：日本 NJ：東北日本 ST：西南日本 HK：北海道地方 TH：東北地方

KT：関東地方 CB：中部地方 KK：近畿地方 CS：中・四国地方 KS：九州地方

c 地質時代

R：沖積世 LP：洪積世末 P：洪積世 Q：第四紀

H	U	S	FT	FD	J	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS	U	S	FT	FD	J	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS	K		
																													19	20	
1	○	○		○					○	○	○																				
2	○	○								○																					
3	○	○								○																					
4	○	○								○																					
5	○	○		○							○																				
6	○	○																													
7	○	○									○																				
8	○	○						○																							
9	○	○																													
10	○	○																													
11																															
12	○		○																												
13		○										○																			
14	○										○																				
15				○							○																				
16	○	○			○																										
17		○								○																					
18	○																														
19	○					○																									
20	○																														
21	○																														
22	○																														
23	○																														
24	○																														
25	○																														
26	○	○																													
27																															
28																															
29																															
30																															
31																															
32																															
33																															
34																															
35																															
1																															
2																															
3																															
4																															
5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10																															
11																															
12																															
13																															
14																															
15																															
16																															
17																															
18																															

N	U	S	FT	FD	J	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS
26	○	○												
27														
28	○	○								○				
29	○	○												
30	○	○												
31	○							○						
32	○													
33	○	○								○				
34	○	○								○				
35	○	○			○									
36														
37														
38														
39														
40														
41	○													
42	○													
43		○												
44	○	○												
45	○	○			○									
46														
47														
48														
49														
50														
51														
52														
53														
54														
55														
56														
57	○	○												
58														
59														
60														
61														
62														
63														
64														
65														
66														
67														
68	○	○			○									
69	○	○												
70	○	○												
71	○	○												
72	○	○												
73	○	○												
74	○	○												
75	○	○												
76	○	○												
77	○	○												
78	○	○												
79	○	○												
80														
81														
82														
83														
84														
85														
86														
87														
88														
89														
90														
91														
92														
93														
94														
95														
96														
97														
98														
99														
100														
101														
102														
103														
104														
105														
106														
107														
108														
109														
110														
111														
112														
113														
114														
115														
116														
117														
118														
119														
120														
121														
122														
123														
124														
125														
126														



	U	S	FT	FD	J	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS		KS	CS	KK	CB	KT	TH	HK	SJ	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS				
0																																				
27	○	○						○							0	72																				
28	○	○											○		73																					
29			○	○						○					74																					
30	○		○								○				75																					
31	○								○						76																					
32	○									○					77																					
33		○								○					78																					
34	○								○						79																					
35	○														80																					
36	○									○					81																					
37	○			○					○						82																					
38		○								○					83																					
39			○												84																					
40	○								○						85																					
41		○													86																					
42			○	○								○																								
43	○									○																										
44	○																																			
45				○																																
46																																				
47			○																																	
48	○			○					○																											
49																																				
50	○		○	○	○																															
51		○							○																											
52	○																																			
53	○			○																																
54	○																																			
55																																				
56	○																																			
57	○																																			
58	○																																			
59	○																																			
60																																				
61	○								○																											
62		○																																		
63	○																																			
64	○																																			
65																																				
66	○																																			
67		○																																		
68	○																																			
69																																				
70	○																																			
71	○																																			

	U	S	FT	FD	J	NJ	SJ	HK	TH	KT	CB	KK	CS	KS	S	KS	CS	KK	CB	KT	TH	HK	SJ	NJ	J	FD	FT	S	U		
S 30															74																
31															75																
32															76																
33															77																
34															78																
35															79																
36															80																
37															81																
38															82																
39															83																
40															84																
41															85																
42															86																
43															87																
44															88																
45															89																
46															90																
47															91																
48															92																
49															93																
50															94																
51															95																
52															96																
53															97																
54															98																
55															99																
56															100																
57															101																
58															102																
59															103																
60															104																
61															105																
62															106																
63															107																
64															108																
65																															
66															Y 1																
67															2																
68															3																
69															4																
70															5																
71															6																
72																															
73																															

主著者別索引

アルファベット	著者名	抄録番号	アルファベット	著者名	抄録番号				
A	阿久津 純	H 15. N 57, 90.		井島 信五郎	S 62.				
	荒木 慶雄	N 22.		池辺 穰	N 58.				
	荒牧 重雄	N 86.		生出 慶司	S 52, 53.				
	有井 琢磨	O 59. S 76, 90.		今井 功	S 22, 32, 37.				
	B	板東 裕司		N 28	今村 外治	S 103, 106.			
		C		鎮西 清高	S 108.	井上 正昭	S 43.		
				E	江原 真悟	O 73.	猪木 幸男	S 7, 8, 72.	
					F	藤 則雄	N 80.	石狩低地帯研究G.	K 20.
						藤井 昭二	H 8. N 20, 88.	石和田 靖章	N 47, 48, 49, 50, 56, 61, 62.
						藤本 治義	H 17.	磯見 博	S 27.
藤田 和夫			H 12. N 27, 66, 84, S 67, 84, 85, 89.			岩塚 守公	O 79.		
藤田 至則			N 2.			井関 弘太郎	O 2, 28, 69, 72.		
藤田 佳久			O 62.			K	貝塚 爽平	H 1, 44, 45. O 3, 17, 38, 54. S 68.	
藤原 健蔵			H 16. K 1, 3, 4. N 94.				垣見 俊弘	S 25.	
深井 三郎	O 56, 70, 71.		金子 史朗				N 16. O 24, 29, 46.		
福田 理	N 52, 53, 54.	神戸 信和	S 41.						
福井 三男	S 9.	狩野 豊太郎	N 87.						
古谷 尊彦	O 64.	笠間 太郎	N 10, 68.						
H	原田 哲朗	H 22.	帷子 二郎	S 92.					
	長谷 浩明	K 10.	片田 正人	S 44.					
	長谷 実	O 77.	嘉藤 良次郎	N 15.					
	橋本 誠二	S 11.	勝井 義雄	S 2.					
	走水 研 G.	H 14.	河内 晋平	H 23.					
	秦 光男	S 18, 19.	河内 洋祐	S 86.					
	羽鳥 謙三	N 17.	河井 興三	N 43, 91.					
	早川 正己	S 48.	菊地 隆男	N 37.					
	平野 地質 G.	N 92.	木村 一朗	N 34.					
	東中 秀雄	S 63.	金原 均二	N 89.					
I	樋口 雄	N 51.	木野 義人	S 33.					
	姫川 研 G.	N 18.	木下 尚	H 19.					
	平林 照雄	H 26.	木曾 敏行	O 4, 5.					
	平山 次郎	S 40.	木曾谷 第四紀研究G.	H 11, 18.					
	平山 健	S 29.	北村 信	N 70.					
	堀江 正治	N 12, 13. O 22, 49, 61, 67.	清原 清人	S 26.					
	星野 通平	H 13. O 67.	久野 久	K 17.					
	市原 実	H 24, N 11, 29.	樽松 静江	O 66.					
	伊田 一善	N 59, 63.	黒田 啓介	K 26.					
	井口 正男	O 21, 34.							

アルファベット	著者名	抄録番号
	桑野幸夫	N 26, 46.
	桑代勲	K 27. O 41.
	小林国夫	H 4. N 8, 31. O 25, 81. S 65, 73, 74, 75, 81.
	小林学	S 70.
	小池一之	O 8, 63.
	小島丈児	S 105.
	小島伸夫	N 7.
	国府谷盛明	S 16.
	小藤文次郎	S 102.
M	町田洋	S 107.
	町田貞	O 15, 18, 20, 26, 30, 43, 44, 50, 80, S 69.
	前田昇	Y 1.
	横山次郎	S 47.
	真野勝友	N 81.
	松田時彦	S 91.
	(地団研)	S 87, 88.
	松本支部	
	松本繁樹	O 6.
	松本達郎	N 72.
	松野久也	S 61.
	松島信幸	N 76.
	松沢勲	N 65, S 98, 99.
	三位秀夫	N 82.
	三野与吉	O 53.
	三浦静	N 35.
	宮部直己	K 23.
	宮村撰三	K 24.
	水野篤行	S 13, 15.
	水山高幸	O 42. S 100.
	茂木昭夫	O 7, 51.
	守屋智雄	O 84.
	村松郁栄	S 94.
	村上政嗣	N 4.
	村山正郎	S 39.
N	長浜春夫	S 31, 83.
	長尾捨一	S 20.
	中川久夫	H 6, 9. N 32. S 56, 64, 93.

アルファベット	著者名	抄録番号
	中川典	S 57, 58.
	中村一明	K 21. N 83.
	中村嘉男	K 9.
	中野尊正	O 52, 57, 58, 78, S 66. Y 3, 4.
	七崎修	N 25.
	成瀬洋	H 3, 7. N 3, 14, 96.
	新瀨県	N 60.
	西村嘉助	N 42.
	西尾桂次郎	O 39.
	西山団研 G.	N 96.
	野沢保	S 34.
O	小笠原義勝	N 41. O 32.
	岡義記	O 9.
	岡山俊雄	S 96.
	岡崎由夫	N 24. O 1.
	鬼塚貞	S 60.
	小野忠濂	O 85.
	大倉陽子	O 13, 23, 35, 36.
	大草重康	N 79.
	大沢豊	S 36, 38.
	太田良平	S 46.
	太田陽子	K 22. O 14, 16.
	大矢雅彦	Y 2.
	大塚裕之	H 25.
	大塚弥之助	K 13, 14, 16. O 75, 82. S 77, 78, 101. Y 5.
	小山内熙	S 12, 21, 23.
	尾崎金右衛門	N 19.
S	斉藤正次	S 24, 45.
	斉藤昌之	S 14.
	斉藤実	N 6. S 97.
	坂口豊	O 48, 55, 60, 68. S 59.
	坂本享	N 9. S 35, 42, 50.
	佐藤源郎	Y 6.
	佐藤久	O 45.
	佐藤任弘	N 78.
	沢田秀穂	S 51.
	沢田義男	N 21.
	沢村孝之助	S 28.
	柴崎達雄	N 95.

アルファベット	著者名	抄録番号
	鹿間時夫	N 1.
	島田忠夫	S 3, 6.
	白井哲之	K 19. O 37.
	首藤次男	N 5, 38, 39, 71, 74.
	須貝貫二	N 55.
	杉本良也	S 4, 5.
	杉村新	O 33. S 1, 11, 33, 54, 55, 79.
	杉崎隆一	N 33.
	角清愛	S 30.
	鈴木好一	O 76, 83.
	鈴木泰輔	S 10.
	瀬川秀良	K 2, 5, 6, 7.
	関喜三郎	K 18.
T	多田文男	O 10. K 12.
	多井義郎	N 69. S 104.
	高橋正五	H 2.
	高橋達郎	K 8.

アルファベット	著者名	抄録番号
	高谷好一	H 21. N 36.
	竹原平一	H 10. N 85, 93.
	竹内順治	H 20.
	田辺健一	O 31.
	田中啓策	S 71.
	田山利三郎	K 15.
	土隆一	H 5. N 3, 30, 40, 73. S 80, 82.
	築地明	O 11, 12, 65.
	村島坤六	S 17.
	東大地震研究所	K 25.
W	若生達夫	O 40.
	渡辺勇	N 77.
Y	吉川虎雄	O 19, 27, 74, 86.
	矢崎清貫	S 49.
	山崎直方	K 11. S 95.
	山田純	N 75.
	山口久之助	N 64.

<p>H-1 武蔵野台地の地形変位とその関東造盆地運動における意義 只原 泉平：四紀研，1，1，22～29，1957。 (1) 武蔵野を扇状地としてみた場合，正常の扇状地の形からずれている，これを関東造盆地運動の影響によって説明するとともにその変位量を推定した。 (2) 武蔵野面の相対的低下量は朝霞付近で40m（荒川沿い）。</p>	<p>U-S-FD-KT-P H-5 渥美半島周辺の第四系の地史学的問題 上 陸一：四紀研，1，6，194～211，1960。 (1) 第四層は4分される， 附厚 4．沖積層 20m± 3．豊橋礫層 20m± 2．高師原・新所原礫層 3～48m 1．渥美累層 80m± 渥美累層の貝群集は外洋性のものではなく，古天竜川デルタ堆積物としての層相と関連をもっている。 (2) 天師原面 10～80m 走向 NEE-SWWの曲線 足山田では50～80m 高師原面 20m±</p>
<p>H-2 信濃川の流路と更新世堆積盆地 高橋 正五：四紀研，1，4，125～129，1959。 (1) 魚沼期が第四紀とみなされる理由。 ①侵成 ②構造差 ③堆積盆の分化と移動 魚沼を第四紀とみた場合，堆積物の厚さから沈降量を知ることができる，それは現信濃川下流と密接に関連している。 (2) 魚沼盆地 1,000～1,500m+ 岡野町盆地 700～1,400+ 今町～片貝盆地 500～600 東山～川山溝地 500～1,000 長浦盆地 300～300+ 富倉盆地 1,000～1,500+ 白根盆地 200～200+ 新潟盆地 200～200+ 加茂盆地 200～300+ 代表的沈降中心</p>	<p>U-S-FD-CB-Q H-6 仙台付近の第四系および地形(H) 中川 久夫・小川 貞子他：四紀研，1，6，219～227，1960。 (1) 段丘区分 6．海岸平野 5．仙台中町段丘 立川 4．仙台上町段丘 武蔵野 3．台ノ原段丘 下末吉 2．青葉山層 } 多摩 1．本砂金礫層 } (3) 本砂金礫層は青葉山層より一段古い可能性が強い，その発達高度は付梁部によって400m±に達する。</p>
<p>H-3 古東京湾の形成について一南関東上部新生界の地史(1)一 成瀬 洋：四紀研，1，5，143～155，1959。 (1) 上総層群上部（笠森層）の層相は三浦層群→成田層群への淺化を示し，沈降中心が南から北上移動するのに対応している。関東盆地南縁沈降部はこれとともに隆起帯に転化する。 (2) 下水吉面の変位（高度） 三舟山（138m），東金（63m），天羽田（60m）， 千葉（30m），鏡子（69m），八日市場（46m）。</p>	<p>U-S-KT-P H-7 相模構成盆地の変遷一南関東上部新生代界の地史学的研究(2)一 成瀬 洋：四紀研，1，7，243～255，1960。</p>
<p>H-4 日本アルプス山麓の第四紀層（予報） 小林 国夫：四紀研，1，5，182～184，1959。 (1) ローム層と石器，砂利層との関係予報。 (2) 松木盆地の第四紀層 150m  裏訪盆地の第四紀層 250m+</p>	<p>S-CB-Q H-8 富山県射水平野の第四紀の地下地質 藤井 昭二・坂本 清次：四紀研，2，1，23～29，1961。 (1) ガス試錐によって知られた沖積層，洪積層の発達は原生津層を中心として，沖積層基底は-85m，洪積層基底は-150～200mに達する。洪積層は主に礫層からなり下部は浜羽山礫層に對比される。</p>

H-9

北海道恵山火山付近の段丘

中川 久夫：四紀研， 2, 1, 9~14, 1961.

(1) 段丘区分

高位……………古武井段丘( 20~25 m)…………下末古面  
低位

海岸平野

古武井層と恵山somma噴出物は同期，中央火口噴出物は古武井段丘開折後である。

H-12

六甲山地のストラスト系一近畿中部における第四紀の地殻運動量—

藤田 和夫：横山記念論集， 23~30, 1961.

(1) 六甲山地のストラスト系の形成機構を基礎褶曲による押し上げの結果として説明している。これに関与する断層は六甲ストラスト，五助橋ストラスト，芦屋ストラスト，甲陽断層で，その主要活動期は甲陽固栗層中の植物化石層の変位，高位段丘礫層堆積前。

(2) 甲陽固栗層中の植物化石層の変位，侵蝕平坦面の位置から判断される隆起量の最大は大板平野の大板層群発達高度に対して約700~800mに達する。断層系の方向性は北東~南西。

U-HK-P

H-10

伊勢湾西岸の段丘と第四系(予観)

竹原 平一・木村 一郎：四紀研， 2, 4-5, 188~195, 1962.

(1) 地形区分

沖積層

低位段丘群

中位段丘群 海成を伴い17~20m…………下末古

高位段丘群

諸戸山面

高位羽野面 (=八事面) (=多摩面)

高位礫層——竜雲侵食面…………第四紀最下部と考えられる。

(30~200m) (40~300m)

U-S-CB-Q

H-13

伊豆半島西側の大陸斜面から採集された軟体動物化石と伊豆半島の地質構造

星野 通平：地球科学， 80, 23~28, 1965.

(1) 駿河湾東部のN34°37'， E138°40'，水深1,200~1,500mの地点から産出した岩礫性貝化石は白浜層のものと判断され，鮮新世初期以降，当地点を含む駿河湾地域が深く濡れたことを示している。著者はその原因を中新世末以降の海水準上昇に求めているが，相対的には当地域を含む大陸斜面——大洋底の沈降とも見られるであろう。いずれにしても白浜層の陸上での発達と海底での発達の間には1,500mの高度差があり，伊豆半島を軸とした大きな彎曲があったことは否定できない。

S-CB-Q

H-11

岐阜県坂下町における阿寺階層による段丘面の転移

木曾谷 茶四郎研究グループ：四紀研， 3, 3, 153~166, 1964.

(1) 段丘面の詳細なcriteriaにもとづく変位量の推定。

各段丘面と変位量 以下の通り。

水平ずれ 垂直ずれ

約200m 31.5 m

約100 25.5…………B. P. 27, 000年

上 0< 9.6

下 0 9.6

上 0 4.8

中 0 2~4.1

下 0 7

西方寺面

FT-CB-Q

U-FT-KK-P

H-14

三浦半島小原台付近の第四系

走水グループ：地球科学， 80, 1~11, 1965.

(1) 走水礫層や大津貝層を含む横須賀層は賦風浦層に武蔵的に対比されている。本層を不整合に切っている小原台砂礫層は下末古層に対比され，その堆積面が小原台面(80m)を作っている。また，一方，横須賀層の堆積面は残っていないが，小原台坳域では基底高度が40m，上位は小原台砂礫層に切られているから，本来の堆積面は80mより高いはずである。

(3) 横須賀港外の根島は下末古面に対比される。その高度は30m，これを小原台と比較すると，相模湾側に低下するする彎曲があるのかもしれない。

U-KT-P

H-15

那須野が原の第四系について

向久津 純：宇太学芸所論，

12, 73-92, 1962,

(1) 上黒磯砂礫層

← 関谷構造線 (第2次の断層運動) 落差40m

那須野砂礫層

田原ローム

宝木ローム

宝積寺ローム

多摩期>

金丸原砂礫層

黒磯火山角礫岩

川崎層群

← 関谷構造線 (第1次の断層運動)

下野山地と那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(2) 下野山地と盆地状の那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(3) 関谷構造線の運動量ははつきり記載されていないから地形図から読みとる必要がある。

川崎層群の時代は屏風浦期に含まれる模様である (羽鳥)。

FT-KT-P

関谷構造線 (第2次の断層運動) 落差40m

那須野砂礫層

田原ローム

宝木ローム

宝積寺ローム

多摩期>

金丸原砂礫層

黒磯火山角礫岩

川崎層群

← 関谷構造線 (第1次の断層運動)

下野山地と那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(2) 下野山地と盆地状の那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(3) 関谷構造線の運動量ははつきり記載されていないから地形図から読みとる必要がある。

川崎層群の時代は屏風浦期に含まれる模様である (羽鳥)。

H-16

Topography of the Yonezawa Basin, viewed from the movement in the surrounding hills

lands

Fujiwara, K.: Sci. Rep. Tohoku Univ. (geogr.), 5, 1-14, 1956.

(1) 米沢盆地には盆地をはさんで東西両側に断層がある。西側のTamaniwa丘陵縁のSasano-yama断層とそれに続くHayama, Nogawa断層と、東側の背梁山地下のGoshiyama断層などである。これらの断層はpost Up. Mioceneであるが、断層下の弱状地、河谷縱断面から考えて、recentまで運動が及んでいいると考えられる。これらの断層群とSasano-yama断層と斜交するKurokawa向斜の運動によって盆地の沈降が行われた。

(2) Sasano-yama断層の落差max. 300m, 走向N20W 東落ち。

Nogawa断層 NS 東落ち。

Hayama断層 N30E 東落ち。

以上盆地西縁の断層。

Kurokawa向斜軸 N30E。

Goshiyama断層 NS 西落ち, max. 約500m程度。

U-S.FT-FD-NJ-Q

関谷構造線 (第2次の断層運動) 落差40m

那須野砂礫層

田原ローム

宝木ローム

宝積寺ローム

多摩期>

金丸原砂礫層

黒磯火山角礫岩

川崎層群

← 関谷構造線 (第1次の断層運動)

下野山地と那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(2) 下野山地と盆地状の那須野が原との地形対立は関谷構造線によって、川崎層群堆積後から進行してきた。

(3) 関谷構造線の運動量ははつきり記載されていないから地形図から読みとる必要がある。

川崎層群の時代は屏風浦期に含まれる模様である (羽鳥)。

H-17

武蔵野台地の水理地質 (I)

藤本 治義・新藤 勝夫：東洋大工学研報第1号， 1, 51-82, 1965.

(1) 武蔵野市，三鷹市，国立町一帯の200m前後の深井資料の整理によって武蔵野台地西部の地下構造が推定されている。それによると、従来、三浦層群と考えられていたこの地域の段丘下地質には下末吉層および屏風浦層が北東に緩斜し厚くなってゆくことが認められる。とくに屏風浦相当層 (本文中では東京層下部) の基底は谷形をなした凹凸地形を作って北東に深くなる。基底面と段丘面の接する線は国分寺尾線と府中尾線の間にある模様である。

(2) 屏風浦層基底面深度は武蔵国一石神井付近で-90m。この延長と思われる層準の深床は荒川沿岸 (北区北部，川口市，戸田町など) では-240-250m。

S-KT-P

H-18

木曾川上流部の第四紀地質 (I)

木曾谷第四紀研究グループ：地球科学， 21, 1, 1-10, 1967.

(1) 河岸段丘群：坂下面

高部面

松原地面.....木曾谷層と中期ローム

地蔵嶺面群 { 1,700-1,600m

920-1,020.....地蔵嶺礫層

900-1,300

1,400-1,600m面

大笹沢山面 2,000m

鉢盛山面 2,500m

U-CB-Q



H-19  
岩手県花巻市西部の鮮新・更新統 (予報)  
木下 尚・岩井 淳一: 地球科学, 87, 13-20, 1966.  
(1) 河原段丘礫層  
鳥谷地礫層  
鳥谷地礫層  
粘土  
→ 堆積面高度 170m... 北方柴林で 150m  
柴林層  
クサリ礫 → " " 250m... 横志田付近, 横森山  
尻平川層 <整合>  
三ツ沢川層  
中更新統  
柴林層  
→ 300m 以上 (西胆山地で)  
鮮新世は中新統と同じく南北走向で東に 30-50° 傾斜する。この運動は柴林層堆積後にも若干働いている。しかし鳥谷地礫層には及んでいない。この段曲は水沢市付近の出店焼曲線 (村田 1939) や北上川流域の胆沢一油島焼曲線 (中川 1963) と同様と考えられる。

H-21  
ピワ湖東岸の地質と地下水の流出機構について  
高谷 好一・西田 一彦: 地球科学, 74, 33-39, 1964.  
(2) ピワ湖南東, さくらがらが駅東方における古ピワ湖層群発達高度 270m 以上。

H-22  
近畿地方の新鮮新世代層の研究 III - 大阪南方和泉地域の大阪層群 -  
原田 哲尚・石田 志明: 地球科学, 66, 1-8, 1963.  
(2) 泉北地区では大阪層群下部の高度 300m に達する (天野山 272m).  
地質図付。  
U-KK-P

H-20  
後期猪丸層における火山活動, とくに飯縄火山活動について  
竹内 順治・竹下 寿: 地球科学, 78, 1-10, 1965.  
(1) 猪丸累層, 豊野累層と古飯縄火山活動の関係を扱う。本記載中に猪丸累層の記述が次のようである。  
猪丸累層 (500m 厚) は水内層群 (4,000m) 最上部をしめるモラッセ相堆積物である。そのまた最上部 (Rev. 1, tuff より上) は *Picea* が多く *Metasequoia* が消滅している。この最上部層は大川層に対比される。また *t*, tuff を含む礫層がある。侵食面は美が原礫岩や霧が峯礫岩下底の侵食面に対比される。  
猪丸累層礫式地: 戸隠村永久保 ~ 猪丸

H-23  
霧が峯・荒船山地区における鮮新世火山活動 I  
河内 晋平・河内 洋佑: 地球科学, 64, 1-7, 1963.  
(1) フォッサマグナ南端の鮮新世火山は一部第四紀にもかかわる火山活動で一つの地質区としてまとめ得。瀬戸内区の延長といえる。これらには湖成層がともなっている。霧が峯, 荒船, 芽が岳, 美が原など。  
(2) 荒船地区の泥岩累層は火山堰止性の湖成層で厚さ 200m, 海拔 1,000 ~ 3,000m の地塊に発達する。  
U-CB-Q

H-24  
大阪・明石地域の第四紀層に関する諸問題  
市原 実: 地球科学, 49, 15-25, 1960.  
(1) 本論文は大阪層群灘地谷累層, 段丘堆積層の層準問題を中心にし, 植物による気候変化と海水準変化を論じているが, この中で大阪層群の持つ構造は隆起・沈降を考える上に関係がある。  
大阪層群の堆積面に応ずる侵食面も瀬戸内面であるとしている。(schematic section あり).

H-25  
口ノ津層群の順序および堆積物  
大塚 裕之: 地質雑報, 72, 8, 371-384, 1966.  
(1) 荒石層  
南中山層  
加津佐層  
大塚層  
口ノ津層群  
上部 { 90-150  
中部 { 200  
下部 { 300±  
U-KS-P

H-24  
大阪・明石地域の第四紀層に関する諸問題  
市原 実: 地球科学, 49, 15-25, 1960.  
(1) 本論文は大阪層群灘地谷累層, 段丘堆積層の層準問題を中心にし, 植物による気候変化と海水準変化を論じているが, この中で大阪層群の持つ構造は隆起・沈降を考える上に関係がある。  
大阪層群の堆積面に応ずる侵食面も瀬戸内面であるとしている。(schematic section あり).

H-25  
口ノ津層群の順序および堆積物  
大塚 裕之: 地質雑報, 72, 8, 371-384, 1966.  
(1) 荒石層  
南中山層  
加津佐層  
大塚層  
口ノ津層群  
上部 { 90-150  
中部 { 200  
下部 { 300±  
U-KS-P

H-21  
ピワ湖東岸の地質と地下水の流出機構について  
高谷 好一・西田 一彦: 地球科学, 74, 33-39, 1964.  
(2) ピワ湖南東, さくらがらが駅東方における古ピワ湖層群発達高度 270m 以上。

<p>H-26 松本盆地周辺の第三系の礫岩についての地質学的研究 平林 照雄：地質雑報，72，4，191~203，1966。 (1) 各層の礫の性状から中新世以後の堆積盆の推移、沈降・隆起を推論している。このうち鮮新～洪積の部分を取りあげると、袋丸期は、飛騨山地隆起極大、大嶺岩層にはこれにひきつづく運動が示され、豊野期の山砂利以後松本盆地の地溝化が行われたと考えられる。</p>	<p>FD--HK--P 北海道ノ国地方の海岸段丘 瀬川 秀良：東北地理，10，3，81~86，1958。 (1) 高位 太平出面……………180~200m……DI 中位 { 八幡野面……………120~140 } DuI       { 小安在面……………100± } 低位 { 廣示牧野面……………70± }       { 洲根子面……………40± } (2) 汀線高度の投影あり(第3図)。 (利北の相俣は弱い)</p>
<p>K-1 樺手盆地東縁北半部の地形一断層下に見られる運動— 藤原 健蔵：東北地理，7，2，63~69，1954。 (1) 川口断層……………真任岳断層の主体。 小沼・千屋山麓……………古い扇状地を切るもの陸羽地殻断層と一致。 釜知島断層……………kern but より (2) 小沼・千屋山麓で、高位・中位・下位面の垂直変位量を示す。北と南で変位量大(高位~中位間で数10m、中位~下位間で数m)。</p>	<p>K-6 北海道松前半島東岸の海岸段丘について 瀬川 秀良：東北地理，11，2，1~6，1959。 (1) 明瞭な海岸段丘： 休道院面 100m± 茂辺地面 70m± 三ツ石面 40m± 三ツ石面、茂辺地面の基底高度に変化がある。また段丘面も変形している。それらは第二系の褶曲と同じ動きを示す。 (2) 活動褶曲があるというが資料不足。</p>
<p>K-2 北海道松前町附近の海岸地形 瀬川 秀良：東北地理，8，1，13~17，1955。 (1) 上位面50~114 m，中位面24~69 m，下位面26~36 m。 (2) 汀線の投影図あり(第3図)。上位面の変形と中一下位面の変形とはちがう。波長は5 km ぐらい。</p>	<p>FD--HK--P 北海道松前半島東岸の海岸段丘について 瀬川 秀良：東北地理，11，2，1~6，1959。 (1) 明瞭な海岸段丘： 休道院面 100m± 茂辺地面 70m± 三ツ石面 40m± 三ツ石面、茂辺地面の基底高度に変化がある。また段丘面も変形している。それらは第二系の褶曲と同じ動きを示す。 (2) 活動褶曲があるというが資料不足。</p>
<p>K-3 Topography of the Yonezawa Basin, viewed from the tectonic movement in the surrounding hill-lands. 藤原 健蔵：東北地理，8，3~4，1~14，1956。</p>	<p>FD--HK--P 北海道礼文島の海岸地形 瀬川 秀良：東北地理，14，2，53~58，1962。 (1) 海岸段丘として 香深段丘 120~100 m 弁財泊段丘 80± 幌泊段丘 40~30 (2) 波動状の変形があるというが正確なこと不明。</p>
<p>K-4 Some considerations of the recent faulting in the western fringe of the Fukushima Basin. 藤原 健蔵：東北地理，10，4，1~19，1958。 (1) 福島盆地西縁の桑折・台山・白津の3断層あり。 (2) それぞれの断層下の扇状地(田剛)をきる新しい断層あり。 桑折断層のもののは落差……………12 m， 白津断層のもののは落差……………15 m。</p>	<p>FD--HK--P 北海道礼文島の海岸地形 瀬川 秀良：東北地理，14，2，53~58，1962。 (1) 海岸段丘として 香深段丘 120~100 m 弁財泊段丘 80± 幌泊段丘 40~30 (2) 波動状の変形があるというが正確なこと不明。</p>

<p>K-8 津輕半島沖野沢盆地附近の段丘地形 高橋 達郎：東北地理, 14, 2, 59-64, 1962. (1) 阿賀野川の河岸段丘を次のように区分。  <math display="block">\begin{matrix} \text{高位} \left\{ \begin{matrix} H_1 \\ H_2 \\ M \\ M' \\ P \dots \end{matrix} \right. \\ \text{中位} \left\{ \begin{matrix} P' \dots \\ P' \end{matrix} \right. \\ \text{低位} \end{matrix}</math>           (punice 堆積段丘)            (2) 段丘の projected profile があるが、褶曲はあまり明瞭でないようだが、もともと pumice の上面がかいてある。</p>	<p>FD-TH-P 理勢湖付近の地形と其の地体構造について 山崎 直方・多田 文男：震研彙報, 2, 85-108, 1927. K-11 U-FT-KK-Q K-12 U-FT-KK-Q 川の流路の変遷によって知り得たる伊賀国鳥ヶ原地域の運動 多田 文男：震研彙報, 7, 531-553, 1929. K-13 U-S-FD-SJ-Q Early Pliocene crustal movement in the Outer zone of Southwest Japan and in the Nauman's Fossa Magna. Ootuka, Y.: 震研彙報, 9, 340-352, 1931.</p>
<p>K-9 麓岳丘陵における高位侵蝕谷と地形発達 中村 嘉男：東北地理, 15, 1, 22-28, 1963. (1) 目的：侵蝕面の研究、とくに発達史。 結果：麓岳面 (180-220m) 鮮新統を切る。 石仏面 (100-140m) 侵蝕面 小里面 河成段丘面 を区別 (2) 仙台平野のほぼ中央の麓岳丘陵 (10×5km) の麓岳面・石仏面が南に傾動陸起。 (3) 傾動風：はつきりしないが、断面図より麓岳面・石仏面とも100m/5,000m程度。</p>	<p>U-FD-TH-Q K-14 U-S-SJ-Q Post Pliocene crustal movement in the Outer zone of Southwest Japan and in the "Fossa Magna". Ootuka, Y.: 震研彙報, 10, 701-722, 1932. K-15 FT-TH-R-LP-P 仙台近傍最近地質時代の地盤運動に就て 田山利三郎：震研彙報, 12, 77-95, 1934. (1) 撓曲, 拗曲 (Warping), 断層を主として地形から研究。 (2) 宮城野撓曲：大年寺礫層 (Pliocene) の撓曲, 広瀬段丘 (PL<sub>1</sub>) (Post Loam) の変形, 現在も動いているらしい。 白山撓曲線：大年寺礫層に当る砂・粘土層が10', 広瀬段丘後まで続く。 二熊拗曲 (Warping) 線：段丘の稜位よりわかる。 岩沼〜久ノ浜断層線 (長町〜利府線につづく)：いつまで動いたか不明。 鈎取断層：青葉山礫層の後, 動いたといわれる。 七北田断層：詳細不明, 若竹断層ほかの小活断層あり, すべて逆断層。</p>
<p>K-10 津輕半島の海岸段丘について 長谷 浩明：東北地理, 15, 4, 146-152, 1963. (1) 海岸段丘を次のように区分： X<sub>1</sub>, 450-580m, X<sub>2</sub>, 300-400m, II, 200-240m, I, 200-240m, III, 160-180m IV, 80-140m 広く分布, 間断さる, V, 60-80m よく発達, VI, 30-50m よく発達, VII, 20-15m 沖積段丘, VIII, &lt;10m 堤沖積面。 (2) 津輕平野の down warping を推定。半島脊梁部の隆起を急急点から推定。段丘高度の極端な変化は認められぬ。大観すれば、津輕半島は北に増高度の傾動。</p>	<p>FT-CB The Oti graben in southern Noto Peninsula, Japan. Ootuka, Y.: 震研彙報, 8, pt. 1:218-235, 2:806-845, 1935. K-16 FT-CB</p>

<p>K-17 FT-CB-P On the displacement of the Tanna Fault since the Pleistocene. Kuno, H.: 炭研叢報, 14, 619-631, 1936. (1) 地形と地質から井部断層の運動の推定。 (2) 井部断層: 多賀・蒲河原火山 (lower Pleistocene) の変形で井部, 田代盆地が形成されてのち、左ずれ1kmあり、かつ南部で、西側が東側より100mまたはそれ以上隆起した。</p>	<p>K-20 U-FD-HK-LP-P 北海道野幌丘陵の第四系について 石狩低地帯研究グループ: 地球科学, 79, 18-27, 1965. (1) 江別段丘 (12~30m) 広島砂礫層 / 支笏火山噴出物 / 角田層 (ウルム氷期) Periglacial 西の里層 (リス・ウルム間氷期) 海成 輪原段丘 (65~100m) 陸成 竹山礫層 (リス) 竹山段丘 (100~180m) 野幌層 (ミンアール・リス期以前) 海成 (2) 野幌層: 7~15°かたむく。</p>
<p>K-18 FT-FD-TH-P 岩見川中流の河岸段丘一大瀧野を中心として一 関喜四郎: 東北地理, 9, 1, 14-17, 1956. (1) 比高(m) 砂礫(厚さ) ローム 高位段丘 50 23m あり 中位段丘 25 18       " 低位段丘 10 2 (2) 南部に減傾斜運動? 高位段丘・中位段丘の段丘崖付近で比高の小さい(1~1.5m)断層?</p>	<p>K-21 U-FD-CB-R-LP-P Tilting and uplift of an island Awashima, near the epicentre of the Niigata Earthquake in 1964. Nakamura, K., K. Kasahara: J. Geod. Soc. Japan, 10, 3-4, 172-179, 1964. (1) 新潟地震での隆起は0.8-1.6m, 傾度は298.6°方向へ55.7°, これと段丘の示す変形を比較, 平均1/10/年でうごいている。 (2) 50-70m段丘 (Mamidaira), (8~9×10<sup>4</sup>y.), は100°, 95-100m段丘は3°, 200+m段丘は4°+, -25m海底段丘 (約1万年前) は15~30°。</p>
<p>K-19 FD-CB-P 龜野川下流地域の段丘地形からみた地盤運動 白井哲之: 東大地理研報, XI, 23-35, 1967. (1) 8つの段丘に分類。 第1段丘 火山灰あり(4m) 小千谷南方谷内山台に對比される。 第2段丘       " (2m+)       " 第3段丘       " (1m)       " 第4段丘 火山灰質赤色土 第5段丘 火山灰なし 第6段丘 第7段丘 比高20~30m 第8段丘       " 5~6m (2) 第1段丘は100~250%の傾きをもつ褶曲をなす。 南浜越段丘は和南津付近が高まり, 田河川合流点付近が低まる褶曲をしめす。 現在の変位(水準改測による)は塚山層や段丘の褶曲と一致。</p>	<p>K-22 U-FD-NJ-TH-CB-P The crustal movement in the late Quaternary considered from the deformation of terrace plains in north eastern Japan. Ota, Y.: Proc. 11th Pacific Sci. Congr. Tokyo, 1966, 10, physiographic devel. Pacific reg. 18, 1966. (1) 羽越褶曲帯の, 段丘の示す変動を白神山地, 佐渡, 信濃川沿いで研究。 (2) 講演のと き配布されたプリントに褶曲の分布, 断面, 傾斜などがある。</p>

K-23

U-S-J-R

A map of secular vertical movements of the earth's crust in Japan.

Miyabe, N., & S. Miyamura: Ann. Acad. Sci. Fennicae, A III, 90, 287-289, 1966.

- (1) 宮部の計算により1900~1928の日本の垂直変動を图示。
- (2) 第1図。QTMと比較するによい。

K-27

四国島北西部の地形

桑代 載: 地理科学, 2, 23~27, 1962.

- (1) 四国北西部の侵蝕面: 碓が森面  
皿が峯面 1,400±m  
1,200~900m面  
800~400m面

盆地, リアスの配列をのべ, 駄川段丘により地盤運動を考える。

- (2) 駄川の段丘: 下位より

内子面, D (背斜逆傾斜量)  
 須野尾面, C (今村・三野のS) 1/1,300  
 奈良野面, B ( " K<sub>1</sub>) 1/520  
 子子林面, A ( " K) 1/330

縦断面によると卯之町~野村町間に背斜, 坂石~大洲間に下流側の上昇, 大洲~長浜町間に背斜運動あり, 最後の背斜による逆傾斜量を上に記す。

K-24

U-S-FD-J-R

Secular vertical movements of the earth's crust in Japan.

Miyamura, S., & M. Mizoue: 測地学会誌, 10, 3~4, 123-138, 1964.

- (1) 水準測量のデータを, 地属別, 波長別に解析。20kmより短い波長の沖積地では振動的。20~100kmのは東北内帯で成育的, 東北外帯と中部日本ではよわいか非成育的。100~200kmのは中部地方で成育的, 東北内帯でも, 中部日本でも。
- (2) いくつかのグラフが第四紀変動と比較する上で役立つ。

K-25

FD-J-Q

活動褶曲に関する研究の概要

東京大学地震研究所: ガリ版ズリ, 42p, 1956.

- (1) 第1章 活動褶曲とその研究 (宮村)
- 第2章 羽越活動褶曲地域の地震活動 (宮村)
- 第3章 活動褶曲地域とその地質構造の検討 (杉村・中村)
- 第4章 新潟県小千谷付近に水準点を補うべきこと ( " )
- 第5章 活動褶曲研究のために新設した水準点とその測量 (岡田)
- 第6章 能代大館間重力測量結果 (田島・長川)

(2) それまでの活動褶曲研究のまとめ, 会津若松~津川間の, 地質構造と水準変化との関係の图示あり。

K-26

U-FD-CB-P

天伯原面形成についての一考察

黒田 啓介: 東海大紀, 2, 17~22, 1966.

- (1) 天伯原階層の堆積史とその後の地殻変動をのべる。この階層は南下りの変動のもとに堆積し, のち遅美曲運動により変形した。

<p>N-4 金剛山系山麓の洪積層について (清吉) 村上 政嗣: 地質雑, 59, 694, 320, 1953. (1) 御所町以南の洪積層の厚さを重複で30数箇所測定, 洪積層は北抵抗により上, 下に2分, 上部は砂層, 下部は砂層と砂質粘土~粘土層の互層, (2) 御所町以南では一般に基盤の深さは80~100m, 以北と上流では基盤の谷形に沿って100m以上.</p>	<p>N-1 日本中央山地の氷期の時代について 鹿間 時夫・小林 国夫: 地質雑, 55, 646, 65~71, 1949. (1) 日本中央山地周辺の低地における地形発達史および堆積史を組み立て, その中で飛騨氷期および木曾氷期の時代的位置を論じている.</p> <p>飛騨山脈 du II ローム堆積 du I 飛騨氷期 (安筑層堆積) dl II (鬼川層堆積)</p> <p>木曾山脈 ローム堆積 木曾氷期 (段丘形成, 天竜層) 伊那層堆積</p> <p>断層運動 ケルンバット面 Pd 錫冠山面 etc. (2) 梓川扇状地の段丘面 (小林) 1. 波多面 750~870m 2. 森口面 700~820m 3. 上海渡面 716~660 4. 押出面 680~600m</p> <p>梓川扇状地層.....最大100m 天竜層.....300m</p>	<p>S-KK-P</p> <p>N-5 豊州梁層群の地史的学的研究 (II) 首藤 次男: 地質雑, 59, 695, 372~384, 1953. (1) 大分県下敷地区の第三~第四系の層序・構造・対比と地史, (2) 大分市周辺および安心院盆地周辺の地質構造の種類とその生成時を表示している (第7~8表).</p>	<p>U-S-CB-P</p> <p>山麓面 島帽子山面 etc. 飯田盆地の段丘面 (鹿間) 1. 光前寺面 840~800m 2. 泰阜面 780~760 3. 赤穂面 740~720 4. 片桐面 680~660 5. 飯島面 630~530 6. 飯田面 540 7. 罪面 520~500 8. 阿島面 500~480 9. 松尾面 480~440</p>	<p>U-CS-P</p> <p>N-6 屋島礫層の時代について 斎藤 実: 地質雑, 60, 704, 212, 1954. (1) 屋島礫層相当層の分布を追跡し, その中からメタセコイア植物群を発見し, 明石層群・大阪層群に対比されるものであることを明らかにした. (2) 屋島礫層が屋島以外に香川県西部地方 (三豊郡・仲多度郡) に100~200mの台地性丘陵を構成して広く分布.</p>	<p>S-KT-P</p> <p>N-2 宮田層の堆積機構 藤田 至則: 地質雑, 57, 664, 21~28, 1951. (1) 井戸の資料にもとずいて宮田層の中にA~Fの化石層を認め, その上下関係と地表の傾斜とから宮田層の將煤倒し構造と堆積過程を論じた. (2) 宮田層の基盤の深さ 初声村竹ノ下付近.....150m (旧日本海軍による) (聞きこみで150尺, 150間, 150mといわれている)</p>	<p>FT-KT-O</p> <p>N-7 大礫地塊の地質について 小島 伸夫: 地質雑, 60, 709, 445~454, 1954. (1) 大礫丘陵の洪積層の層序と構造を記載したもの. (2) 四ヶ所において関東火山灰層をきる断層を報告. 落差(10~80cm), 断層面の向きを記載.</p>	<p>FD-KT-LP</p> <p>N-3 相模野台地東縁部の地質 成瀬 洋: 地質雑, 58, 684, 423~432, 1952. (1) パロメーターを用いて地層の boundary の高度を求め, 相模野台地下の洪積層をしらべた, 台地縁辺部の地質調査から第四紀における境川断層の活動を否定. (2) 台地面下の礫層が南縁部から北へ向って低くなっていく (逆傾斜), 台地面も同じ傾向を示す.</p>
---	--	---	---	---	--	---	--

<p><b>N-12</b> U-S-HK-R  <b>屈斜路湖岸段丘と地盤変動</b>          堀江 正治：地質雑報，62，726，156～157，1956。          (1) 屈斜路湖の周りの段丘の高度と堆積物（とくに湖様クイソウ岩）から汀線高度を求め高          中・低位段丘とも北方へ傾動していることを指摘。          (2) 傾動量と傾斜方向          高位段丘面……1.7×10<sup>3</sup>，N-S          中位段丘面……1.4×10<sup>3</sup>，N40°W          低位段丘面……0.7×10<sup>3</sup>，N30°E</p>	<p><b>N-8</b> U-FT-CB-P  <b>松本盆地周辺のいわゆる“山砂利”について</b>          小林 国夫・平林 照雄：地質雑報，61，712，30～47，1955。          (1) フォッサカマツグナ西山山地に広く分布する大峯面群（侵食面，800～1,000 m）の上          に乗る山砂利（大峯礫層）を地形面・推定される堆積相・蝶徑・松本盆地の地下構造・飛騨山          地東部の地形発達史・河川による巨礫の運搬・礫の磨損および風化などの点から考察した。          (2) 飛騨山東面の1,600～1,800 mの平坦山陵と1,000～1,300 mのそれとは飛騨断層によっ          て分離したものの。          形成順序：飛騨山地から東流する河川により大峯面群形成→その末期に飛騨断層形成→1,700          mのshoulder面の下刻→中山山地は堆積区に転化→大峯礫層の堆積の終らぬ中に中山山地隆起/断          層をとまなう）→下部扇状地層堆積→その間折→上部扇状地層堆積→緑色火山灰層堆積。          扇状地層の厚さ100 m以上。</p>
<p><b>N-13</b> U-S-KT-R  <b>鏡橋カルデラ内の湖成堆積物と沖積世の地盤運動</b>          堀江 正治：地質雑報，62，734，636～644，1956。          (1) 箱根程ノ湖の周囲に分布する湖岸段丘の分布・比高・堆積物の内容から旧汀線高度を推          定650 mと推定し，その高度の変化から沖積世における地盤運動量を推定した。          (2) 主湖盆（南東部）の傾動量の方向……5.0×10<sup>3</sup>，N50°E          副湖盆（北西部）の傾動量の方向……4.7×10<sup>3</sup>，N40°E</p>	<p><b>N-9</b> FT-KK-Q  <b>奈良南方の新生代層</b>          坂本 亨：地質雑報，61，713，62～72，1955。          (1) 奈良盆地東縁に細長く分布する，新第三系・第四系の記載と南北性の3構造線の記載。          (2) ① 高嶺断層，② 三白断層，③ 天理線曲 はいずれも基盤の圧縮応力による逆断層，          ①はもっとも古いらしい。          ②は白川池栗層（大阪層群下部）の後，虚空蔵山礫層の前。          ③は虚空蔵山礫層の後 Recentまで。</p>
<p><b>N-14</b> U-KT-P  <b>相模野台地南東部の関東ローム</b>          成瀬 洋・戸谷 洋：地質雑報，63，737，126～136，1957。          (1) 溝沢市付近の関東ローム層の層序区分をおこなない，それを使って各地形面の新旧関係お          よび東京・横浜・三浦半島の地形面との対比をおこなった。</p>	<p><b>N-10</b> FT-FD-KS-P  <b>姫島の地質構造と火山活動期</b>          笠岡 太郎・藤田 和夫：地質雑報，61，717，249～257，1955。          (1) 大分県姫島をつくる新生代層を，姫島累層，姫島火山岩類，凝灰角礫岩層に分けて記載          し，化石内容・岩相から大分層群，鶴崎累層に對比した。姫島累層の褶曲構造は姫島火山岩類          の活動以前にその原形ができ，火山岩体の侵入・噴出によりその構造が強調された。          (2) N-S性の3本の背斜軸とNS性の西番ちの断層。</p>
<p><b>N-15</b> FT-FD-KK-P  <b>養老山脈南縁の地質構造および鈴鹿山脈の形成</b>          笠藤 真次郎：地質雑報，63，743，475～483，1957。          (1) 養老山脈南縁部の新生代層を記載し，桑名層群（与明石層群）およびそれと不整合に被          う蓮花寺累層の褶曲構造を基盤褶曲によるものとし，さらに鈴鹿山脈の中部中新統の堆積も基          盤褶曲による地塊運動によるものと結論している。          (2) 基盤褶曲の時期（鈴鹿山脈の形成）          1. 中部中新統堆積以前（地塊化した基盤の沈降部に堆積）。          2. 中新統堆積後，南北方向で上昇→鮮新統（含明石層群）。          3. 桑名層群堆積後，一志断層など鈴鹿山脈山麓のストラスト。          4. 更新世，蓮花寺累層などの変形，一志断層再活動。</p>	<p><b>N-11</b> FT-KK-P  <b>千里山丘陵—大阪層群の研究（その1）—</b>          市原 美・藤田 和夫：地質雑報，61，720，433～441，1955。          (1) 大阪層群の様式地地である千里山丘陵の地質と構造を記載したものの。          (2) ① 仏念寺山断層……西落ち，落差，三つ池で160 m，寺内で140 m，南へむかい落差小，          大阪層群堆積後，信太山層群堆積前          ② 小野原断層帯……南と北とあるが南が主，南からのストラスト落差20～50 m，大阪層          群堆積後，信太山層群堆積前</p>

<p>N-16 FT-CB-R</p> <p>青木湖周辺の新期断層 金子 史朗：地質雑報 64, 749, 94~95, 1958.</p> <p>(1) 青木湖西岸で洪積層とみられる堆積物をさきる断層，崖面をなす断層など3地点で新期断層を発見・記載。埋没した断層帯の存在を予想している。</p> <p>(2) ずれの測れるもの，走向NNW，東落ち約3.5m。</p>	<p>N-20 U-CB-P</p> <p>富山県水見市の朝日山貝層について 藤井 昭二・松島 洋：地質雑報 65, 765, 390~391, 1959.</p> <p>(1) 新らしかい海に堆積された朝日山貝層の分布と層序を記載し，貝化石のリストから現在よりいく分暖かい海に堆積したと結論している。</p> <p>(2) 段丘堆積物の頂面……30~50m (海抜)， 貝層の位置……40m。</p>
<p>N-17 U-KT-P</p> <p>関東盆地西縁の第四紀地史 (I) (II) 羽鳥 謙三・寿円 晋吾：地質雑報 64, 751, 752, 181~194, 232~249, 1958.</p> <p>(1) 関東ローム層を中心として下末吉台地，多摩丘陵，狭山丘陵，加住丘陵の地形・地質を記述し，これら各地域をふくむ関東構造地西縁部の地形発達を考察した。</p> <p>(2) 下末吉期の最高海水位は現海抜45m。 多摩丘陵のT<sub>1</sub>面での多摩ロームの下底は海抜60~70m (麻風浦上面)。 狭山丘陵 (T<sub>2</sub>面) の多摩ローム下底，西部で160m，東部で60mでNEまたはENEへ傾く (狭山層は海成)。 加住丘陵のアナジャコ生痕は美根礫層と多摩ローム層の漸移部 (海抜140m)。 関東山地山脚部平坦面 (500m~230mの間に2, 3の侵食面)→この下位のものは三浦層群下部堆積期の陸上侵蝕面。</p>	<p>N-21 U-HK-LP</p> <p>北海道噴火湾北西沿岸の段丘地形と堆積物について (演習) 沢田 義男：地質雑報 65, 766, 460, 1959.</p> <p>(1) 4段丘を識別し，その高度と堆積物を記載し，北西岸との対比 (第3~第6段丘に對比) をおこなう。</p> <p>(2) 最高の段丘……80~120m (海抜) (第3段丘)。 第4段丘……比高40m。 第5段丘……比高10~15m。 第6段丘……比高数mで沖積面を構成。</p>
<p>N-18 FT-CB-P</p> <p>水魚川一筋間隴北部にその地帯の第三紀層 姫川団体研究グループ：地質雑報 64, 756, 431~445, 1958.</p> <p>(1) 姫川流域から松本平北帯にかけてのフォッサマグナ西縁部の鮮新~洪積層序と構造を記載し，対比をおこなっている。</p> <p>(2) 西より姫川断層，小谷断層，中山断層とNSまたはNNNEの方向の断層が並び，洪積統まで切っている。いずれも西落ち。</p>	<p>N-22 U-KK-P</p> <p>伊勢湾西部の海成更新統について (演習) 荒木 慶雄：地質雑報 65, 766, 462, 1959.</p> <p>(1) 四日市市御船，津市半田・磯方，一志郡久野町小野辺などから海成更新統を発見したと。</p> <p>(2) 堆積面の海抜高度 御船……約35m， 津市付近……10~20m。 地層の厚さ 数~10m。</p>
<p>N-19 S-CB-R</p> <p>金沢市近郊日本海沿岸の沖積世泥炭層の研究 尾崎金右衛門・藤 則 雄：地質雑報 64, 756, 445~453, 1958.</p> <p>(1) 金沢市付近の海岸地域の沖積層を区分し，新砂丘と旧砂丘 (または扇状地礫層) の間にはさまれる泥炭層 (A.D.50~150?)を詳しくしらべてその形成史を考察している。</p> <p>(2) 本地域は過去1,800年間に3~5m沈降。</p>	<p>N-23 U-CB-P</p> <p>有度山の地質構造ならびに地史 土 隆一：地質雑報 66, 775, 251~262, 1960.</p> <p>(1) 有度山をつくる洪積層の層序・構造と含有化石の古生代から堆積環境を考察し，それをもたらしただ当地域の第四紀地殻運動と海面変化の傾向とにふれている。</p> <p>(2) 堆積面の傾動 小瓶礫層……西麓で5.5°，北麓で3.5°，山頂部ではほぼ水平， 国古田礫層……走向NE，傾斜2~3°NW。</p>



<p>N-28 四国北部における群新・洪積層の地質構造について (演習) 板東 祐司・斎藤 実：地質雑，66, 778, 459, 1960. (1) 阿蘇山脈北部，嵯瀬南岸，伊予市付近に分布する段丘 (T<sub>1</sub>: 20~30m, T<sub>2</sub>: 50~60m, T<sub>3</sub>: 120~150m) と段丘礫層の下にある三疊層の分布・堆積形態・構造について述べてある。 (2) T<sub>1</sub>, T<sub>2</sub>, T<sub>3</sub>を統うものは新期洪積層，高松平野の地下約150mに三疊層。</p>	<p>S-HK-P 讃路平原周辺の新設層について (演習) 岡崎 由夫：地質雑，66, 778, 456, 1960. (1) 下部洪積統礫層をI~Vの部層に区分し，I, IIの互層中に寒→暖，暖→寒の気候変化が認められることを示した。 (2) 第三系の大染毛向斜部で深度400mの盆地構造を描く。</p>
<p>N-29 明石層群・播磨層群について (その2) 市原 実・小黒 謙司：地質雑，66, 780, 605~615, 1960. (1) 東播磨丘陵をつくる明石層群および播磨層群の層序・構造・化石・地形との関係をまとめ大坂層群との対比をおこなっている。 (2) 明美礫層の堆積面……明石川以北では東部で140m，西部で50m，東播磨丘陵全般では東部，東北部で170~150m，西部で30m。 西八木面……塩屋～東垂水，垂水～舞子で，60~40m？ 清水，川西で40m±。 明石城～大藏谷で40~30m±。</p>	<p>U-KK-P 三本原台地における青森ローム層の層序について (演習) 七崎 修・大池 昭二：地質雑，66, 778, 456, 1960. (1) 八戸ローム層→下層に中和田カルデアラ起源の浮石層，野辺地ローム層……野辺地層の上に整合，天狗岳ローム層？……天狗岳砂鉄層の上に整合，これらそれぞれ立川・下末吉・多摩ローム層に對比。 (2) 天狗岳砂鉄層の堆積面……50~100m。</p>
<p>N-30 大井川下流地方第四系の地史学的考察 土 隆一：地質雑，66, 781, 639~653, 1960. (1) 牧ノ原地域の層序・堆積環境を述べた後，古谷泥層の堆積面を水平と仮定して牧ノ原面の高度位置を求め，また真位前の古大井川の泥礫原の勾配を求めている。また各時代の堆積面の高度位置から洪積世以降における本地域のNW性の曲隆とNE性の曲隆との存在を述べ，それが新第三紀の褶曲運動の継続であるとしている。最後に，海面変化と古地理の変遷にふれてい</p>	<p>S-KT-P 常総台北部の第四系 (演習) 桑野 幸夫：地質雑，66, 778, 457, 1960. (1) 筑波山西方の洪積台地上の4本の試掘井 (深さ各130m) の微化石の解析。 (2) 第四系の基盤 真壁町……花園岩 協和地区……中新統？ 他の2本は基盤に達しない。</p>
<p>N-31 いわゆる“信州ローム” 小林 国夫：地質雑，67, 784, 32~47, 1961. (1) 松本盆地南部に分布するいわゆるローム層 (小坂田型信州ローム層) の層序区分と段丘面の関係を述べ，ローム層中の旧石器文化遺跡の位置づけとその時代によられている。 (2) 松本盆地中心部の第四紀層の厚さ100m以上 (ボーリング，電気探査による)。</p>	<p>FT-KK-P 東六甲周縁の断層とその形成過程に関する試験 (演習) 藤田 和夫：地質雑，66, 778, 459, 1960. (1) 地形と大坂層群の高度分布およびその層準の検討から芦屋スラストのシフトの垂直成分を推定し，他のスラストもほぼ同様の値をとることを示した。 (2) 海拔450m (芦屋市花原) に大坂層群分布，これより芦屋スラストのシフトの垂直成分は270mと推定。</p>

<p><b>N-32</b> U-FT-NJ-P</p> <p>東北日本南部太平洋沿岸地方の段丘群 中川 久夫：地質雑報，67，785，66～78，1961。 (1) 空中写真および野外調査により，仙台付近～那珂湊付近の段丘区分をおこなない，全域をI～Vの段丘に分け，地域毎にその発達状況，構成物質，のせている火山灰などの記載をおこなった。 (2) ニツ断面でIII面約20mくらいがう。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>I</th> <th>II</th> <th>III</th> <th>IV</th> <th>V</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>仙台付近</td> <td>350～450m</td> <td>100～200m</td> <td>45～65m</td> <td>30～50m</td> <td>30～50m</td> </tr> <tr> <td>岩沼付近</td> <td></td> <td></td> <td>30～40</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>相馬市付近</td> <td>100</td> <td>70～80</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>原町～蘆岡付近</td> <td>100～180</td> <td>75～80</td> <td>50～25</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>久の浜付近</td> <td>150+</td> <td>60～120</td> <td>40～50</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>平・磐城・勿来付近</td> <td>140～160</td> <td>100～120</td> <td>30～40</td> <td>20</td> <td></td> </tr> <tr> <td>高森・日立付近</td> <td></td> <td></td> <td>25～50</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>那珂台地</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		I	II	III	IV	V	仙台付近	350～450m	100～200m	45～65m	30～50m	30～50m	岩沼付近			30～40			相馬市付近	100	70～80				原町～蘆岡付近	100～180	75～80	50～25			久の浜付近	150+	60～120	40～50			平・磐城・勿来付近	140～160	100～120	30～40	20		高森・日立付近			25～50			那珂台地						<p><b>N-35</b> U-S-CB-Q</p> <p>福井県九頭竜川下流地域の第四系 三浦 静：地質雑報，67，790，394，1961。 (1) 試錐・弾性波資料から平野下の沖積層の基底を推定し，また海岸段丘を区分した。 (2) 沖積層下の谷底深さ……～60m</p> <p>海岸段丘高度 { 90～70m 50～25m → 最終間水期？ 20～15m</p>
	I	II	III	IV	V																																																		
仙台付近	350～450m	100～200m	45～65m	30～50m	30～50m																																																		
岩沼付近			30～40																																																				
相馬市付近	100	70～80																																																					
原町～蘆岡付近	100～180	75～80	50～25																																																				
久の浜付近	150+	60～120	40～50																																																				
平・磐城・勿来付近	140～160	100～120	30～40	20																																																			
高森・日立付近			25～50																																																				
那珂台地																																																							
<p><b>N-33</b> S-CB-R-LP</p> <p>地下水の地球化学的研究(第1報)——瀧尾平野の地下構造と帯水層の分布—— 杉崎 隆一・柴田 賢：地質雑報，67，789，335～345，1961。 (1) 680本の深井戸資料により瀧尾平野地下の第四紀層の層序と地下構造(第1礫層と第2礫層による)を述べた。 (2) 伊勢湾北部地盤図 大曾根層(D<sub>1</sub>) 熱田層(D<sub>2</sub>) 八事層(D<sub>3</sub>) 唐山層(D<sub>4</sub>)</p>	<p><b>N-36</b> U-S-KK-P</p> <p>枚方丘陵の第四紀層 高谷 好一・市原 実：地質雑報，67，793，584～592，1961。 (1) 枚方丘陵に分布する大阪層群および瀧池谷栗層(新香里層)を主とする第四系の層序と，それによくまわれ構成物質・構成粘土の検討から，洪積世の気候変化を論じている。 (2) 大阪層群+新香里層の厚さ……110m+ 高位段丘堆積層 { I……高度 50～60m II……高度 50～30m 中位段丘堆積層(枚方層)……高度 30m(一部海成)</p>																																																						
<p><b>N-37</b> KT-P</p> <p>茨城県江戸崎町および千葉県多古町周辺の第四系 菊地 隆男・楢野 俊男：地質雑報，68，796，17～28，1962。 (1) 多古町周辺の第四系を成東層と成田層に分け，前者の間には不整合があつて，成田層基底面の高さが25m土の起伏をもち，また江戸崎地域でも成田層の基底がうねることを明らかにした。 (2) 多古町～佐原市地域の成田層の基底……海拔25～30mで平坦，江戸崎地域で10m。</p>	<p><b>N-38</b> U-S-KS-P</p> <p>九州の最新統層の吟味——対比の基礎(九州の最新統の地史学的研究—II) 首藤 次男：地質雑報，68，801，301～312，1962。 (1) 大分市周辺，中津市周辺，長崎県南部，鹿児島湾北半の周辺，宮崎市周辺の5地区について洪積層の層序と地形との関係を記載している。 (2) 大分地域で海岸の沖積層下の洪積層の厚さ約200m，大分面(80～90m)は海成の大在層の堆積面，通山浜層のシルトの分布……模式地で海抜数m，佐土原面で80m，贈於郡で95m，出野で100m。 茶臼原面……大淀川沿岸(小林市まで)で230m土，川原田原面(=新田原面)の傾動……宮崎市瀧江 6m，新田村中山 40m，高岡町飯田 50m，(1/160の傾動)。</p>																																																						
<p><b>N-34</b> U-KK-Q</p> <p>三重県津市周辺の第四系層序(津宮) 木村 一朗・竹原 平一：地質雑報，67，790，393，1961。 (1) 第四系を見当山栗層・段丘堆積層・沖積層に区分し，地形との関係を述べている。 (2) 段丘堆積層の堆積面高度(海抜)。 最高位 海抜190～90m。 最低位 海抜 数m以下。 海成段丘 海抜 17～12m，津市内で30m土，沖積層の厚さ</p>	<p><b>N-39</b> U-S-KK-Q</p> <p>新潟県津波川下流地域の第四系 三浦 静：地質雑報，67，785，66～78，1961。 (1) 空中写真および野外調査により，津波川付近～那珂湊付近の段丘区分をおこなない，全域をI～Vの段丘に分け，地域毎にその発達状況，構成物質，のせている火山灰などの記載をおこなった。 (2) ニツ断面でIII面約20mくらいがう。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>I</th> <th>II</th> <th>III</th> <th>IV</th> <th>V</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>津波川付近</td> <td>350～450m</td> <td>100～200m</td> <td>45～65m</td> <td>30～50m</td> <td>30～50m</td> </tr> <tr> <td>岩沼付近</td> <td></td> <td></td> <td>30～40</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>相馬市付近</td> <td>100</td> <td>70～80</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>原町～蘆岡付近</td> <td>100～180</td> <td>75～80</td> <td>50～25</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>久の浜付近</td> <td>150+</td> <td>60～120</td> <td>40～50</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>平・磐城・勿来付近</td> <td>140～160</td> <td>100～120</td> <td>30～40</td> <td>20</td> <td></td> </tr> <tr> <td>高森・日立付近</td> <td></td> <td></td> <td>25～50</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>那珂台地</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		I	II	III	IV	V	津波川付近	350～450m	100～200m	45～65m	30～50m	30～50m	岩沼付近			30～40			相馬市付近	100	70～80				原町～蘆岡付近	100～180	75～80	50～25			久の浜付近	150+	60～120	40～50			平・磐城・勿来付近	140～160	100～120	30～40	20		高森・日立付近			25～50			那珂台地					
	I	II	III	IV	V																																																		
津波川付近	350～450m	100～200m	45～65m	30～50m	30～50m																																																		
岩沼付近			30～40																																																				
相馬市付近	100	70～80																																																					
原町～蘆岡付近	100～180	75～80	50～25																																																				
久の浜付近	150+	60～120	40～50																																																				
平・磐城・勿来付近	140～160	100～120	30～40	20																																																			
高森・日立付近			25～50																																																				
那珂台地																																																							

N-42 U-CS-P  
高知市西方の城山礫層に就て  
西村 嘉助・奥村 和夫：地質雜，48, 574, 363~364, 1941.  
(1) 高知市西方丘陵上に分布，境川の旧扇状地堆積物，珪質岩礫，大径1 m, ふつう50~80 cm, 城山では基底標高70 m 土，標高100 m 付近でかなり起伏する凹所を埋める。  
室戸岬の中段または上段に対比されよう。

N-43 S-KT-P  
南関東ガス田地帯についての鉱床地質学的研究  
河井 興三：石油技誌，26, 5, 212~266, 1961.  
(1) 房総半島を模式とすの上総層群および下総層群と南関東各地の坑井および地表に露出する同層位層との対比（累層単位）をおこなない，それらの堆積環境から天然ガス鉱床の成立過程を述べている。  
(2) 梅が嶺層上限 } の層進を広く追跡して構造等高線図を描いている。  
成田層群基底 }

N-44 U-S-KT-Q  
Tephrochronological studies in Japan  
Kaizuka, S.: Erdk., 12, 253~270, 1958.  
(1) 火山学・土壌学・考古学・堆積学・層位学・地形学などの諸分野におけるテフロクロノロジーの効用と研究の現状を述べた後，第四紀テフララによる関東地方の地形面の対比とそれらもとづく関東平野の地形発達状況の概略を述べている。

N-45 U-FD-J-P  
日本の新期洪積段丘にみられる波状の地形  
貝塚 泰平：辻村先生記念論集，119~131, 1961.  
(1) 野帆丘陵・石狩段丘・小千谷~片貝付近・根室半島基部・渡美半島・関東平野東部・同西縁部・日向平野・赤石山地南縁・富山平野南縁の段丘について平坦面の規模を述べた後，單元の大きさにより波状地形を“褶曲型”，“中間型”，“龍騰型”の3型に分類し考察を加えた。

N-46 S-TH-P  
田名部周辺の第四系一下北半島北部の第四系，第一編—  
桑野 幸夫：資源研報，40, 29~40, 1956.  
(1) 田名部付近の占地をつくる洪積層（田名部累層・野石層・扇状砂層，褐色火山灰層）および沖積層の記載と第四系の構造を述べたもの。  
(2) 田名部付近で田名部累層の基底の深さは海面下約90 m, その東側は西へ1~1.5' 傾く。

N-39 U-S-KS-P  
九州の最新地史の問題点（九州の最新地史の地質学的研究-IV）  
吉備 次男：地質雜，68, 804, 522~536, 1962.  
(1) 九州の最新地史は，九重の二堆積輪廻からなり，前者はさらに沈降卓越期（滝尾），隆起卓越期（鶴崎）の2小輪廻に分けられ，後者は溺れ谷形成（大在），やや曲陸（鳥郷），隆起（日佐）の3小輪廻に分かれる。平坦面はI~IVに区分され九州内での対比をおこなった後，関東との関係にふれている。  
(2) 平坦面

I 10~100 m → B 面  
低 位 II 30~150 m → M 面  
III 50~150 m (一部海成) → A 面  
IV 200~300 m → T 面  
高 位 V 500~600 m → PN 面  
VI 1,000 m  
(3) 大分層群下半の滝尾重期に台地性安山岩（いわゆる英紫帯岩）噴出，これが鮮新世の準平原を広くおこっている。

N-40 U-CB-P  
三河高岡原礫部の段丘の対比（短報）  
土 隆一・大田 陽子：地質雜，68, 806, 664~665, 1962.  
(1) 豊川と矢作川の中下流部に発達する段丘の対比をおこなうために両川にはさまれた地塊の段丘を調査し4段を区別した。  
(2) 矢作川 本地塊  
— 柳山面 (170~180 m),  
学芸大学面 (60 m 土),  
— 大塚面 (15~60 m) — 足山田面 (上位段丘)  
— 赤根面 (沖積面との比 高3~5 m) — 小坂井面 (中位段丘)

N-41 U-HK-P  
北海道襟裳岬の海岸段丘  
小笠原義勝：地質雜，48, 571, 181~188, 1941.  
(1) 襟裳岬に分布する4段の海岸段丘の中，第1, II, III, IVの段丘について汀線高度の分布・堆積物をしらべ，地殻変動量を推定した。第III, IV段丘形成後の隆起量は半島先端部がとくに大で，また内陸の方が大きい，一種の撓曲運動である。  
(2) 各段丘形成以後，現在までの地殻運動の最大傾斜率  
第I段丘 3.1~1.6×10<sup>-2</sup> 平均 2.3×10<sup>-2</sup>  
第II段丘 4.0~2.0×10<sup>-2</sup> 3.1×10<sup>-2</sup>  
第III段丘 2.2~1.7×10<sup>-2</sup> 1.9×10<sup>-2</sup>  
第IV段丘

N-47  
千葉県船橋 R-1 号天然ガス試験井調査報告  
石和田靖章・品田芳二郎：地調月報 10, 6, 536~540, 1959.  
(1) 飯岡 R-1 千葉県海上部飯岡町平松海岸  
0~100m 4群の砂層または砂泥互層  
70~80m 付近→U6  
300~400m 名洗凝灰質砂層  
400m以下 了ルコラス質砂岩 (古生層)

S-KT-Q  
千葉県船橋 R-1 号天然ガス試験井調査報告  
石和田靖章・品田芳二郎：地調月報 10, 6, 536~540, 1959.  
(1) 飯岡 R-1 千葉県海上部飯岡町平松海岸  
0~100m 4群の砂層または砂泥互層  
70~80m 付近→U6  
300~400m 名洗凝灰質砂層  
400m以下 了ルコラス質砂岩 (古生層)

N-48  
千葉県船橋 R-1 号井の試験結果について  
石和田靖章：地調月報 10, 6, 505~516, 1959.  
(1) 積芝 R-1 号井  
25~97.5m 軟弱泥質砂層  
97.5~333m 砂質泥岩  
333~538m 泥岩  
538~615m 泥質砂泥互層  
615~852m 砂勝砂泥互層  
構造きわめて緩く北西に傾斜  
(2) 対比  
長 南  
柿ノ木台  
国 本  
(U1) →  
梅が瀬  
(U6) →  
大田代  
(KW<sub>9</sub>) →  
(KW<sub>10</sub>) →  
| 黄相田

S-KT-Q  
千葉県船橋 R-1 号井の試験結果について  
石和田靖章：地調月報 10, 6, 505~516, 1959.  
(1) 積芝 R-1 号井  
25~97.5m 軟弱泥質砂層  
97.5~333m 砂質泥岩  
333~538m 泥岩  
538~615m 泥質砂泥互層  
615~852m 砂勝砂泥互層  
構造きわめて緩く北西に傾斜  
(2) 対比  
長 南  
柿ノ木台  
国 本  
(U1) →  
梅が瀬  
(U6) →  
大田代  
(KW<sub>9</sub>) →  
(KW<sub>10</sub>) →  
| 黄相田

N-49  
九十九里ガス田東金試験井について  
石和田靖章・品田芳二郎：石油技誌 21, 1, 13~21, 1956.  
(1) 東金駅南東  
・0m 付近→K<sub>5</sub>7の下部, 200mまで→長南・荏蕨層, 特に140~200m→化石相・岩相ともに長南層。  
・300~400m土→国本層, 370m土→Ku5,  
・400~425mの間に国本層と梅ヶ瀬層の境界,  
400~425mの間より520~530m→梅ヶ瀬層上半(U1~U6間), 730m以下の粗粒砂は大田代層中~下部。

S-KT-Q  
九十九里ガス田東金試験井について  
石和田靖章・品田芳二郎：石油技誌 21, 1, 13~21, 1956.  
(1) 東金駅南東  
・0m 付近→K<sub>5</sub>7の下部, 200mまで→長南・荏蕨層, 特に140~200m→化石相・岩相ともに長南層。  
・300~400m土→国本層, 370m土→Ku5,  
・400~425mの間に国本層と梅ヶ瀬層の境界,  
400~425mの間より520~530m→梅ヶ瀬層上半(U1~U6間), 730m以下の粗粒砂は大田代層中~下部。

N-50  
九十九里沿岸の1断面  
石和田靖章：有孔虫 8, 43~48, 1957.  
(1) 茂原ガス田地域では梅ヶ瀬・国本両層の境は化石層序の上では深海区と浅海区の有孔虫群集の境, この境とU6A付近の *Uvigerina aktiaensis* 帯の下限とは平行している。九十九里平野の地下では上総層群は北方→含砂率が急激に減少し, 砂泥互層は東金付近で尖滅, 代って, 同付近から大田代下部ないし黄相田層帯に砂~砂勝互層が出現, この傾向は鏡子半島まで続く。

S-KT-Q  
九十九里沿岸の1断面  
石和田靖章：有孔虫 8, 43~48, 1957.  
(1) 茂原ガス田地域では梅ヶ瀬・国本両層の境は化石層序の上では深海区と浅海区の有孔虫群集の境, この境とU6A付近の *Uvigerina aktiaensis* 帯の下限とは平行している。九十九里平野の地下では上総層群は北方→含砂率が急激に減少し, 砂泥互層は東金付近で尖滅, 代って, 同付近から大田代下部ないし黄相田層帯に砂~砂勝互層が出現, この傾向は鏡子半島まで続く。

N-51  
上総層群に関する微化石層位学的並びに凝灰地質学的研究  
樋口 雄・菊池 良樹：石油技誌 29, 1, 22~28, 1964.  
(1) 船橋 FR-18 号井の微化石層序によると黄相田層帯の半深海性群集は千葉市以東のものがそのままの形で埋結し, 大田代層帯からは, 徐々に浅海性群集に変化する。  
江東砂層はほぼ大田代層帯と訂正, 各層別の層厚・砂層厚・砂層率・含砂層率・biofacies から上総層群の生成過程を考察し, 関東地方の上総層群の対比を行っている。  
(2) 約1,000mから上上がすすべて浅層水群集→梅ヶ瀬層  
650mから上上に暖温帯化石群が連続→国本層  
400m? から上上が成田層群

S-KT-Q  
上総層群に関する微化石層位学的並びに凝灰地質学的研究  
樋口 雄・菊池 良樹：石油技誌 29, 1, 22~28, 1964.  
(1) 船橋 FR-18 号井の微化石層序によると黄相田層帯の半深海性群集は千葉市以東のものがそのままの形で埋結し, 大田代層帯からは, 徐々に浅海性群集に変化する。  
江東砂層はほぼ大田代層帯と訂正, 各層別の層厚・砂層厚・砂層率・含砂層率・biofacies から上総層群の生成過程を考察し, 関東地方の上総層群の対比を行っている。  
(2) 約1,000mから上上がすすべて浅層水群集→梅ヶ瀬層  
650mから上上に暖温帯化石群が連続→国本層  
400m? から上上が成田層群

N-52  
隠滅する南関東ガス田地帯—草加R-1号井の成功—  
福田 理：地質ニュース 94, 7~11, 1962.  
(1) 草加 R-1 号井 埼玉県草加市瀬崎 (東武伊勢崎線谷塚駅の東方約1,500m), 深度1,781.50m.  
55~550m 付近 砂礫層発達  
280~1,280m 灰~暗灰色泥岩 (ほとんど砂岩を欠く)  
1,580~1,580m 砂礫岩層あり  
1,630~1,635m 凝灰岩介在する泥岩  
1,725~1,725m 砂岩  
1,725~1,781m 細礫岩  
(2) 0~550m→下総層群  
東京の山手台地に露出し, *Buccella frigida* により特長づけられる薄成層が R-1 号井では, 海水準下80m, 加須市の水井戸では約110mのところにある。  
*Uvigerina aktiaensis* 帯→海水準下980m±

S-KT-Q  
隠滅する南関東ガス田地帯—草加R-1号井の成功—  
福田 理：地質ニュース 94, 7~11, 1962.  
(1) 草加 R-1 号井 埼玉県草加市瀬崎 (東武伊勢崎線谷塚駅の東方約1,500m), 深度1,781.50m.  
55~550m 付近 砂礫層発達  
280~1,280m 灰~暗灰色泥岩 (ほとんど砂岩を欠く)  
1,580~1,580m 砂礫岩層あり  
1,630~1,635m 凝灰岩介在する泥岩  
1,725~1,725m 砂岩  
1,725~1,781m 細礫岩  
(2) 0~550m→下総層群  
東京の山手台地に露出し, *Buccella frigida* により特長づけられる薄成層が R-1 号井では, 海水準下80m, 加須市の水井戸では約110mのところにある。  
*Uvigerina aktiaensis* 帯→海水準下980m±

N-53

S-KT-Q

春日部層序試鑽(予報)一坑井地質を中心として一  
福田 理:地質ニュース, 100, 1-16, 1962.

(1) 春日部GS-1号井 埼玉県春日部市増富地区(東武鉄道豊春駅南東方約1km),地盤高  
5.41m, 深度3,103m

・A層 3~27m 沖積層, 青灰色砂質粘土, 細~中粒砂, 貝, 有孔虫  
・B層 27~424m

{ B<sub>1</sub>層 27~122m 軽石質粗粒砂岩を主, シルト岩夾

{ B<sub>2</sub>層 122~326m 礫岩とシルト岩の互層

{ B<sub>3</sub>層 326~424m 主に礫質粗粒砂岩, シルト岩・礫岩・軽石凝灰岩を夾在

・C層.....深度600m以下の有孔虫は綱目層群のものに近い

・D層.....都幾川層に対比されるもの

(2) 対比 A層→有楽町層

B層→成田層群

C層→上総層群 (422~1,041m)

D層→都幾川層 (後期中新世)

(3) C層は福田(1964)によれば, CはC<sub>1</sub>~C<sub>4</sub>に区分されC<sub>2</sub>/C<sub>3</sub>間に不整合が想定される。

N-56

S-CB-Q

蒲原層序試鑽について

石和田増章:地質ニュース, 115, 1-9, 1964.

(1) 蒲原GS-1号井 (佐渡山) 深度3,701.40m  
0~10m 表土

10~60m 粘土・砂質泥を主とし, 中~細粒砂を介在, 木質片も多い

60~116m 灰色粘土と中細粒砂の互層, 一部に多量の木質片

116~494m 灰~青灰色泥岩, 細~粗粒砂, 含礫砂, 礫の互層, 一部に凝灰岩・炭質  
物・木質片を含む泥岩, 116~123m, 369~373mにややまとまった礫・含礫砂層, 270~  
340mは泥岩卓越

494~845m 泥岩・泥質砂岩と砂層, 一部に炭質物介在, 貝化石 548~557m, 736~  
745, 781~787mにやや著しい礫・含礫砂, 836m以下は泥岩と白色凝灰岩互層

(2) 対比 0~10m 表土, 10~123m 沖積層

123~845m 魚沼層群, 845~1,200m 和南津層

1,200~1,520m 灰爪層, 1,520~2,015m 西山層

2,015~3,703m 椎谷層, 619m→G<sub>1</sub>層上限

734→G<sub>2</sub>層上限, 992m→G<sub>3</sub>層上限

N-55

S-FD-CB-Q

新潟地層を予察して  
須貝 貫二・佐藤 茂:地質ニュース, 120, 1-19, 1964.

(1) 礫層をI~VI層としV層の下限付近を第四紀層と第三紀層の境としている(VI層=C<sub>2</sub>あ  
るいはP層とされるガス層),  
第四紀層の厚さは新潟東方松浜で400m, 新潟市内500~600m, 内野付近がもっとも厚くて800m  
土, 内野地区を底とする大きな向斜構造, 松浜で東新潟背斜,  
沖積層の厚さは東方で100m, 西方で240m(ただしII層を沖積層の基底砂礫層としている),

N-54

S-KT-Q

藤岡層序試鑽(予報)一坑井地質を中心として一  
福田 理:地質ニュース, 114, 1-10, 1964.

(1) 群馬県藤岡市森町大字滝川地区内 地盤高71.21m, 深度3,004.0m,  
A層 3~30?m いわゆる沖積層(扇状地性堆積物)NF,  
B層 30?~280m いわゆる洪積層, 礫質, ときに青灰色シルト, 含有孔虫化石  
C層 280~595m いわゆる上総層群, 礫質, ときにシルト(扇状地性堆積物)  
NF.

(2) 対比 B層→春日部B層, 屏風が浦層・地蔵堂層・大津層・宮田層とくに本層および  
後2者にAmphistegina radiataが共通.  
C層→春日部C層(C<sub>2</sub>部層以上)→様式地の上総層群中部.

N-57

U-S-KT-P

佐野市周辺の第四系について

阿久津 純:宇大芸芸研論, 13, 113-121, 1964.

(1) 地形区分

山地.....300~150m 古生層.

丘陵.....65~50m 古生層, 岡東ローム.

段丘 { 城東面.....丘陵面との比高70m, 古生層をおおう段丘礫層.  
犬伏面.....標高35~20m 南に傾斜, 犬伏面内の丘陵上標高40~60mに城山礫  
層.

礫層.....犬伏面・沖積層の下に分布, 珪藻化石から淡水~汽水性の水域に堆積.  
城山礫層→多摩面礫層成礫層  
礫層→成田層群あるいは下末吉層.

(2) 佐野市礫層でのボーリング.  
深度53mで礫層層ベース, その上層厚約45m, 小山市周辺(宝木面)の深井戸(栃  
木県11,952)では地表下約40~85mに海棲貝化石をふくむ砂泥層, 礫層はこの堆積  
盆地のより陸域に近接した地域の堆積相.

N-58 FD-CB-Q

最近の探鉱成果、新潟・長野地区  
池辺 様：石油技誌、18、4、1~12、1953。  
(1) 新潟第三系標準層序（一部）  
J 鱒ヶ峯層  
I<sub>2</sub> 魚沼層群 { 小国層 }  
I<sub>1</sub> 塚山層  
H<sub>2</sub> 灰爪層群 { 和南津層 }  
白岩層  
東山・中央・寺泊・頸城・難波山の各褶曲隆起帯は魚沼以後の  
運動によって現在の構造が伏定された。長岡・柏崎・高田の沈  
降区は魚沼層の地相的堆積区で、魚沼以後の褶曲はあまり受  
けていない。寺泊以前の隆起構造はこの沈降区にかくされてい  
ると考えられる。

N-61 S-CB-Q

北蒲原ガス田加治川試掘1号井について  
石和田茂彦・本島公司：石油技誌、22、2、16~20、1957。  
(1) 新潟市島見町島見部落の加治川橋南端  
深度707m  
420m grey clay NF  
445 dark brownish grey tuffaceous lignitic clay  
654 grey tuffaceous sandy silt  
675 soft greenish grey very sandy silt  
705 soft grey muday very fine sand  
(2) ・G<sub>5</sub> 432~440m、447~470m、555~565m。  
・G<sub>6</sub> 570~580m、586~605m、611~618m。  
浅海型有孔虫群集

N-59 S-CB-Q

新潟ガス田の地質  
伊田 一善：地調月報、6、6、327~342、1955。  
(1) 新潟市内に広く分布する砂礫層の層序。  
沼壁層  
潘原層  
魚沼層群”  
”和南津層”  
”灰爪層”  
G<sub>6</sub>  
G<sub>1</sub> (一番層)  
G<sub>2</sub> (二番層)  
G<sub>3</sub> (三番層)  
G<sub>4</sub> (四番層)  
G<sub>5</sub> (五番層)

N-62 S-CB-Q

新潟ガス田舞潟深掘井調査報告  
石和田茂彦・本島 公司：地調月報、9、2、117~122、1958。  
(1) 舞潟 R-1  
信濃川と中ノ口川との合流点から約1.8km上流の信濃川北岸  
G<sub>5</sub>層以下約400m間のガス層の探索 深度1,000m  
(2) 海面下 150m土→G<sub>6</sub>、220m土→G<sub>5</sub>、  
400m土→G<sub>6</sub>、610m土→G<sub>5</sub>。

N-60 S-CB-P

天然ガス調査報告、1957  
新潟県  
(1) 新潟市一中越地域にかけての平野部の層序  
沖積層 NF 30~75m  
沖積層 G<sub>1</sub> 粘土・砂・礫・埋木・炭質物・暖流系貝化石  
浸漬層 G<sub>2</sub> 層厚 最大200~250m(今町)、新潟市付近150m  
小国層? G<sub>3</sub> 海積有孔虫化石、層厚は平野部で270m土  
I<sub>2</sub> 塚山層 G<sub>4</sub>→1  
I<sub>1</sub> 魚沼層群 和南津層 G<sub>5</sub>  
G<sub>6</sub>  
? 灰爪層 G<sub>6</sub>-1  
H<sub>2</sub> G<sub>7</sub>

N-63 S-CB-Q

焼津ガス田  
伊田 一善：石油技誌、20、1、14~20、1955。  
(1) A<sub>1</sub>層……深度 0~40m 主に砂・礫、若干の粘土質層をももなう  
砂・砂質粘土・粘土質砂  
A<sub>2</sub>層…… 40~70m 砂・砂質粘土  
A<sub>3</sub>層…… 70~100m 暗灰色粘土  
A<sub>4</sub>層…… { 100~120m 砂礫 }  
産ガス層 G<sub>6</sub>、G<sub>7</sub>

N-66 S-HT-KK-Q  
 大阪湾の地質  
 森田 和夫・鎌田 清吉編：62, 1964.  
 (1) 1962年6月～7月にかけておこなわれた放射式音波探査装置による大阪湾の地層調査の結果をまとめたもの。  
 沖積層基底の放射面は長さ5m以内で、全測線に沿って追跡される。沖積層の最も厚い部分は35mで大阪湾のほぼ中央で等層厚線の伸びの方向は大阪湾の長軸方向に一致。淀川水系と淀川水系とは70m土で分流し「古大阪川」となって南下、由良瀬戸へぬける。薄底の50m以深の地層には沖積層は分布しない。大阪湾東岸に沿って「泉佐野推定断層」を考えると音波記録に現われる傾斜不整合は大阪層群と瀬池谷層との間のものとなり、また瀬池谷層は大阪湾全域に分布していることになる。  
 (2) 大阪層群基底の深さ。  
 鳴野……430m, 港区……690m,  
 測線No.3, No.8, No.15, No.16-1の地質断面図には、大阪層群が表われているのでその上面の深度を読みとることができる。

N-67 S-J-Q  
 本邦天然ガス鉱床の地質学的研究  
 兼子 勝：地質報, 169, 62, 1956.  
 (1) I 緒言  
 II 本邦天然ガス鉱床の地理的分布  
 III ガス田各論  
 23産ガス地域の地質とガスの性質、水質、埋蔵量などの記載  
 IV 天然ガス鉱床の地質学的考察  
 1. 天然ガス鉱床におけるガス曹・帽岩および母層  
 2. ガス胚胎層の地質時代と堆積環境  
 3. ガス水比およびガス質・附随水  
 4. ガス鉱床の形成と破壊の一般運動  
 V 結論  
 (2) 第四紀層の深さ  
 恵庭町加……500m (海成の砂・礫)  
 五能線以北の津軽平野……150m以上 (沖積層)  
 象潟ガス田……100m以上海成第三系, それ以上は沖積層  
 射水ガス田 (旧海老江村植ヶ崎・練倉)……200m  
 諏訪市淡崎……370m以上, 岡谷市下浜……400m +  
 大杜神門付近……200m, 久木……55m

N-64 S-HK-Q  
 札幌(北海道水理地質図解説明書 第8号)  
 山口久之助 他8名：1964.  
 (1) 石狩低地帯の地質  
 鮮新統は野幌丘陵に背斜構造があり、その西側は粗粒層、東側は細粒層で構成される。第四系は東側のものは支笏火山活動期以前のものでは北部で薄く、南部で厚く海成相、支笏期以後は非海成、西側のものは支笏期以前は海成、東側より粗粒、支笏期以後は粗粒細粒を含む。  
 (2) 東部付近……500mまで野幌層  
 幌 向……野幌層の層厚310m  
 築寒～手稲……深度50mで第三系、東方～東北方に深まっている。  
 局地的に150m以上の地域あり。  
 支笏付近……50～70m  
 当別川以西の河川下流域……70～100mに古扇状地堆積相

N-65 S-CB-Q  
 伊勢湾北部臨海地帯の地質構造—瀬尾臨海部の地質構造—  
 松沢 勲：都市地質調査報告書1(伊勢湾北部臨海地帯の地質), 1-4, 1962.  
 (1) 層序区分  
 A → 南陽層 → 沖積層  
 D<sub>1</sub> → 大曾根層  
 D<sub>2</sub> → 熱田層  
 D<sub>2</sub> → 八事層  
 D<sub>2</sub> → 南山層  
 P → 矢田川果層 → 鮮新統  
 中新統  
 基盤岩類  
 矢田川累層上縁の深さ(海面下) → 傾斜15°/10<sup>-3</sup> 以上  
 国鉄熱田駅 120～130m  
 木管川河口 300m以上  
 名古屋南部臨海地域 130～150m  
 弥富町付近 300～350m

<p>N-68 日本の新生代の堆積区とその変遷(1) 瀬戸内地質区の特性と変遷 笠間 太郎・藤田 和夫: 新牛研, 24~25, 11~19, 1957.</p> <p>(1) I 瀬戸内地質区の範囲と特性 II 新生代層の区分と対比 III 地質構造と火山活動史 IV 古地理的にみたら瀬戸内の変遷 G~Hは基盤が上昇し全般的に陸化, 海退→前刺, 準平原化(中国脊梁準平原化進む) 室生, 竜雲, 都野層群の堆積 H未から沈降運動, Iに各地に淡水湖, I<sub>1</sub>末に第二瀬戸内海, IにはN-S性の基盤褶曲著しく, 火山活動は深紫燐岩の大部分, 寒霞溪燐岩, 三笠山燐岩など, Jに六甲変動のクラリアイマックス, 信太山層群は堆積面を残す.</p> <p>(2) 構造線の構造期別統計 F<sub>1</sub>以前……21%, G~H……23%, I~J……55%</p>	<p>N-71 九州の中・後期新生界の堆積・構造的特性 首藤 次男: 新牛研, 28, 8~18, 1958.</p> <p>(1) D~F<sub>2</sub>を第1輪廻, F<sub>3</sub>~H<sub>2</sub>を第2輪廻, I<sub>1</sub>~I<sub>2</sub>を第3輪廻とする3段階の地史を認め, 堆積盆地の形成と構造運動をまとめている.</p> <p>(2) I期は南九州では堆積盆地は大きく西に移動, 末期は輝石安山岩質の火山活動, 北西九州では平戸層 640 m (大部分非海成) 上部は輝石安山岩, 中九州では断層部では, I<sub>1</sub>・100mの地層生成, 他の曲動による沈降域では450~650mの地層, 下部で有明右安山岩層, 上部で輝石安山岩質の活動, 粗粒岩が多いが礫は円礫され, 後背地形は低平であつたらしい.</p> <p>第3輪廻の運動はほぼNSとEWの軸をもつ地質斜的隆起.</p>
<p>N-69 日本の新生代の堆積区とその変遷(2) 山陰地域 多井 義郎: 新牛研, 24~25, 20~27, 1957.</p> <p>(1) 山陰地方の海成新第三系を小型有孔虫による微化石層位学的に考慮し, 対比および古地理についてまとめている.</p> <p>(2) H<sub>1</sub>には上昇浅海化し, 島根半島の褶曲強まり, 意構造完成期に入る. アルカリ岩活動.</p>	<p>N-72 日本地方地質誌 九州地方 松本 達郎・野田 光雄: 朝倉書店, 424, 1962.</p> <p>(2) 多良岳の基盤は深紫火山岩類で, その下部礫層は大部分輝石安山岩質の台地性溶岩があつた. その上に整合に阿蘇石安山岩質の台地性溶岩があつた.</p>
<p>N-70 日本の新生代の堆積区とその変遷(6) 東北地方の堆積盆地の変遷史 北村 信: 新牛研, 26, 1~15, 1958.</p> <p>(1) 東北地方の新第三系をI~Ⅵの層群に分け, 地域を日本海沿岸, 出羽丘陵および内陸盆地, 脊梁山脈地域, 北上河谷および郡山盆地周辺の4地帯に分けて, 岩相, 化石, 対比について述べた後, 羽越地向斜の変遷とそれにもなう古地理の変化を概観している.</p> <p>(2) 層群ⅣとⅤの間の岩相変化はもともと著しく, 脊梁山脈は地質斜化し, Ⅳ層群以下の地層は褶曲し, 同時に出羽丘陵, 羽越山地も陸化して海成は西方に押しやられる. Ⅳ層群の堆積期には海成はさらに西方へ移動, 日本海沿岸地域の分化, Ⅳ層群時は全域陸化, その陸成新世末期の意構造運動期により東北地方の構造は完成.</p>	<p>N-73 西両日本太平洋岸の段丘変位と上部新第三系の構造の関係(演習) 土 隆一: 地質雑, 70, 826, 398, 1964.</p> <p>(1) 掛川・曾我層群の時代(鮮新~洪積初)の沈降の中心部が小笠時代(洪積世前期)の末期から隆起に転化したし, 沈降の中心はさらに西方へ移動して現在にいたつている. 同様に相良時代(中新世後期)の沈降の中心が掛川時代の初めに西方へ移動し厚い礫の内互層をつつた.</p>
	<p>N-74 礫層断層の意義(演習) 首藤 次男: 地質雑, 70, 826, 405, 1964.</p> <p>(1) 大分層群(滝尾層・鶴崎層)は礫層断層構造を示し, 低位平坦面とは無関係で基底的性格をもつ. 九重層群は水平で薄い地層で海成段丘, 河岸段丘の形成に直接参加している. したがって, 九州における最近の曲線的運動は大分層堆積後に開始. それに先だつて礫層断層によつて代表される著しい展張性断層運動(N-SまたはE-W性)があつた.</p> <p>落差は数10~数100mでいど.</p>



**N-75** U-KK-Q  
 紀伊半島南部海岸の段丘について (漢宮)  
 山田 純：地質雑報，70，826，406，1964。  
 (1) 熊野市・御坊間に発達する海岸段丘は高位・中位・低位の3段に分けられる。宇久井・南部を結ぶ線以北の高・中位段丘は海成で南へ向い高く比高も大。この線以南の高位段丘は非海成。海岸段丘の転位は東西両岸で対称的，これはE-W性の構造線群の運動に影響されたものと考えられる。

**N-76** U-FT-CB-Q  
 伊那谷の段丘・段丘面の対比 (漢宮)  
 松島 信章：地質雑報，70，826，406～407，1964。  
 (1) 伊那谷の段丘は浮石層と面との関係により5段に分けられる。  
 ① 最低位面  
 ② 赤色浮石P<sub>1</sub>がなく，それ以上の波多ロームをのせる (鳥井原など)  
 ③ 白色浮石P<sub>1</sub>を水成で面上にのせるもの (大泉面など)  
 ④ P<sub>1</sub>は完全に風成，その下の上山田ロームまでのせる (大道原など)  
 ⑤ 伊那層堆積面  
 ⑥ 面形成後プロック運動がおこり，天竜峡以南と上伊那南部は上昇し，天竜峡地域は沈降，運動には断層をとめない，⑥面まではそれらの断層でまきられている。

**N-77** U-S-CB-Q  
 米山海岸の第四系について (新潟県の第四系 そのIV) (漢宮)  
 渡辺 勇・長谷川 正：地質雑報，70，826，409，1964。  
 (1) 嵐波段丘……分布せまく，堆積物うすい。  
 岩野段丘……分布広く，平坦面顕著。  
 青海川段丘……丘陵状。  
 各段丘は米山海岸中央部で高く，高田平野・刈羽平野に向かって徐々に低くなる。これは岩野段丘形成後の基盤運動による。

**N-78** S-CS-Q  
 日本海山陰沖海城の海成地質  
 佐藤 任弘・小野 晃司：地質雑報，70，827，434～445，1964。  
 (1) 大陸棚外縁……250～500m  
 隠岐連……300～400m 大和堆……300m±  
 隠海平坦面……900m面  
 900～1,700m面 ←→ 他地域の800～1,500m面 (海庭谷末端面)  
 1,900～2,700m面 ←→ 1,800～2,200m面  
 隠岐堆・大和堆の岩石は新第三紀の安山岩質火山岩類，後期中生代火山岩類と思われる流紋岩類，秩父古生層。  
 海庭谷の沈下した時期は鮮新世末以後，900～1,700m面を鮮新世末の侵食基準面とすると南日本海の沈降はこのころまでにははじまっていた。山陰沖の面が他地域より200～300mずつ深いのは，大陸棚形成 (Würm) 以後に山陰沖ではとくに沈降運動が著しかったため。

**N-79** U-CB-P  
 新潟県西頸城郡名立町付近の段丘面と洪積世火山灰 (ローム) 層  
 大草 重康・福高 幹男：地質雑報，70，828，517～518，1964。  
 (1) 海岸段丘 (標高50～60m面，60～150m面) 火山灰層におおわれる。  
 桑取川の河岸段丘：現河床からの比高20m，30m，40m，50m  
 50m面は海岸段丘面に連続，火山灰はこの面以上をおおう。  
 名立川流域の河岸段丘：3～4段，比高35m以上の面に火山灰がのる。  
 これら火山灰にともななって必ず段丘堆積物中には，安山岩の角礫が存在。

**N-80** CB-R  
 富山県射水平野における沖積統の花粉学的研究—北陸における沖積統の研究(I)—  
 藤 剛雄：地質雑報，71，833，39～55，1965。  
 (1) 放生津岡周辺の沖積層を7層に分け，25個の試料につき花粉分析をおこなった。これより知られる気候変化は，下部泥層 (-18～-28m) の時代は現在よりも温暖→上部泥層 (-2～-8m) 下部の時代は現在よりもいくらか寒冷→上部泥層上部の時代は現在よりもやや冷湿→やや温暖化して現在にいたる。  
 (2) 射水平野の階梯期 (海面上昇のmaximum) の貝塚の標高は3.5～4.0mで，他地域 (6～8m) にくらべて低い。これを地盤沈下によるものとすると5,000年間に4m (0.8 mm/year) の速さとなる。  
 現海面下5mに埋没林 (編文中期～弥生後期)。

N-81

KT-P

成田層の層相と下底の地形との関係一霞ヶ浦北岸および北浦周辺の第四系一  
眞野 勝友：地質雑、71, 835, 155~166, 1965.

(1) 成田層群 小島(1962)千葉県地蔵

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

成田層群 成田層 → 常総粘土層

N-84

S KK-O

六甲山地と大阪盆地(演習)  
藤田 和夫：地質雑、71, 838, 341~342, 1965.

(1) ボーリング資料・地質調査・重力測定結果から大阪盆地は、大阪湾を中心とする狭長の  
大阪盆地と、布地山を中心とする布地盆地と下里丘陵の北側から室塚方面に延びる細長い陥没  
帯におかれる。この盆地分化は大阪層群下部では不明瞭だが上部では、次に現盆地形に順  
応する分布となり、南北性の軸をもつ構造が明瞭になる。満池谷層堆積後の断層運動はとくに  
大きく、現在の地形をほぼ完成した。

(2) 大阪層群の残存する最高位は六甲山地花原付近の550m、この層群はOD-1ボーリングで  
地下550m→1,100mの相対的転位、菜盤面をとれば2,400m。

N-85

U-S-CB-KK-Q

伊勢湾周縁の地盤問題(演習)  
竹原 平一：地質雑、71, 838, 345~346, 1965.

(1) 地質構造的にみると濃尾平野はすくなくとも第三紀以後、西ないし南西へ傾動運動を統  
括している。伊勢湾西側の第四紀層は一般に東傾斜、東美半島・知多半島の第四紀層は北傾斜、  
(2) ・沖積層のもっとも厚いところは木曾三川の河口付近で、厚さ50m(長島温泉)。  
・熱田層topの深さ：庄内川河口11.7m, 日東川右岸19m, 富田中学校22.5m, 飛島小学  
校36.8m, 蟹江町観音寺33.6m, 長島温泉71.6m, 四日市海岸10~20m, 長良川河口30~40m。  
知多半島基部における常滑層群(鮮新統)ベースの不整合面の深さ：488m。  
・重力異常から求められた濃尾平野の基盤岩の深さ：木曾川河口で2,100~2,500m, 名  
古屋港1,500~1,600m, 知多半島基部で確認された古生層の深さ：776m。

N-83

U-S-FD-CB-Q

地質時代の変位からみた新潟地震時の粟島の変動(演習)  
中村 一明・松田 時彦：地質雑、71, 838, 358, 1965.

(1) ・新潟地誌時の粟島の傾動 300'の方向に56'  
・25mの海成段丘 " 約20' (8~9×10<sup>5</sup>年前)  
・50~70mの海岸段丘 " 約100' (1×10<sup>6</sup>年前)  
・海成泥岩・粗粒玄武岩床など " 10~20' (2×10<sup>7</sup>年前)

これらのことから粟島地塊は1分/500年の割合で約300'の方向に10<sup>5</sup>年以來傾きつつけてき  
たと考えられる。

N-90 S-KT-P  
 栃木県南部の地下地質  
 河久津 編：宇大工学部誌 第2部15, 30-46, 1965.  
 (1) 栃木県水代, 野木, 小山のボーリング試料の注滿化石の分析結果と柱状断面から、この地域の洪積層を3サイクルにわけた。  
 A A, Bサイクルはそれぞれ、淡水→海水→淡水の環境の1サイクルを示す。Aは  
 B 関東ロームとの関係から下末吉層に、Bは暴風が浦層に対比される。  
 C  
 (2) A層の基底深度は、水代で40m, 野木 51.5m, 小山 30m (地表下)。  
 B層の基底深度は、水代で113m, 野木 126m, 小山 95m。  
 C層は基底が出ていない。

N-87 S-TH-Q  
 秋田県北方地域の地形ならびに第四系について  
 狩野豊太郎：秋田大鉱地研報 33, 1-12, 1965  
 (1) 90地点余りのボーリング資料にもとづいて、秋田県北方の雄物川～新城川の沖積低地の地下の第三紀層表面の深さを描いている。第四系(沖積層らしい)によって埋積された60～80mのS字状の谷(“先雄物川谷”)が見出された(新第三紀層表面は鮎川層からなる)。  
 (2) 第四系のベース(岡田地塊の不整合の深さを含む)。  
 ・土崎 R7 ..... 97m, 飯島 SK-1 ..... 94m。  
 ・道分 SK-1 ..... 122m, 天王 AK-1 ..... 155m。

N-91 S-KT-Q  
 Natural Gas geology of the southern Kantō region, Japan.  
 Kawai, K.: Agenda Item VI, Contribution from the Government of Japan to ECAPE 3rd Petroleum Symposium, 1-18, 1965.  
 (1) 河井 (1961) にその後の資料を加えて英文で要約したもの。  
 横浜一茂原, 八幡一鹿島間の柱状対比図(有孔虫化石帯による)がある。  
 上総層群の表面 } のコンタクトが修正されている。  
 成田層群のベース }

N-88 S-CB-Q  
 表層地質図および説明書「富山」5万分の1  
 藤井 昭二：(富山県高工労働部), 42, 1962.  
 (1) 堆積物を①未固結堆積物, ②半固結堆積物, ③固結堆積物に分けている。  
 第四紀層は①～②, 第三紀層は②～③に入る。①については次式の%により4分している。  

$$a b = \frac{S+cg}{1} \times 100(\%)$$
 ただし、aは1が第一礫層までの深さ、bは1が30mまでの深さ、Sは砂の厚さ、cgは礫の厚さ、②③は砂礫層や泥岩層の層準により細分している。また、岩片のかたさ a-e, 岩体のかたさ 1-5 などの等級をつけ、たとえば、D,d,e-1 (Dは洪積世の意)と表わしている。  
 (2) 地質柱状図および地質断面図により、洪積層の基底の深さを知ることができる。

N-92 S-CB-Q  
 濃尾平野(2)超深層地下水について一  
 平野地質研究グループ濃尾平野班：地質ニュース, 143, 18-27, 1966.  
 (1) 濃尾平野では、ミンデルーリクス間水期前後の堆積物である八事・唐山両層とその下に横たわる下部更新統一鮮新統である奄芸層群との間に傾斜不整合が認められる。これをさかいとして深層地下水と超深層地下水とを分けるのが便利(関東では暴風が浦層と上総層群の間)。  
 (2) 唐山層と奄芸層群との不整合面の深度 奄芸層群のベース  

唐山層 R <sub>1</sub> ..... 341m	1,052m
長島 R <sub>2</sub> ..... 269	1,431
R <sub>3</sub> ..... 296	1,656
R <sub>4</sub> ..... 271	1,455
R <sub>12</sub> ..... 249	1,360
R <sub>10</sub> ..... 267	1,370

 (3) 市原 (1966) によれば、奄芸層群上部は大阪層群下部に対比されるので、Plio-Pleistocene境界は奄芸層群中～上部のうちどこかに引かれる。したがって、唐山層の下底または矢田川 (=瀬戸) 層群の上面をとった場合と比べて、第四紀沈降水量が相当異なる。

N-89 S-J-Q  
 天然ガス一調査と東濃  
 金原 均二・本島 公司：朝倉書店, 361, 1958.  
 (1) I. 天然ガス, II. 水溶性ガス鉱床の調査法, III. 水溶性ガス田の開発, IV. 本邦のガス田, V. 油田ガスと炭田ガス。  
 IV において、水溶性ガスは非水性のガスの産出層、ガス水の性状についておむね果別に詳しく記載している。関東南部のものは南関東水溶性ガス鉱床として一括してある。  
 (2) 特に、南関東ガス田について従来の坑井資料がまとめてある(第39表)。

N-93 U-KK-P

伊勢湾西岸の奄美層群層序  
竹原 平：横山記念論集，45-50, 1961.

(1) 従来、報告のあった各地域の奄美層群を20枚以上の凝灰岩の互層により対比し、*Stegodon etchanioides*, *Stegodon akashiensis* の産出層準を凝灰岩層との関係で明らかにした。

(2) 奄美層群の全體的な分布が示されているので、その上限をPlio-Pleistocene境界に近いものとして、降起層を求めることができ。

(3) 糸魚川浮子からの私信(1966年に聞)によれば、Ic, Toタフ(横山卓雄)が大坂のPlio-Pleist.境界付近で、これは竹原(上記)の大泉層上部~米野層、亀井(1962)は *Stegodon akashiensis* の出る大泉・幕間層をPleistocene.植物遗体では *Metasquala bed* は米野層からは報告なし、結局、大泉層上部ないし米野層の中にPlio-Pleist.境界があるらしい。

N-94 S-FT-TH-Q

山形盆地の地形発達  
藤原 健蔵：地理評，40, 10, 523-542, 1967.

(1) 山形盆地の地形と地下構造を、ボーリング資料・物理探査資料を使って検討し、発達過程を考察している。鮮新世末~更新世初めに盆地東縁にNNEの山形断層を生じ、断層盆地となり、湖底化し、それが扇状地によって次第に埋められていった。

(2) 盆地基底深度  
・馬見川測線 320m (海拔 -175m), 断層基部の西側 410m (海拔 -325m),  
・立谷川測線 225m (-80m), 乱川測線 210m (-90m),  
・野川測線 120m (0m), 成沢測線 310m (-180m).

N-95 S-KT-P

常総台地における成田層群の水文地質学的検討—深層地下水の定量化への一試案—  
柴崎 達雄・大野 勝次：地球科学，87, 30-36, 1966.

(1) 上浦両方の台地の深井戸資料にもとづいて、深度100m以下の成田層群の層相を分類し、層相比率を求め、地下水滲出量、貯存量、比透出量を推定している。

(2) 深井戸ストレーナーの深度分布図より本地域中央部の新治~桜~豊里地域の成田層群にすくなくとも100-200m以深に達している。

N-96 S-KT-Q

房総南端—新第三紀層—  
成瀬 洋・杉村 新：地質雑報，57, 675, 511-526, 1951.

(1) 館山周辺の丘陵を構成する中新統~鮮新・洪積統の地質の記載。  
(2) 豊房累層は、房総中北部の黒海不整合以上の上総層群に対比される。上総層群が漸層中部(U6タフ)以上はPleistoceneと考えられるので、ごく大まかに考えて豊房累層(原さ1,200m+)の上半部はPleistoceneに属する可能性が考えられる。したがって、1,200÷2=600mをPleist.とみなし(最大値)沈降量を求めた。

N-97

京都盆地西南部、西山山麓の大坂層群—近畿地方の新时期新生代層の研究。その7—  
西山団体研究グループ：地球科学，21, 5, 1-10, 1967.

(1) 京都盆地の西側丘陵に分布する海成相をふくめた大坂層群を、火山灰層の追跡と海成粘土層をカギにして詳細に調査し、地質図を完成した。これより、京都盆地が堆積盆地となったのはMa.1層準に相当する時期で、この頃、京都盆地へ海の侵入があった。Ma.7または、Ma.8以後六甲変動があった。京都盆地は南北性の断層によって陥没し完成した。本地域の大坂層群は最上部まで断層で切られ褶曲している。

(2) 地質構造図より、Ma.2海成粘土の分布高度は最大150m+(Ma.2は大坂層群下部の上部)にあり、Plio-Pleist.境界は下部の基底と考えられている。

O-1 U-S-FD-HK-Q

鋼路平原とその周辺の地形発達史  
岡崎 由夫：地理評，33, 9, 462-473, 1960.

(1) 地質および地形の調査から発達史をまとめたもの(試雑資料も利用)。別表のような種々の海成、河成の地形面(DI, ~A)はおもに第三系の向斜が横たわらぬ平原に求心的にくり返された海成、河成、海退により生じたが、さらに地形面の分布及び特色からみると、造陸運動の影響をよよくうけていて、その中心は洪積前期には西に、後に東南部にうつった。すなわち地形面にかこまれた堆積盆地である。なお、現在遼原では以前の造陸運動の軸部に陵下軸をおいた湾曲運動がおこなわれている。

(2) 地形面の分布、高度、山海水面、地盤運動の性質などは資料らん参照。

	W	E	
根字段丘の汀線(Du1)	120~80m	沖積面もE~SEへ増傾斜運動	
御路段丘の汀線(Du2a)	40m(飯日の丁段口)	(水系、湖沼の分布、面の傾きから)	
白鷺段丘の汀線(DI)	200m	鋼路群の堆積面	
河成段丘I	河床からの比高 110m	何れも平行に傾き	西に偏在
II	60~90m	あるいは、沈下する	
III	40m	これらの段丘は東および東南に増傾斜	
IV	10~20m	IIIの東への傾斜9.4×10 <sup>-4</sup> (傾斜不明?)	
		VI	6.2×10 <sup>-4</sup>
		沖積面	5.3×10 <sup>-4</sup>

新しいものほど小さい。

O-2

S-CB-R-LP

名古屋港付近における沖積層下底面の地形  
井岡弘太郎 幸島寿太郎：地理評, 32, 9, 457-468, 1959.

(1) 試錐資料をもとにして沖積層下底面の地形を分類し, その形成時代, 海面変化との関係  
を考察した。沖積層下底面の判定方法は, 軽石の有無, N値, 第一礫層の層面深度などをを用いて  
いる。

京浜地方その他の比較から, これらの発達が海面変化によることを推論した。

- 地形 0 ~ 10m 沖積世中期以後の海蝕面
- 20 ~ -30m 中位面, 洪積世後期に河川侵蝕により形成
- 40 ~ -55m 下位面, 最終氷期の最低位海水時における

(2) 洪積世末期頃の海面変化

- 沖積世前, 木曾川穿入谷の谷底
- 現海面に近い 大曾根層堆積期
- A 海退 現海面下30m + a (おそらく10m以下) に停滯 中位面の形成
- B 海進 最終氷期最盛時 海面は-80m 谷中谷の形成
- 海進 とくに沖積世中期以後, 急速な海進 上位面の形成(海蝕)

O-3

U-FT-CB-Q

木曾川, 矢作川流域の地形発達—現地シンポジウムにおける討論と今後の課題—  
貝塚 英平・木曾 敏行：地理評, 37, 2, 189-192, 1964.

(1) 両地域及濃尾平野東縁の段丘の対比, 鮮新世末の地層とその堆積面, 小起伏侵蝕面の形成  
環境, 地形発達史, 断層運動の時代などについてのまとめと問題点の指摘, 他の論文に出てい  
ることはここでは資料として記載しない。

名古屋付近の地形図

- 八事面 100m → 70m
- 120

覚玉山面 40m

熱田面 20m

大曾根面 第一礫層より古いもの

地殻運動と関係した問題点  
・ 阿寺断層の形成期 中位面形成後とする説と高位面形  
成後中位面形成前とする説とあり, その時期及速度につ  
いて未だ未解決。

・ 恵那山断層 土岐砂礫層堆積後にも活動したが変位  
量不明, 野風山断層より古く, 土岐砂礫層堆積当時す  
でにそびえていた可能性あり, しかし古地理について問  
題点多い。

旧江線: 熱田面 20m これと同時に各務原 60m, 濃尾平野の NNE-SSWの傾動をあらわす。  
なおこの時期はRiss-Würm間氷期らしい。

断層: 恵那山断層 主形成期は不明, 土岐砂礫層堆積後にも活動した証拠あり。  
飯坂, 埴川断層 孝田面形成後もわもわもかではあるが変位している。なおこれとはほぼ平行  
する断層が越戸面をきって変位を与えている。走向 N30°E 70° SE  
へかたむく。落差 3 m

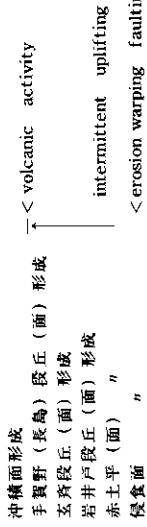
O-4

U-FT-CB-Q

高那盆地の地形発達について  
木曾 敏行: 地理論, 32, 7, 365-373, 1959.

(1) 土岐砂礫層を key bed として野外調査を主として地形発達史を考察, 恵那盆地の形成およ  
び形成後の地殻運動に論及,

地形発達史は下の通り (土岐砂礫層堆積後)



(2) 恵那盆地をかこむ断層 { 阿寺断層 崖: 比高 500 m 前後 (砂礫層の base の高さから) の

逆断層崖の上と下との対比が不明なので断層の  
時期は土岐砂礫層堆積中か後か不明, しかし運  
動は長期にわたるらしい。

down-warping: 恵那盆地において土岐砂礫層堆積中及堆積後もおこなわれる木曾川の先  
行谷の形成, この運動は基盤高度及土岐砂礫層の層相の変化から推定,

恵那盆地内での変位: 大井一久須見線, 土岐砂礫層堆積後, 砂礫層中の key bed の高度差  
40 ~ 60 m, 東おち, 撓曲又は断層 (赤河断層の延長)。

**0-5** U-FT-CB-Q  
 木曾川流域の地形発達  
 木曾 敏行：地理評、36, 2, 87~109, 1963.  
 (1) 野外調査、空中写真の判読などに基づいて木曾川流域の地形面の対比、断層の活動と山地の分化の時代などを論じたもの、とくに土岐砂礫層をkey bedとして利用、  
 地形面  
 阿字 ニツ森 見行  
 m m  
 上 1,400~1,700 800~1,000 700~900 山頂平坦面、中生代末  
 中 600± 350~700 山麓緩斜面？  
 下 900~1,200 300~400 250~500 土岐面 I<sub>2</sub>  
 3 地域で各面相互に対比される。  
 (2) 阿字断層：走向NNW、延長60km、落差600m±、西南おち、これにより阿字山地と美濃飛騨高原が分化し、阿字山地はNEに傾動。時期は中位面形成後下位面形成前、しかし木曾川の新期の段丘もこの断層で変位しているので活動はつづいている。  
 野風山断層：落差500m±、西おちの逆断層、三河高原と美濃飛騨山地とを分化させた、土岐砂礫層中・下部堆積後活動。  
 赤河断層：白川口～恵那市間、延長20数km、NNWの走向、東おち、ニツ森山地と見行山地の分化をおこす。最初の活動期はわからなないが、土岐砂礫層上部粘土堆積後も活動している(落差50m 東おち)。  
 権現山断層：赤河断層と斜交し、走向N10~20°W、東おち、落差200m、土岐砂礫層中・下部堆積後の形成で、恵那湖の形成に直後関係、この運動で土岐面はSWへ傾動、茅立段丘、土岐砂礫層下・中部堆積後、

**0-6** S-CS-Q  
 宇部市周辺海域の沖積底下底面の地形  
 私本 繁樹：地理評、34, 11, 596~609, 1961.  
 (1) 宇部市周辺の海域において試験資料をもとにして沖積下底面の地形を分類、考察、沖積統基底面としては大河谷の沖合では第I礫層の上限面を採用(特別なkey bedなし)、  
 陸上の地形  
 瀬戸内面 200m以下の高度 大河谷の沖合 20~37.5mにかけ海の方へ一定の勾配で低下する半平坦面、これが縄文早期直前までの地形面、  
 低位海成段丘面 50m以下 河間地 6~14mの平坦面、上記より占く低位段丘に次ぐ時代の海成段丘面、  
 ↓この面がより発達すると、  
 ↑これが汀線のくわしい高さ、時代は不明。  
 (2) 大河谷の沖合の沖積統基底地形面は沖積平野下にもつづき最終氷期の低位海水準に対応して作られたもの、直接外洋に面している、この値は特定の水系における局地的な地形面を表わすのみ、海水準そのものの値は不明。  
 河間地の6~14mの平坦面は上記のものとは連続であり、これを上記のものより古い海成段丘面とする、かつ低位段丘形成後とする(時代の認定、海成としての根拠については疑問がある、瀬戸内面をI<sub>1</sub>とする(80~160mにあるアスタゴドロンを産する厚い泥層と対比))

**0-7** S-FD-HK-TH-Q  
 津軽海峡西部の海底地形  
 茂本 昭夫：地理論、31, 1, 15~23, 1958.  
 (1) 白神岬、竜飛崎間の海底の地形と底質の調査から地形発達史を考察する、  
 地形面の対比  
 陸上地形面 海成地形面 沖積  
 海岸平野 現海成面(0~15m) 世  
 ↓ 上位海段(25~50m) 深 世  
 ↓ 上位海段のbaseにつづく溝れ谷でまざり  
 下位段丘 中位段丘 上位段丘 世  
 本州と北海道の下位海段とが同時(花崗岩塊の存在から)この面が渡島半島の西側での境上をうけて現在のようになった。  
 (2) 渡島半島西部では上位段丘(100m以下)の勾配は $\frac{4}{100} \sim \frac{9}{100}$ で現海成面より急、傾動を思わせ、これを延長すると100m内外の下位海段につづく、しかもその勾配は北部の段丘ほど急で、下位海段も南から北に向って傾斜を増している、故に、同時面の境曲を考えると、隆起の軸は渡島半島西岸付近にあり、この様相は白神東部ではみられない、なおこの面は本州と北海道間をつつづきであったものが沖積世初期の海面低下の時、侵蝕又は断層でまきられたと推定、沖積世初期の低位海水準30m(海成谷の深さから推定)、この時に25~50mへ上位海段形成、

0-10  
鹿島半島の侵蝕砂丘  
多田 文男：地理評, 21, 9・10・11, 282-288, 1948.

(1) 鹿島半島の侵蝕砂丘は、砂丘形成後土地の隆起がその後侵蝕されたために生じたものとし、とくに八光台砂丘について考察している。地形発達史をその中でつとめて取り扱っている。

1. 基盤をささる削斜面形成
2. ローラム堆積
3. 隆起：鏡子半島最大、北西方ほど量少
4. 沈降、入江の形成
5. 急傾層堆積、入江内に堆積—有楽町貝層
6. 旧期砂丘形成、急傾層からなる海岸平野に砂丘形成、今の侵蝕砂丘
7. 小隆起、急傾層台地形成
8. 石器時代の海形成、この入江の沿岸に縄文式貝塚あり
9. 小隆起、河畔平野の形成
10. 海岸砂丘形成

3の隆起は関東造盆地運動の一部に当るといふ  
鏡子付近では65m 鹿島神宮 38m 取手 25m  
4の沈降量不明  
7の旧汀線10m位  
8の現在の5mのコンテクターが当時の海水面

0-9  
大阪平野南東部の地形と地盤運動  
岡 義記：地理評, 34, 10, 523-535, 1961.

(1) 野外調査を主としてこの地域の造盆地運動の活動性とその地形学的意味について考察した。この地域の造盆地運動は褶曲や撓曲を伴ない、丘陵地帯に波状の変形を与え、新期洪積世の段丘形成後も活動した。大阪平野の諸段丘の形成に関係した主営力は地殻運動で海面変化は副次的なものと考えている(地形面の不連続性から)面の時代については特に記載なし。

- 地形図
- { K<sub>1</sub> " 丘陵面をきりこむ所と扇状地状のところ(赤色土化) }
  - { K<sub>2</sub> a " 平坦な河段丘 }
  - { K<sub>2</sub> b " K<sub>2</sub>a をきざみみ沖積面に連続 }
- (2) 上の太子嶺曲：軸のWの大阪層群の傾斜は70°-60°西に没する。  
長野断層：大阪層群を東側の山地斜面にそって西向きに急傾斜させた断層。詳細不明。  
富田林褶曲：丘陵地帯の最高部を形成、褶曲の量ほど大(大阪層群、軸の東、北では35°南では垂直断層に変化する)。  
陶器山撓曲：10°-15°の角度で大阪層群を北方に傾けている。K<sub>2</sub>面はこれより北では扇状地、Sでは侵蝕面をなす。K<sub>2</sub>も同じ→K<sub>2</sub>面形成後も撓曲がはたらく。上記の位置は図示すべし大阪層群を要位させている。  
K<sub>2</sub>期における地殻運動として①富田林褶曲の活動とそれによる河川の争奪②石川上流域の沈降③旧大和川低地の沈降④榎尾川流域の造盆地運動を指摘。そして、造盆地運動が波状の変形をもつとする(しかしその重についての記載なし)。

U・S-KT-Q

0-10  
鹿島半島の侵蝕砂丘  
多田 文男：地理評, 21, 9・10・11, 282-288, 1948.

U・S-KT-R-LP

0-11  
鳥取地帯に於ける活断層と地形とに関する若干の觀察  
桑地 明：地理評, 21, 7, 8, 239-247, 1947.

(1) 昭和18年の鳥取地震における吉岡、繁峰両活断層の調査報告。この断層は花崗岩をささる古い断層(この地域の地形に関係していた)が再活動したもの。  
野外における断層の露頭觀察、おれめ、湧水、稲株の移動などの觀察を資料とする。段丘の分布、山稜の配列も両断層の過去の垂直方向の運動と関係しているらしい。

- (2) 鳥取市西部
- ① 吉岡断層(野坂~古岡間)：水平40cm 垂直47cm
  - ② 繁峰断層(野坂~双六原~繁峰間)：双六原~矢端間、N80°E 北が20cmおち、かつ東へ移動70cm
- 調査 N70°E 水平65cm 垂直40cm
- 2つとも { 水平的には北側が東へ移動。  
垂直的には北側が沈下。

O-12

U-S-CS-R

鳥取県東部海岸の地殻運動  
 築地 明：地理評, 21, 1, 6~9, 1947.  
 (1) 海岸付近の微地形, 埋積谷の状況の観察, 山地の高度分布などから地殻運動の性質を考察した。少ない時代についての記載なし。  
 (2) 少なくとも100m近くの沈降により, 現在の20mのコンクリター以下が沈水して, 埋積された, ついできわめて緩慢な隆起が現在まで継続中。

O-13

U-TH-P

阿武隈山地東北縁部の段丘地形一段丘堆積物の分析を中心として一  
 大倉 陽子：地理評, 31, 4, 206~219, 1958.  
 (1) 主として段丘堆積層の分析から段丘面の性質の考察。  
 第1段丘 海拔160m前後 } 性質はよくわからない。  
 第2段丘 海拔80~110m }  
 第3段丘 もっとも広く分布, 河成面及び海成面。旧汀線高度50m (下末吉期)  
 第4段丘 河床からの比高 10~15m } 海退期のもの  
 第5段丘 河床からの比高 5m前後 }  
 (2) 福島県諸戸川~木戸川間の地域  
 第3段丘の旧汀線高度はどこでもほぼ50m, 第3段丘の旧汀線位置 第1図にあり。

O-14

U-FT-CB-P

三河高原およびその西縁の段丘群  
 太田 陽子・貝塚 爽平：地理評, 36, 10, 617~624, 1963.  
 (1) 矢作川上流の段丘と三河高原の小起伏面についての資料。  
 勘八山東方の平坦面 (礫岡面=土岐面) が断層で変位している。  
 三河高原の小起伏面 { 高位置 } 瀬戸層群堆積前に形成 (鮮新世初期)。  
 出原 " 700~900 { 低位置..... } 断層による変位あり。  
 段丘 " 1,000~1,100  
 結局, 矢作川流域における南西に開いた遊益地運動を反映する地形がみられ, この運動は, 三河小起伏面形成以前から行われ, この益地運動の縁では断層を伴っている。  
 (2) 断層 (分布図あり)  
 ・足助断層群：三河低位小起伏面を切る。ほぼ北東-南西方向2~3列平行, 足助付近から巴川の流路に平行, 落差ほぼ50~100m。  
 ・礫岡面を切る新層：勘八山東方, 足助断層群と平行, 落差70m。  
 上記の2つの断層は主に地形面の変位その他, 地形的資料による。  
 ・総括：境川断層：環状山山麓, ほぼ北東~南西, 瀬戸層群を変位させている。

O-15

U-CB-Q

矢作川下流地域の地形発達史  
 町田 貞・太田 陽子：地理評, 35, 10, 505~524, 1962.  
 (1) 矢作川下流の地形面の分類と地形発達史。  
 土岐面  
 藤岡面 矢作川扇状地の堆積面 160~200m  
 三好面 (何れも末端では下 比高 最大70m  
 拳母面) (河成段丘面 河床からの比高 60m  
 越海面) (何れも末端では下 比高 20m  
 越戸面) (埋没 比高 20m  
 地形面の分布図, 横断面, 縦断面図あり。  
 旧汀線高度 拳母面 ほぼ80m 豊田市付近  
 碧海面 20m 安城市 "  
 知多半島の旧汀線高度40mの海岸段丘は拳母面に対応するという。したがって断層斜的な動きがあったらしい。

O-16

U-FT-CB-Q

大佐渡沿岸の海岸段丘  
 太田 陽子：地理評, 27, 5, 226~242, 1964.  
 (1) 海岸段丘の分布, 堆積層の状態, 高度などから段丘面の形成過程および地殻運動の様式, 量などを知らうとする。  
 barometer による旧汀線高度の差測値が主な資料。  
 第1段丘 160~220m } 大佐渡全体の湾曲的上昇がつづき, その間に海面変化が繰返されて, 段丘が形成。  
 第2段丘 80~140 } 時代不明  
 第3段丘 60~120 }  
 第4段丘 35~70 (下末吉期)  
 第5段丘 25~40  
 第6段丘 5~8 (沖積世)  
 (2) 230~231頁に旧汀線高度の投影図あり, 段丘の分布図もあり。どの段丘も島の中央部で旧汀線高度が最も高く, 島の北, 南に向かって高度減少, 古い段丘ほど, その傾向大。  
 旧汀線高度 S 中央 N  
 1. 150m 220m  
 2. 90 140  
 3. 60 120 60  
 4. 35 70 40  
 5. 25 40  
 6. 5 10 5  
 第4段丘を切る断層あり, N40~50° E,  
 W~70°, 大倉~小野見 延長約8km  
 落差不明 (10~20m程度)



FT・FD—CB—LP

O—17

桑名市西部の断層地形

貝塚 襄平：地理評， 22, 11, 352—356, 1950.

(1) 桑名市西部の洪積層堆積面をきる断層，地形および地質の野外調査を主とした研究，

①桑名西方，洪積世中期以後の礫層の堆積面が東に傾く拗曲をうけ，さらに，東部では3本の断層にきられていて，走向は南北，この3本の断層にはさまれて3列の傾動地塊ができ，各々の地塊は東へ傾動した，この断層の付近では基盤の桑名統も変位している

砂礫層堆積後の拗曲と同じ形であるが程度が急，

②多度岬の礫層の堆積面も拗曲をうける，N30°Wの養老山地の断層の延長，

③桑名西南方の丘地の東縁も海蝕崖ではなく，桑名統堆積後の拗曲及び断層によるNE—SW方向，

(2) ①の断層崖の附近に3本と平行な方向の断層あり，strike南北，Wへ50°位傾く，落差数m以下の正断層，水平すれは不明，

これらの断層を基盤の古期岩石における地塊運動の反映と考え，それをおおよわらかい岩石の所でこのような拗曲，断層などの変形があったとすると，断層の位置 図示されている。

KT—LP

O—18

沼田盆地に於ける湧水の形成について

町田 貞：地理評， 22, 2, 54—59, 1949.

(1) 片品川沿岸の堆積段丘の形成を考察，赤城火山の噴出物による古沼田湖の形成

上 下

上段段丘 600—380m

河床からの比高は 上 160m 下 80m

地盤運動についての記載なし。

U—S—KK—Q

O—19

志摩隆起海蝕台

吉川 虎雄：地理評， 22, 6・7, 218—227, 1949.

(1) 地形と先志摩層の分布，厚さとの関係から地形発達史および海岸断層の発達について考察，

志摩隆起海蝕台は先志摩層の堆積と同時間，DII.

↓

沈降にともなう堆積

海底谷の最深部 40m，この陥れ谷は少なくとも40mの沈水を受けている。

(2) 志摩隆起海蝕台の旧汀線，はは50m，海蝕台が陸化した時の隆起量は90m以上，現在の陥れ谷を作った沈降は40m以上，これらの運動は示差的なものではない。

O—20

渡良瀬川上流地域の地形と断層の発達について一

町田 貞・水山 高幸：地理評， 25, 12, 486—494, 1942.

(1) 段丘の発達と断層の分布との関係，段丘の対比についての補足，

上位段丘 河床からの比高50—60m { P.あり

中位段丘 河床からの比高20—30m { P.なし

下位段丘 河床からの比高10—15m { P.あり

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

河床からの比高10—15m 局部的

O—21

牧ノ原礫層に関する2, 3の問題

井口 正男：地理評， 27, 5, 184—192, 1954.

(1) 砂礫層の分析による牧ノ原礫層の堆積環境の考察，

大礫層のMdとroundnessの測定，

相良，池新田より南方で傾斜がゆるく，礫径，円さも急変するので，そこに大礫帯形成

時の旧汀線を推定，さらに礫層堆積後の断層その他の変位についても言及，

(2) 旧汀線：相良—池新田間 ほぼ高度100m，

断 層：仁王江の東約500m，八丁原の背後を通るN45°Wの西南おちの急崖あり，陸高

3—10m，その付近で礫をきる断層あり，N45°W, SWへ60°かたむく正断層，

落差7m，したがって上記の崖は断層崖，

模 曲：相良東方の尾根は，その西方の尾根より2倍の平均傾斜あり，両地区の大礫帯の

代表する水流については同じ方角らしいので平均傾斜の差は礫層堆積後の東西

方向の変位を考える (これ以上の記載はない)。

U・FT・FD—CB—P

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

断層の分布図，縦断面図，断層の分布図あり，

<p><b>O-22</b> 阿寒湖周辺の湖岸段丘地形—北海道火山湖沿岸の地形学的研究 第1編— 堀江 正治：地理評、27, 2, 59-68, 1954. (1) 阿寒湖の湖岸段丘とカルデラの生成についての考察。 地殻運動についての記載はない。 (2) 旧湖岸線高度440m（現湖面との比高20m）。 ただし湖面の低下は地殻運動のためではない。 火山灰降下後に陸化したもの。</p>	<p><b>HK</b> <b>FT--CB-P</b> 常念岳東方の断層地形に関する一考察 小林 国夫：地理評、24, 11, 377-381, 1951. (1) 常念岳断層崖の地形と地質の吟味からその断層の存在と位置を推定した。飛騨小起火山地帯の地形については飛騨山脈東面にはケルンベント状地形、直線的な谷、三角末端面など断層地形の特色を有す。地質的には断層の発達なし、花崗岩の面理の方向性が断層と関係していることを推察しているが計測はしていない。花崗岩と古土層との接触部付近に断層の位置を推定、時代の推定はこの断層がDuIの礫層におおわれること。 運動様式について記載なし。 (2) 常念岳断層崖：注村によると崖高2,400m。小林はN30°Wの方向の断層を推定。</p>
<p><b>O-23</b> 段丘堆積物よりみた久慈川下流域の地形 大倉 隆子：地理評、28, 5, 225-237, 1955. (1) 上位段丘 100m 火山灰をのせる (多摩) 中位段丘 50m 那珂台地の主体部 (下木古期) 海進期のもの 下位段丘 50m 久慈川、那珂川にそって河岸段丘 (むさしの、立川) 海退期のもの 地殻運動を主としたものではない。 (2) 中位段丘の旧江線 50m</p>	<p><b>U-KT-P</b> <b>O--26</b> 段丘面形成の地形学的研究—上州鶴川の例— 町田 貞：地理評、21, 9, 10, 11, 289-293, 1948. (1) 礫層の分布 礫層の分析から段丘面の性質の吟味および地殻運動の考察。 上位段丘 河床からの比高 40-60m 南岸のみに分布 } 時代についての記載なし。 下位段丘 河床からの比高 10-20m } (2) 下位段丘面形成時に北西へ向う傾斜運動あり (量は不明) (段丘の分布と支流の礫の厚さから推定)。 上位段丘の非対称から鶴川の北方へ向う移動をのべているが、その原因にはふれていない。 段丘の分布図あり。</p>
<p><b>O-24</b> 盛岡断層群について 金子 史朗：地理評、28, 4, 192-198, 1955. (1) 盛岡、花巻間の北上川西辺にある盛岡断層群についての地形、地質の野外調査。 上平断層 } 洪積層志和層堆積後 草井山断層 } 南品山断層 } 洪積層堆積前 黒森山断層 } 洪積層をきる断層の例、つぎの通り。 (2) 断層の分布図あり、洪積層をきるN35°W, 75°Wの断層、赤森不明。 上平断層：洪積層をきるN35°W, 75°Wの断層、赤森不明。 その他階段断層らしい地形あり。 草井山断層：N28°E, 20°Wの衝上。この付近にN30°Eの方向にケルンベント兼ふ。 落差記載なし。(草井山北方) 直接洪積層をきる。 南品山断層：南品山東ろく、北の沢の混合付近green tuffをきるN12°E, 80°Wの逆断層。 黒森山断層：黒森山東斜面、稜安山岩をきるN40°E, 52°Wの断層、何れも落差不明。直接洪積層との関係はみられないが崖が新鮮なので新期の運動とする。</p>	<p><b>FT--TH-P</b> <b>U-S-HK-O</b> 北海道西海岸釧路毛港付近の海岸ならびに海底地形 吉川 虎雄：地理評、28, 7, 353-359, 1955. (1) 海岸、海底の地形発達史に関する研究。段丘の調査及び淵深、底質の資料を利用。 段丘面 海段段丘 旧江線の高さ60m 30m 40-60m } 沖積平野 3m (海岸付近での高さ) 3m 各面の時代(沖積層を除く)にはふれていない。ただし、文中から推定はできる。 (2) 旧江線30mの海岸段丘面形成後 海面は-40m, -60mの面を形成。その後 海面上昇+7mまで、高位沖積面の形成、-15m以下の海侵による海蝕の形成。海面低下7m、現在の水準に達する。(沖積層の高さが3mといっているのは隆起のためでなく海蝕による江線の後退のため)。 段丘の分布図、海底断面図あり。</p>

O-28

島根半島付近に認められる沖積世初期海水準

・井國弘太郎：地理評， 29, 7, 438~442, 1956.

(1) 蘇川平野における沖積統基底面とその付近の陸棚との関係についての考察。天然ガス調査のためのボーリング資料を利用。埋没扇状地層(均配30/00)を最終氷期の低位海水準に対応して拡大した斐伊川その他のfanglomeratと推察。付近の泥炭層などとの関係から、このfanglomeratの沈水を広範囲な地殻運動又はeustasyと考へる。この均配を延長すると100m内外の海底平坦面があり、これをその低位海水準の海蝕面と考へ、低位海水準の深さを推定した。

(2) 沖積世初期の低位海水準が70~80mと推定。  
(埋没fanglomeratの面と上記の海底平坦面との間の深さをとる)。

S-CS-R

O-31

猪苗代湖南岸の段丘地形と盆地の傾動に関する予察的研究

田辺 健一：地理評， 26, 2, 67~71, 1953.

(1) 湖南の地形の調査。湖北との対比  
断層：湖南から湖西にかけて断層多し。南北方向のものが平行。  
(階段断層崖、ケルンコル、ケルンバット、三角末端面の存在から推定。  
時代、落差、動きの性質など記載なし。)

湖岸段丘：550、535、515mの3段あり。

北方との対比の上、連続的な北への傾動を結論。

北方との対比に問題あり。段丘の時代、段丘化の原因については記載なし。

(2) 傾動

	S	N
高位	550 m	525 m
中位	535	520
低位	515	515
湖面	514	514

上記から北方へ連続的に傾動したとする。  
断層および旧汀線の位置は図にあり。

O-29

相模湖周辺の断層・節理と地形

金子 史朗：地理評， 28, 9, 473~482, 1955.

(1) 断上断層の時期は中新世末。

S-CS-R

O-32

茨城県磯崎附近の風蝕地形

小笠原義勝：地理評， 21, 4・5・6, 97~104, 1948.

(1) ローム層及びその下の成田層が風食をうけた地形についての研究。  
磯崎町付近では(磯崎町北方)に広い台地面の下に、ロームをのせない海岸段丘があり、これが那珂河川(高さ20m)の河岸段丘に対比される。風食地形の形成は、この海岸段丘形成以前(ローム層堆積後)。

(2) ロームをのせない海岸段丘の旧汀線 15m (磯崎町北方海岸のすぐそば)。  
旧汀線の位置は図にあり。

断層および旧汀線の位置は図にあり。

断層および旧汀線の位置は図にあり。

断層および旧汀線の位置は図にあり。

	S	N
高位	550 m	525 m
中位	535	520
低位	515	515
湖面	514	514

上記から北方へ連続的に傾動したとする。  
断層および旧汀線の位置は図にあり。

O-30

豊川中、下流地域の段丘地形

町田 貞・大倉 陽子：地理評， 33, 11, 551~562, 1960.

(1) 段丘の分布 構成物質などの調査から段丘のでき方と地盤運動とを考察。

上位面 河床からの比高80m(上流)~30m(古赤色土)=高師原面 } 分布の非対称性著しい  
中位面 40m ~ 5m (下末吉期)  
下位面 30m 下流で沖積面下に埋没。

上位面、中位面、下位面は、かつ内帯からの支流の扇状地が多い。とくに、上位面においてその傾向大、内帯側山地の隆起が外帯側よりも大きかつたらしい。この傾向は下位段丘にはみられない。どの段丘も河床との比高は上流ほど大、内帯側山地の山麓に、小断層多く、ケルンコル、ケルンバットなどの地形も比高は(変位の時代不明)。

(2) 中位面の旧汀線高度約20m。豊川市付近にあり。

段丘の分布図、縦断面図などあり。

断層：内帯側山地の山麓部(いわゆる本宮山断層崖)、N40~60°E、垂直に近い、何れも小断層、基盤をきるもの。時代、変位量不明。

U-FT-CB-P

O-33

岡裏地方周辺の海底段丘その他について

村 新：地理評， 23, 1, 10~16, 1950.

(1) 海図を利用して深度の傾度分布を求め沖積統基底の深度との関係から海底平坦面の時味  
(2) 85~100mの値が傾度の極大を示す。  
有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

有楽町、沼 stage の海退の時のものらしい。

<p>O-34 東京都青梅町附近の礫層について—関東山地東麓における礫層形成の一例— 井口 正男：地理評, 24, 4, 131~134, 1951. (1) 加治丘陵, 草花丘陵の礫層の研究. 草花丘陵を構成するもの 大畑田礫層 古多摩川の堆積物 加治丘陵を構成するもの [上阿須山礫層 " " [下小布市 " " 時代についての記載なし。河床からの比高の記載なし。地盤運動の記載もなし。</p>	<p>U-KT-P 能代付近の段丘地形 白井 哲之：地理評, 34, 9, 487~497, 1961. (1) 能代付近の段丘の堆積環境と地盤運動の考察. 第1段丘 80~120m 堆積層厚い 第2段丘 40~70m 第3段丘 35~50m もっとも広く分布 第4段丘 20~30m 第5段丘 河床からの比高7m, 再堆積の十和田軽石を多く含む。河成段丘。 どの段丘も米代川南部では大部分海成であるが北部では河成。各段丘形成時に南部の方 がより低い状態にある。また隆起度も北側の方が、南側より大きく、これは八郎潟遺址地 運動の一環らしい。段丘の時代についてはふれていない。 (2) 第1~第4段丘の米代川以南は大部分、海成段丘。しかし田代線高度の記載はない。 分布図があるので地形図とあわせればわかるであろう。南部で、旧田代線高度が南部は というが、数値ででていない。 金光寺野付近で第三系の背斜軸に対応する段丘面の変形を予想しているが資料なし。</p>
<p>O-35 西津軽地方における海岸段丘面上の砂丘について 大倉 陽子：地理評, 33, 12, 628~635, 1960. (1) 5段の海岸段丘の存在 1 140~180m 2 80~100m 3 50~60m……下末吉期? 4 30~40m 5 5~10m……沖積世 (2) 第3段丘以下の分布図あり。旧田代線高度には多少地域的な変化があるらしいが具体的な 記載なし(大体の値は上のらんの通り)</p>	<p>U-TH-Q O-36 常盤沿岸地方南部の地形—とくに海岸段丘面の形成過程について— 大倉 陽子：地理評, 26, 2, 52~62, 1953. (1) 久慈川~磯原間の段丘地形と堆積物, 地盤運動の調査. 上位面 120~130m 宮田川以南は海岸段丘。以北は河成面(多摩面). 中位面 50~70m 大部分海成面, 北部では流れ谷をうずめる堆積面をなす(下末 吉面). 下位面 30~40m 河成面(武蔵野・立川面). (2) 旧田代線高度 上位面 120m &gt; どこもほぼ同様 中位面 50m 段丘の分布が第三系をきまる構造線(十三川構造線, 宮内川構造線)をさかいて異なり。 これらの構造線が洪積世にも活動したことを予想させるが資料はない。</p>
<p>O-37 関東南岸の陸棚形成時代に関する一考察 以塚 義平：地理評, 28, 1, 15~26, 1955. (1) 陸棚の形成時代についての地形発達史的考察。とくに海面変化の観点から。 0~20の平坦面……沖積世のある時期以後のもの(過去数千年の間に形成) 20~80の平坦面(陸棚面)……DuIIx面の連続に当るもの 形成時代は海陸の遷移, 沖積層の厚およびboring dateなどから推定。このような水準変 化をおこした原因として glacial eustasy を想定している。 (2) Warm 氷期の低位水準を-80~-100mと想定。これは埋没谷底などから推定。このよ うな水準変 0~20mの面 raised beach (0~20m) の形成時代ごろ以後の面。</p>	<p>S-KT-R-LP O-38 関東南岸の陸棚形成時代に関する一考察 以塚 義平：地理評, 28, 1, 15~26, 1955. (1) 陸棚の形成時代についての地形発達史的考察。とくに海面変化の観点から。 0~20の平坦面……沖積世のある時期以後のもの(過去数千年の間に形成) 20~80の平坦面(陸棚面)……DuIIx面の連続に当るもの 形成時代は海陸の遷移, 沖積層の厚およびboring dateなどから推定。このよ うな水準変 化をおこした原因として glacial eustasy を想定している。 (2) Warm 氷期の低位水準を-80~-100mと想定。これは埋没谷底などから推定。このよ うな水準変 0~20mの面 raised beach (0~20m) の形成時代ごろ以後の面。</p>

O-39

FT-KT-LP

関東平野南部における洪積世以後の断層について

西尾耕太郎：地理評，24, 1, 17-22, 1951.

(1) 主として boring 資料による研究。時代はローム堆積前。

・正断層 { 隅田川断層

・王子・赤羽断層

崖は10m, 台地を限る

・山手断層

何れも露頭なし(侵蝕崖ではないか? O.)

・スラスト 第一帯, 第二帯, 第三帯, 第四帯。

北西から南東にむかい, さらに南南西に屈曲する帯状の存在。

・副王子・赤羽断層: 落差5m strike NE-SE

それぞれ2地点の boring date の比較から推定。

・隅田川断層: " 9.9m 東おち

断層の露頭はみえていない。

(断層でなくとも説明がつく? O.)

・スラスト 第一帯: 月島 N70°W, NE7°

分布図あり。

第二帯: 帝大 N87°E, S2°30' 桑地 N85°E, S 0°15'

断層の証拠いっ

第三帯: 日本銀行 N37°W NE3°

さいなし。

第四帯: 大井町 N2°30'E, E3°30'.....

落差・水平移動書いてない。

O-40

U-HK-R-LP

北海道湧別川上流域の段丘地形

若生 達夫: 地理評, 31, 5, 309-312, 1958.

(1) 地形面の性質と形成時代についての調査、考察、地殻運動についての記載なし。

・地形面 A { 河岸

B { 段

C { 丘

D { 丘

E { rock bench

F { rock bench

G { inselberg

河床からの比高 2 ~ 5 m

・A { 河床からの比高 2 ~ 5 m

・B { Ba { 6 ~ 13 m

Bb { Ba との比高 2 ~ 4 m (旧石器発見)

・C { 河床からの比高 25 m

・D { 河床からの比高 40 m

河床からの比高 2 ~ 5 m

河床からの比高 6 ~ 13 m

Ba との比高 2 ~ 4 m (旧石器発見)

河床からの比高 25 m

河床からの比高 40 m

O-41

S-CS-R-LP

瀬戸内海の沖積平野

桑代 勲: 地理評, 31, 3, 160-168, 1958.

(1) 瀬戸内海地域の三角州の広さがいかなる意味をもつかを知るために第2礫層以浅の堆積量を計測し, 堆積効率を左右する地形との関係を考察, 地形計測及 boring date を利用。

(2) 第2礫層は Würm 末期低海水準期の河床堆積面をあらわす。

下記の下記の河川についての第2礫層の深度の記載あり。

・瀧川(岩園) 45m, 小瀬川(大竹) 43m, 大田川(広島) 30m, 瀬野川(海田市) 22m, 黒瀬川(広島) 30m, 賀茂川(竹原) 26m, 沼田川(三原) 22m, 芦内川(福山) 18m, 十種川(赤穂) 21m.

(この深度が旧汀線からどの位の位の所のかはつきりせず)。

O-42

FT-FD-KK-P

京都盆地西縁の断層と地形

水山 高幸: 地理評, 26, 1, 1-9, 1953.

(1) 京都盆地西縁の新しい(大阪層群)堆積物をきる断層と地形との関係, おもに野外調査(地質)による資料。

東から順に3構造線あり

{ ①性原線: 洪積台地と盆地の沖積面との境の撓曲崖を決定。

②高畑線: 洪積台地中に撓曲崖を, 古生層地区と洪積台地との境に断層崖を決定。

③金が原線: 洪積層を向斜褶曲させ, 古生層地区と洪積層地区との境の一部に断層崖を決定。

礫層の時代はわかっていない。

三変位線は全体としては落差, 時代, その他について, 大阪層群堆積末期の大規模な運動の一環。①の主形成期は礫層堆積後, ③は堆積前, ②はその中間。

② 性原線: N15°W の撓曲軸: 台地東端の急斜面は構造地形(礫層を变化させず), これに始って小断層あり, 東おち落差80m以上, 正, 逆いろいろ, 落差15~135cm

高畑線: N45°W ③ 台地の東端は比高50mの東おちの撓曲崖(礫層を变位させている)

◎古生層と接する所では古生層の礫砂帯に始う東おちの変位があり, 新しい地層がちぎられた。

高畑線の変位帯は北部ほど大。

金が原線: N45°W 洪積層, 向斜褶曲, 時代は最上部礫層堆積以前。

古生層と洪積層とのまかいは断層。

構造線の地図, 露頭の記載, 断面図などあり。

<p>O-46          扇山麓上断層について          余子 史朗：地理評, 28, 10, 536~547, 1955.          (1) 扇山麓上断層の性質、規模、機構などについての地質、地形の野外調査による考察(初稿→向風閣).          この断層は、桂川層上部にNないしNWから小私断層が thrust したもので、この時代の頃らしい。断層は、扇山の南斜面は断層地形が明瞭なもので、これも扇山断層崖とよぶ。これは逆断層崖で断層下に巨礫を含む堆積物があり、最近断層崖の更新がおこなわれたらしい。更新の時代については記載なし。新期の原堆積物を切る断層、浸曲はない。          (2) 地質図あり、断層の位置は記入。</p>	<p>O-43          礫の分布より見た渡良瀬川中流地域の地形一特に扇状地面と河岸段丘面の形成の時代と機構について          町田 貞：地理評, 24, 5, 162~169, 1951.          (1) 強戸礫層：高度100m。扇状地面からの比高20~40m。          上位段丘：(大間々扇状地原面)比高10m以上、水沼で28.5m 扇状地末端で60m、ローム堆積。          下位段丘：(大間々扇状地第2面)八木原で25.5m、ロームなし、又はうすい。          上位段丘の形成条件は赤城火山の活動による岩屑の供給、地盤運動については記載なし。          (2) 縦断面、分布図あり。</p>
<p>O-48          天塩山地区の地形学的研究          坂口 豊：地理評, 28, 10, 499~511, 1955.          (1) サロベツ原野の地形発達史、地盤運動を天塩山地発達史の一環としてとらえようとした研究。サロベツ原野は第3紀の後期から第4紀の初期にわたる構造運動と主として川的作用により形成された盆地が海の堆積作用により平坦化されたもの。          運動の時期 資料、地質・地形の野外調査、boring data, 文献          ・第1期 第3紀の後期(勇知層堆積後)の断層を伴う褶曲、もつとも激しい、地形面          ・第2期 第3紀末~第4紀初期(更別層堆積後)の褶曲、上位海成段丘 60~100m          ・第3期 第4紀後半から現在(沼川層堆積後)に至る東西、下位海成段丘 30~40m。この時期は今より寒冷、利尻火山活動期。          ・沖積地 10m以下</p>	<p>O-44          碓氷川南岸地域の地形一河岸段丘面と侵蝕面との高度関係          町田 貞：地理評, 23, 9-10, 285~292, 1950.          (1) 碓氷川南岸の河岸段丘の分布、高度と構成物質の調査、礫層地塊と第三系侵蝕地塊との地形の逆転を考察。          ・岩野谷丘陵 280~220m (上位段丘より低い) T面          ・上位段丘 河床からの比高 70~40m 広い分布 M面(田山の)          中位段丘 " 40~20m          下位段丘 " 25~5m          地盤運動については記載なし。          (2) 段丘の分布図、断面図あり</p>
<p>O-45          火山島馬島          伊藤 久：地理評, 21, 12, 304~362, 1949.          (1) 昭和14年の噴火後の地形変化の観察。          火山噴出物、火口や中央火口丘の観察を主とし、一部で地盤運動に普及、島の斜面が東南・南西が急で北北西がゆるやかなことを南々東方向にむかう増傾斜運動のためとして記している(成層火山の成層面の角度が地形と同じ傾向をもつことから)。その時代については記載なし。</p>	<p>FT-KT-Q          扇山麓上断層について          余子 史朗：地理評, 28, 10, 536~547, 1955.          (1) 扇山麓上断層の性質、規模、機構などについての地質、地形の野外調査による考察(初稿→向風閣).          この断層は、桂川層上部にNないしNWから小私断層が thrust したもので、この時代の頃らしい。断層は、扇山の南斜面は断層地形が明瞭なもので、これも扇山断層崖とよぶ。これは逆断層崖で断層下に巨礫を含む堆積物があり、最近断層崖の更新がおこなわれたらしい。更新の時代については記載なし。新期の原堆積物を切る断層、浸曲はない。          (2) 地質図あり、断層の位置は記入。</p>

O-49

CB-R

信濃北郡の田湖堆積物と地形発達

堀江 正治：地理評， 29, 7, 416-428, 1956

(1) 野尻湖および古間化石湖の発達史に関する研究。

野尻湖岸の湖岸段丘。現湖面(654m)との比高約10m。

古間化石湖。最高水位 67.5m 火山灰におおわれずA面

段丘化の原因は地殻運動ではない。

O-50

U-S-FT-FD-J-P

地盤運動と地形 1. 主として台地について

町田 貞：地理評， 29, 10, 615-620, 1956.

(1) 洪積台地の地形や構成物質を利用して地盤運動の研究をおこなうのにさいして、今までの資料をもとにして日本における地盤運動の特色、日本内での地域差などを総括し問題点を指摘したもの。日本全域にふれているが量的な資料を明示していない。

O-52

北海道の海岸低地

中野 兼正：地理評， 24, 8, 267-275, 1951.

(1) 海岸の微地形、堆積物から海岸低地の地形変化と地盤運動を考察したものの。全島均一な地盤運動をうけたかかのようにみえる本島においても、ごく短い期間においても波動性の地盤運動をうけたことをのべている。

(2) 石狩低地

遠別川低地

(aは汀線位置、  
bは相対的地盤変位量)

紅葉山の砂丘列

の北ろく約5 m

汀線の後退

現汀線

勇払低地

最奥堤列の砂丘

基部約7 m

汀線の後退

現汀線

右地山麓約10 m

汀線後退(約4 + 6 m

m)

+ 5 m - 2 m 現汀線

+ 4 m

+ 6 ~ 4 m

O-53

伊那谷の地形-断層・原地形・地形面の対比

三野 与吉：地理評， 24, 7, 215-230, 1951.

(1) 天竜川沿岸の段丘の対比の吟味および第4段丘上の原地形を新しい断層運動との関係でとらえている。

断層運動の直接の時代のきめ手はない。変位量も不明。しかし、原地形との関係からいうと、第4段丘面形成後も断層運動がくりかえされたことになる。

(2) 1. 駒場城山断層：空地村駒場の対岸城山、N20°Eの直線的山麓、S70°Eへ60°~80°傾く。N60°Wへ60°傾く。N60°Wへ30°傾く。以上の断層面、正断層

2. 米の原断層：飯田市の北西 山の南西麓、N40°Eの山麓線を作る逆断層。

3. 駒ヶ根断層：北東地方の急崖の末端にそう断層、N10°Wへ85°、N10°Eへ65°、S70°Eへ78°、N40°Wへ60°など。

4. 小野子断層：小野子の東端550°Eへ40°、S20°Eへ45°~50°傾く。逆断層

5. 毛賀沢断層：飯田市南方毛賀沢、南東方向、ちようつがいが断層崖よりになる。沢が大体断層、落差10m、札山礫層をきき正断層、N60°Wへ60°傾

く面。(直接レキ層を通る所はみえず)

2・3・4については変位量、時代ともに不明。しかし、原地形との関係からごく新しい時代のものと推定、原地形を背後の断層の運動の繰返しのため生じた押し出し地形と考える。

<p><b>O-54</b> 十勝平野の地形に関する若干の資料—とくに低位段丘および火山灰について— 貝塚 梨平：地理評， 29, 4, 232-239, 1956.</p> <p>(1) 野外調査を主とする洪積火山灰、20m前後の海成段丘およびそれに相当する河成段丘面に関する資料。火山砂を手がかりにして標高付近の第IV段丘を2つに分けた。すなわち火山砂をのせない扇状地を後火山山砂面とし、この時期が岩層層の増加で特長づけられるとする。さらにこの面が、北方の沖積面下の埋没谷底につづくと推定している。</p> <p>(2) 標高付近 a. 火山砂をのせる海成段丘面（沖積面ではない） b. aをおおいい火山砂をのせない扇状地、</p>	<p><b>O-56</b> 飛騨山脈とその周辺地域の地形発達 深井 三郎：地理評， 33, 5, 247-269, 1960.</p> <p>(1) 洪積世の火山活動、水河の消長と段丘の関係を通過して飛騨山脈およびその山麓（神通川、常願寺川）の地形発達史を考察。半野部の海進などを考慮して編年した。又、山麓部の段丘の取積状態からDm期以降の断続運動を推論している。</p> <p>段丘に関する記載は多いがほとんど高度、北高に関する資料なし。</p> <p>海進との関係にや、疑問あり。</p> <p>(2) 地形編年、地殻運動の傾向は第16図（P. 266）に図示されている。（量的にはわからな</p>
<p><b>O-55</b> 北海道の新しい地質時代の地殻運動 阪口 豊：32, 8, 401-431, 1959.</p> <p>(1) 北海道北部の海岸段丘の高度・時代・地殻運動などについて総合的考察。 ・栗別段丘 C 80m 現在よりやや寒冷な気候 ・苫前段丘 T 40m 花粉分析からみられると寒冷期 これら2の段丘（北見山地では旧汀線、ほぼ一律）のこの高度と基準高度としてC面形成後T面形成開始まで、T面形成後現在まで、C面形成後現在までの3つの汀線高度変位曲線をつくる。旧汀線高度の大きい呼ばれ、構造線の通過する所に当布と対比は空中写真を主。（下未岩期に当るものはTの旧汀線らしい）。</p> <p>(2) 段丘の分布図、旧汀線高度変位曲線、海岸の地殻運動図などあり。 変位曲線の分布を地域別に記載。変位曲線は地域的に著しい変動のあとがある。 C-T間、T-現在間に差別的な地殻運動あり さらに地域毎の段丘の説明。この中に旧汀線高度の値が出てくる。くわしくは原文参照。 このような変位は千島弧の活動の現れであるが、ただ構造線の継続、再活動という外に、新しい活動を始めたものもあり、C-T間よりもT-現在間の変位曲線が大なことから推定。</p>	<p><b>U-HK-Q</b> 十勝平野の地形に関する若干の資料—とくに低位段丘および火山灰について— 貝塚 梨平：地理評， 29, 4, 232-239, 1956.</p> <p>(1) 野外調査を主とする洪積火山灰、20m前後の海成段丘およびそれに相当する河成段丘面に関する資料。火山砂を手がかりにして標高付近の第IV段丘を2つに分けた。すなわち火山砂をのせない扇状地を後火山山砂面とし、この時期が岩層層の増加で特長づけられるとする。さらにこの面が、北方の沖積面下の埋没谷底につづくと推定している。</p> <p>(2) 標高付近 a. 火山砂をのせる海成段丘面（沖積面ではない） b. aをおおいい火山砂をのせない扇状地、</p>
<p><b>O-57</b> 優越期の形成時代—近畿地方中南部を中心として— 中野 尊正：地理評， 20, 1, 12-33, 1944.</p> <p>(1) 新第三系の基底と小起伏面と約100mの高度差をもち、中新統と火山岩とは不整合関係にあり、P D期の中期に火山活動があり安山岩が流出し、それが現在侵蝕面をなしている。二つなどの野外観察にもつづいて、つぎのように地形発達史をまとめ、起伏のある山地に海進基盤又は中新統をききつた侵蝕面を化石化、平坦化はそのまま、進んで安山岩の噴出があり、現在の小起伏面の形成、このように小起伏面と新第三系、P D層、火山岩との相互関係から優越期の時代をP D期の末期と推定した。</p> <p>(2) P D期末期の侵蝕面の例 大和高原 約 500m 布引山脈 約 500-700m 鈴鹿山脈 約 1,000m以上</p>	<p><b>U-KK-P</b> 優越期の形成時代—近畿地方中南部を中心として— 中野 尊正：地理評， 20, 1, 12-33, 1944.</p> <p>(1) 新第三系の基底と小起伏面と約100mの高度差をもち、中新統と火山岩とは不整合関係にあり、P D期の中期に火山活動があり安山岩が流出し、それが現在侵蝕面をなしている。二つなどの野外観察にもつづいて、つぎのように地形発達史をまとめ、起伏のある山地に海進基盤又は中新統をききつた侵蝕面を化石化、平坦化はそのまま、進んで安山岩の噴出があり、現在の小起伏面の形成、このように小起伏面と新第三系、P D層、火山岩との相互関係から優越期の時代をP D期の末期と推定した。</p> <p>(2) P D期末期の侵蝕面の例 大和高原 約 500m 布引山脈 約 500-700m 鈴鹿山脈 約 1,000m以上</p>
<p><b>O-58</b> 熊野川下流地域の地形 中野 尊正：地理評， 20, 5, 219-232, 1944.</p> <p>(1) 本木〜三輪時間の野外調査にもつづいて、熊野浦層を中心として地形学図の作製、地形発達史の考察をおこなう。 熊野浦層は起伏のある土地に堆積した古熊野川に由来する地層で厚さは50mに達し、先志層に対比される。これは高さ60m以下の段丘を形成している。</p> <p>(2) 300m± } この2段の小起伏面があるが時代は不明。 200m± } 海岸段丘 } 高度 40-60m → 熊野浦層の堆積面らしい。 } 低位 20-30m 2段とも北方に向って低くなるが、これは地殻運動のみによるものではなく、堆積面の本来の高度の差（供給源からの距りにもとづく）による可能性があるという。</p>	<p><b>U-KK-LP</b> 熊野川下流地域の地形 中野 尊正：地理評， 20, 5, 219-232, 1944.</p> <p>(1) 本木〜三輪時間の野外調査にもつづいて、熊野浦層を中心として地形学図の作製、地形発達史の考察をおこなう。 熊野浦層は起伏のある土地に堆積した古熊野川に由来する地層で厚さは50mに達し、先志層に対比される。これは高さ60m以下の段丘を形成している。</p> <p>(2) 300m± } この2段の小起伏面があるが時代は不明。 200m± } 海岸段丘 } 高度 40-60m → 熊野浦層の堆積面らしい。 } 低位 20-30m 2段とも北方に向って低くなるが、これは地殻運動のみによるものではなく、堆積面の本来の高度の差（供給源からの距りにもとづく）による可能性があるという。</p>



O-59

伊那谷西南部の構造地形

有井 琢題：地理評, 31, 6, 346~362, 1958.

(1) 伊那谷西南部の地質、地形の調査、特に机山層の分布、断層の調査からこの地域の発達史と地盤運動をまとめたもの。この地域はRamp Valleyの性質を示す地塊盆地で、長期間にわたる伊那谷盆地運動により外形が形成された。盆地周辺部の断層は大部分衝上断層で、伊那谷側が落ち込んでおり、その活動は最近までおよんでいる。なお、机山層の供給源、高度分布などから、机山層堆積中、または、その後に、北または北西への傾動があったことを述べている。

(2) ①鮮新世初期の断層により伊那谷のりんかく決定。

- 下伊那電東断層：延長17km以上、全体の走向は山ろく線の方角と兼行、露頭ではN50W~N70E、東へ8~70°。
- 手ヶ爪断層：延長1.5km、WNW~ESE、小正断層。
- 打沢断層：延長600m、WNW~EES、面はSへ傾く、小正断層。
- 萩理断層：延長1.5km、断層の性質は打沢断層と全く同じ。

②鮮新世後期

- 机山層の堆積中、後に北または北西への移動、変位量は少なくとも200m。
- 下伊那電西断層の北半延長25km、衝上押しかぶせ、断層面は西へ傾く。
- 一般方向は天竜川と兼行、露頭ではN70W、N70E、傾斜は18~70°。

③その後

- 川路電阿断層：延長8km、一般走向は天竜川と並行。
- 下伊那電西断層の南半、川路電阿断層の一部。
- 新田断層：段丘を切る衝上断層。

④沖積世初期

駒場断層：本地域最新の逆断層、走向は南北、面は高角度で西へ傾く。

U・FT-CB-Q

O-61

猪苗代湖沿岸地域の二、三の地形学的問題

堀江 正治：地理評, 26, 12, 550~562, 1953.

(1) 湖岸段丘地形を主とし、猪苗代湖盆と全津盆地、付近の火山との関係などを考察、湖岸段丘はすべて堆積段丘、段丘堆積物、流入河川の急急点、土器の分布などから旧湖岸線を推定、湖岸段丘の形成時期は洪積世末か沖積世初期、この時に土橋川の排水とともに北西への傾動が加わって段丘化した。

(2) 旧湖岸線高度が東岸および南岸ではその他の所よりも数m高い(海拔540m)ので、北西への傾動を推定。

U-TH-R-LP

O-62

愛知県衣笠湾の沖積層下底面の地形について

藤田 佳久：地理評, 38, 2, 121~123, 1965.

(1) ボーリング資料をもとにして、沖積層下底面の地形を考察、二つの埋没地形面の発見

- { 上位 - 5~10m、海岸沿いに南北に分布、海陸面。
  - { 下位 - 15~20m、湾内中央部に分布、旧境川の谷底で、最終氷期最盛期面後の溝面に関連する地形、最大深さ25m、この旧河谷の傾きと現境川のそれとにているので、この面の形成以後、地盤運動はない。
- (2) 下位面の形成時の海面は-30m内外、時期は第4氷期の最低位海水準に到達する以前。(名古屋付近の埋没中位面形成時に当る)
- P.122に沖積下底面の地形図あり。

O-63

阿武隈川中流域の地形

小池 一之：地理評, 38, 8, 519~525, 1965.

(1) 郡山盆地の地形調査から、二つの湖成堆積地形面を認め、その生成過程と地盤運動などについて考察した。

古期→矢吹丘陵

白河石英安山岩質 welded tuffの噴出による河谷のせき止めのため

の堆積、面の高度310~390m(南へ向い高い高くなる)。

新期→郡山盆地

二本松丘陵に対しての盆地側の相対的沈降のための堆積、高度240~290m(南へ向って高くなる)なお郡山層は中心部で厚さ100m、地域全体として、北方への傾動を推定。

(2) 地形面の高度

古い面はど南にあること } から、北へ向っての傾動あり。

郡山層の堆積時の沈降の中心は、郡山市付近。

O-60

日本島の地形発達史について

阪口 豊：地理評, 37, 7, 387~390, 1964.

- (1) 高度傾度曲線の特性から日本島の地形発達史をつぎのようにまとめた。
  - 1) 産地形期は2回の不連続的曲線により3期にわけられる。
  - 2) 陸橋はかつての陸上面で、陸上の700m以下の地形の形成と関係がある。陸上面の形成は下末吉期以前。
  - 3) 最大の水河作用はWürm氷期
  - 4) 海岸平野、低位氾濫沖積平野の形成は産地形後期の特異現象
  - 5) 産地形後期の日本島の大陸時代は
    1. 陸橋の陸上面時代
    2. Würm氷期
- (2) 最高海水準期 + 300m前後 > この間に平均400mの隆起  
Würm氷期 - 100m前後

J-Q

O-64

蔵王火山麓崎域の地形発達史

古谷 尊彦：地理評， 38， 2， 57-73， 1965.

(1) 青森火山， 南蔵王火山について， 火山， 火山泥流， 火山灰， 河成面などを調査し， それらの地形相互の発達史的関係と地盤運動と地盤運動をまとめたもの。  
青森火山は中新統堆積後に生じ， 第四紀初期にかけて， 原形を形成， ついで南蔵王火山が活動し， 3種の泥流を形成， 河成面は次の通り：

- 丘陵 { 200m面
- { 100m面
- 原段丘
- 水野段丘
- 長段段丘→最大海退期?
- 新期段丘

地質構造， 丘陵や段丘の配列， 沖積層の厚さ， 河系の特色などから， この地域では第三系の盆状構造および構造線に支配された運動が100m段丘形成以後， 行われ現在まで継続しているらしい。

(2) 小村崎～白石線 NE-SW方向 東側は沈降， 西側は上昇 中新世の断裂帯の一部  
村田新上断層 NE-SW方向 東側は沈降， 西側は上昇

これらの運動の開始時期は南蔵王火山の活動の始まった時期とほぼ同時期， 現在におよぶ断層の落差などについての資料なし。

U-FT-TH-Q

O-66

鷲峰山山塊崎域の構造地形

樽松 静江：地理評， 30， 1， 22-35， 1957.

(1) 鷲峰山塊の平坦面， 断層地形， ふもとの段丘地形などの調査から構造発達史をまとめたもの。この山地には350-400， 400-450， 450-500， 650m以上の4平坦面あり， その形成後， 古期更新世の終り， 急激な断層運動が起って， 鷲峰山， 井手， 郷之口の3断層崖を形成し， 山地は傾動性の地盤となった。その後， 新期更新世後に山地西縁に軸をもつ緩曲運動が生じて， 4回の間欠的隆起を伴い， 周辺に4段の段丘を形成した。隆起運動は現在も継続している。

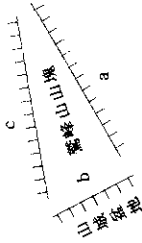
(2) a. 鷲峰山断層崖：北東～南西方向， 延長12kmの逆断層崖， 崖高100～200m， 北部ほど比高大， 南部ほど小さくなる。北， 中， 南部に細分される。  
古期更新統を切る。

b. 井手断層崖：北北西～南南東， 比高150～200m， 3段の西落ちの階段断層崖を伴う正断層， 古期更新統を切る， その後緩曲を受ける。

c. 郷之口断層崖：北東東～南西西， 延長13km， 比高70～160mの正断層， 古期更新世後らしい。

周辺の盆地には相互に対比できる4段の段丘正化した扇状地あり， それらの扇端はいずれも緩曲崖。

(3) 断層崖の位置



FT-CS-R

O-65

鳥取地震の活断層に沿ふ Kernbut

築地 明：地理評， 20， 1， 67-69， 1944.

(1) 昭和18年9月10日の鳥取地震において2本の地殻断層が生じた。そのさいに生じた小規模な Kernbut についての野外観察の結果を記載したもの。

(2) 地殻断層 2本— { 古岡～野坂間  
                  { 鷲崎～双大原間

何れも北側が沈下し， かつ東へ水平移動， 移動量は大体水平， 垂直ともに約10cm， 最大なところろで水平， 垂直 70cm。

O-67

日本近海の大陸棚について—とくに， その形成機構と形成時代について—

尾野 通平：地理評， 30， 10， 962-974， 1957.

(1) 日本近海の大陸棚を， 発達の程度により13地域に分けて中， 外縁部の水深などを記載。これを， 海面変化によるものと考え， 140mの海面低下を想定し大陸棚はその時の汀線付近の侵蝕または堆積地形であると考えた。そして， 古生物上の資料および陸上の地形と海盆地形との関係から， その時期を Würm 氷期の初期としている。

(2) 外縁部の水深は一般に150±20mでかなり均一であるので， -140mを海面と想定(問題あり)。それより浅い部分はその後地殻変動によるものとする。

{ 水深の大な所の例 九州 S. 300m， 能登沖 200～300m， おき N. 500m  
{ 水深の小な所 野島崎～御前岬 100～130m

O-68

U-FT-HK-P

日高山地周辺の地形に関する二・三の資料—第四紀の礫年を中心にして—

坂口 豊：地理評、26, 12, 563-570, 1953.

(1) 図上作業と野外観察から、本地域の地形と地質構造との関係、山麓緩斜面や段丘、火山灰などについて若干の資料をまとめたもの。段丘については、下記の記載があるが、時代には、ふれていない。

(2) 1. 断面について

左右府—猪岩間  
農家—荻伏間  
狭伏—樺似間

以上の部分は断層崖または断層縁崖らしいが、どちらからかまだ不明。

2. 段丘

・静内川：下流では3段あるが、最下位の新冠面（比高5～60m）が良く残き、上述の面と対比。

・静内川（新冠面と同じ、火山灰をのせる）と、その下の層内面。

・新冠川以西では左岸に、静内川以東では右岸に、主に段丘が分布。ゆえに、静内、新冠を中心とする傾斜運動を推定。

3. 海底

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

1段の面が明瞭（高さ不明）、これは、南東で高く、北西に向って低くなるので、河岸段丘で考えたとすべし。

2. 海

O-70

U-CB-P

常盤寺川上流地域の地形発達史

深井 三郎：地理評、29, 7, 428-438, 1956.

(1) 立山の火山活動、氷期、段丘の形成などを発達史的にまとめたもの。この地方の氷期はWürm氷期に当り、立山大山の主活動後に当たるといふ。段丘を高位、中位、低位の3段に分け、その構成層の厚さや粒徑、縦断面曲線などから、増傾斜運動を推定した。

段丘の時代も述べているが、資料が不足。

(2) 高位段丘：(栗果野、芦崎寺など) 河床との比高50-100m、礫層厚く、粒徑小、Riss氷期頃の形成。弥陀ヶ原沿河川の形成後、この段丘面の平坦後、増傾斜的隆起あり。その量は以後の量より大。なお、小見一栗果野断層が、これに伴って生じたことあるが、その性質、地形との関係については資料なし。

中位段丘：(千垣、横江など) 河床との比高25-50m、巨礫から成る。Würm氷期の増水期に形成。面形成後、増傾斜的隆起運動あり。

O-71

U-CB-P

立山山麓の隆起層状地

深井 三郎：地理評、29, 4, 218-321, 1956.

(1) 立山山麓の上市川、早月川、片貝川、布滝川、黒部川沿岸の隆起層状地を、高度、比高の厚さと粒徑などから3群に分類した。第1群は、厚い礫層、急勾配、小さい粒徑をもつ最高位の面。第2群はその下位の面で、河床との比高は上流が大、著しく粗い礫層をもつ。第3群はそれ以下の段丘面である。これらの地形と堆積物との状態から第1群形成以後の増傾斜運動を推定した。また各面の時代についてもべているが、その根拠ははっきりしていない。

(2) 第1群：河床との比高100-200m、勾配32-89%。(Riss氷期?) 資料なし。この面の形成後谷口で曲陸性をおびた増傾斜運動あり。

第2群：河床との比高20-80m、勾配23-67%。

形成後、増傾斜運動、地城差がはげしい。

面の形成期は石器と巨礫とからWürm氷期と推定。

なお、赤羽山礫層をきき段陸面がありpdに当るといふ、面の分布図、対比表あり。

O-69

J-R-LP

日本における海面の相対的変化と沖積層

井岡弘太郎：地理評、30, 9, 751-752, 1957.

(1) 沖積層の深さ、地形、先史遺跡などから沖積世における海面変化をのべたもの。

(2) 最終氷期

縄文早期 (約4000B. C.)

縄文前～中期 (約3500-2500B. C.)

縄文後期 (約1000B. C.)

弥生式後期 (約A. D. 200)

海面約-80m

-10-15m

+2-5m

-3m

±0m

**0-72**  
**U.S.-J.-R**  
 沖積世の地盤運動とユニョースタシ—  
 井岡弘太郎：地理評，29，10，620-628，1956。  
 (1) 欧米における最終氷期の地形的証拠，その深度などを説明し，それと日本の沖積統基底面の深度との比較から沖積世における信濃川河口平野，濃尾平野，東京湾などの地盤運動，天竜川平野，伊勢湾口付近の増傾斜運動などを考察した。さらに縄文早期ごろの海水準，その後の海面変化と地盤運動についてもべている。  
 (2) 沖積世の地盤運動  
 { 信濃川河口付近，沖積統基底—160m，∴沈下量は80m  
 { 濃尾平野 } 基底礫層に接する 海底平坦面—35m， 基底礫層—57m  
 { 東京湾 } 海底平坦面が逆傾斜 “ ” —40m， “ ” —65m  
 { 天竜川沖積平野 (現在の扇状地の勾配との比較その他から)  
 { 濃尾平野 —15m内外 (瀬戸内海沿岸その他)

**0-75**  
**U-S-KS-Q**  
 宮崎高鍋町附近の地質学的問題  
 大塚彌之助：地理評，6，7，1048-1074，1930。  
 (1) 層序学的研究を中心として，地形発達，地盤運動にも言及した論文。  
 この地方の層序は，新しい方から沖積層，海岸平野層，通山浜層（先志摩層と類似），高鍋層群（下部掛川系に對比），孝層群（中新統）である。これらの分布，構造，岩相などの記載を中心として，通山浜層堆積前の沈降運動，上面本山地東斜面が中新統化石侵蝕面であることなどを述べ，さらに，この地塊では上部中新統堆積前に登山運動がおこなわれ，その後は小規模な変位がおこなわれたという。  
 (2) 通山浜層：日向海岸平野形成前の各段を埋めた含植物破片泥層，沈降運動による，厚さは45m内外。  
 上面本山地東斜面：この面は妻崎群下の不整合面につづく，したがって，昔の侵蝕面の一部であり，被覆層をのせたまま傾斜（東へ10°内外）して以後，被覆層が除去されて再び露出した中新統化石準平原，これは，いわゆる第三紀末準平原と交叉している。高度については両者ともに記載なし。

**0-73**  
**FT-J-P**  
 ホッサマダナ擾乱について  
 江原 眞伍：地理評，34，1，1-8，1961。  
 (1) ホッサマダナ擾乱の及んだ範囲，その影響などを大地形論的にのべたもの。成及した範囲は，利根川をさしかえとして東北地方をのぞき，房総，関東，上信甲，伊豆，美濃飛騨山地，近畿中因地方に及ぶという。この運動は，七島海嶺の本礫が本州外帯に突入したことから関係して生じたもの。美濃飛騨山地での阿寺，根尾谷，柳ヶ瀬～木ノ本断層などはこの運動と関係して生じたもの。時代についてははしるしていない。

**0 76**  
**U-KK-P**  
 熊野海岸山地及び其の固結地層の地形と地形発達史(1)(2)—第3紀地史—  
 鈴木 好一・稲垣 誠：地理評，9，11-12，917-944，1036-1045，1933。  
 (1) 主として地質調査にもつづいて第3紀地史をまとめた。すなわち，1) 宮井海崖，宮井統堆積(古第3紀後半)，2) 後宮井変動および同剛利時代，3) 熊野酸性岩噴出(おそらく中新世)，4) 後熊野初期時代，5) 山麓階形成，6) 縁辺撓曲及び海水準変化による海岸地層の隆水，沈水，(洪～沖積世)となる。  
 従来考えられていた熊野酸性岩下の化石侵蝕面の存在を否定した。また，侵蝕面の時代については，熊野酸性岩をきき上げることから洪積世?としているが(1)(2)ではほとんど記載がない。  
 (2) 平坦面として次のものをあげているがくわしいことは同名論文の(3)(4)にある。  
 I 1,700-1,600m III 1,100-1,000m IV 900-800m  
 II 1,400-1,300m V 400-300m VI 700-600m  
 III 1,200-1,100m VII 300-200m VI 500-400m

**0-74**  
**U.S.-J-Q**  
 地盤運動と海面変化  
 吉川 成雄・貝塚 爽平：地理評，29，10，628-636，1956  
 (1) 日本列島の地盤運動に関する従来の研究，欧米などにおける更新世のglacial eustasyに関する知見を紹介し，現夷の地盤運動と海面変化とのsuperpositionによる結果であることを述べた。そして日本の海は地形において，2回の海進と2回の海退という共通な傾向がみとめられたことを指摘し，研究上の問題点をまとめている。  
 (2) 本州，四国の15か所における段丘高度と沖積統基底の深度を表にまとめている。

**O-77**  
御前崎海蝕台  
長谷 実：地理評， 20, 3, 144-158, 1944.  
(1) 御前崎付近の段丘地形と構成層の調査から、この地域の発達史と地盤運動を推定した。この地域は、隆起と沈降をくり返しながら、全体としては隆起している。これらの隆起・沈降の原因を地盤運動によるものと考えているが、それに対する直接の資料はない。また、時代にたいしては述べていない。野外調査では、特に、段丘構成層の相、厚さ、坡度などに注目している。

(2) 御前崎 高さ40-50m この面の下に高さ約5mの段およびその下に巾100mの砂浜あり、何れも新しい隆起を示す。  
土地の昇降は下の通り。  
1) 沈降 ?  
2) 沈降 ?  
3) 隆起 50m以上、  
4) 沈降 30m,  
5) 隆起 25m,  
6) 隆起 5m,  
7) 隆起 1m,  
8) 隆起 1m (宝永、安政の地震)、  
9) 沈降 継続中。

**O-78**  
新潟の地盤沈下  
中野 尊正・武久著：地理評， 33, 1, 1-9, 1960.  
(1) 新潟平野の地盤沈下の原因の中で、地盤運動および表層の圧密による沈下量を吟味することを目的とする。第3紀層、洪積層、沖積層などから知られる沈降的な地盤運動につき概観し、G<sub>1</sub>層の深さから地盤運動による沈下量の推定をし、山ノ下地区で3.7mm/年である。そうすると、1899-1958年における水準点4425での450mmの沈下の中で、地盤運動によるもの49%(220mm)、表層の圧密によるもの11%(50mm)、人為的な原因によるのはその中の5%にすぎない。  
(2) G<sub>1</sub>層を最終氷期とする。その上層の高度は山ノ下で-170m、関屋で-145m、その時の低位海水面を-95mとすると、山ノ下で75m、関屋で50mが最終氷期以後のG<sub>1</sub>層の沈下量となる。その年数を2万年とすると、地盤運動による沈下量の平均値は山ノ下3.7mm/年、関谷2.5mm/年。

**O-79**  
関東山地西辺及びそれに続く熊三系丘陵に存在する侵蝕平坦面地形について  
岩塚 守公：地理評， 25, 1, 56-62, 1952.  
(1) 標題地域において野外調査及び読図から、数段の侵蝕平坦面を抽出した。大部分は新第三系をききっており、今までT面またはD面とされてきたものを細分する必要がある。そして、第三紀の終りにおこなわれた著しい構造運動の後には、広い地域において静かな間接的隆起がおこなわれたとのべているが、詳しい資料はない。  
(2) 新第三系をきき侵蝕平坦面の例  
。飯能付近 { 200m (こま峠など)  
2段 { 150-100m  
350m以下(山地東縁)→扇山南麓、その他の侵蝕面に対比されそう。  
。多摩丘陵 { 300m (山地東縁)、240m (川尻村)、170-150m (柿生村)、135m (生田)  
4段 { 200m (浅川~川尻間)、170-160m (田木村)、130m (鶴川村)  
。中川南方 250-200m  
。相模湖南方の石老山東北麓 250-300m以下  
。中野町南西 300m

**O-80**  
秩父盆地の段丘地形  
町田 貞・井口 正男：地理評， 25, 6, 221-229, 1952.  
(1) 野外調査にもとづく河岸段丘の分類・対比、および段丘階層からみた堆積環境と地盤運動との考察。  
1) 3段の段丘あり。上・中位は火山灰をのせ、下位段丘には火山灰はない。上位段丘は扇状地的な堆積段丘。下位段丘は段丘階層のうすい侵蝕段丘であり、中位はその中間的な性質をもつ。3段丘において階層の厚い部分が何れも秩父市南方で、そこは河床との比高も小さく流路の屈曲点に当たって、相対的な沈降を思わせ、秩父盆地の差盆地運動の連続を示すらしい。  
(2) 分布図、縦断面図あり。  
上位段丘の比高 200-180m  
中位段丘の比高 100-80  
下位段丘の比高 60-35  
階層の厚さの最大はいずれも秩父市影業付近、厚さは上位40m、中位25m、下位20m。

**U-S-CB-R**  
S-CB-R

O-81

U-CB-P

フォッサ・マグナ西部における洪積世侵蝕面群
小林 国夫：地理評， 26, 7, 291-307, 1953.

(1) フォッサ・マグナ西部地域の侵蝕面の分布，形成過程を地影，地質の資料からまとめ
たもの，おもな小起伏面として，1,000m以上にわたる大基面群(800-1,000m)がある。これは
風化侵蝕されやすい第三系からなっている。第三紀末以来，原初準平原的な平坦面として発達
してきたもの，それより高い地形は抵抗性の大きな岩行から成る小起伏面形成期のHärdting
である。また，美ヶ原，聖山，四阿屋などは，従来，第四紀火山といわれていたが，そうでは
ない。山地の高度分布は，主に，選択侵蝕によるもので，断層，傾斜運動などは，ほとんど認
められない。

- (2) おもな侵蝕面の分布，高度は次の通り。
duII 大町公園面：大町公園 850m，麻績盆地，会田盆地 800m以下，犀川流域 6-700m，
何れも現水系と関係した河床段丘で，河床との比高は100-200m
duI 大基面群：(細分すると，大基では上位・乗越1,000m，下位・平坦 800m)，中山
山脈(犀川・高瀬川間) 800-1,000m，聖山1,000m，犀川右岸 800-
1,000m(麻績・会田盆地)，木崎湖東方の美峰1,000m±
dl II 出基面：出基1,400-1,600m，聖山1,400m
dl I 傍越面：1,700m
pd 美ヶ原面：美ヶ原1,900-2,000m，鉢伏山1,900m±これらは溶岩の表面と切峰面
の一般形とは調相的であるので，実質の岩石を無差別に切った侵蝕面
である。

どの面も研究地域内では，著しい高度差がなく，一様な隆起運動が考えられる。

O-82

U-KS-Q

日向海岸平野(宮崎県)の鮮新世初期からの地殻運動とそれに関する疑問
大塚弥之助：地理評， 8, 2, 81-95, 1932.

(1) この地域の地層(通山浜層，高鍋層群，美層群)の分布，構造などおよび地形(上面木
山地東斜面，それと交叉する準平原遺物，先茶臼原，茶臼原，三財原，新出原の4段丘面)の
高底，勾配などの研究から，鮮新世以来，東へ向って傾斜を増しつつある地殻運動が続いてい
ることを明らかにした。すなわち，鮮新世以後，同じ形式の地殻運動が続き，現在の地層や地
形の傾斜はその総和をあらわすものである。

(2) 高鍋・美層群は走向，ほぼ南北，東へ傾くが，山地に近づくほど(古いものほど)勾
配をまして10°前後になり，美層群下の不整合面が上面木山地東斜面に続く。上面木山地東斜
面と交叉する準平原遺物(この時代は高鍋層群堆積後，通山浜層堆積以前，すなわち，鮮新世
末期から洪積世)あり，それを刻む谷底を埋めて，通山浜層が堆積。静水的なところへ堆積し
た通山浜層の傾斜は上述のどの段丘よりも急→増傾斜運動。上述の4段丘面の勾配は古いもの
ほど急，現在の泥濘原の勾配はもっとも新しい段丘面よりも小。

O-83

U-KK-P

熊野海岸山地及び其の周縁地域の地形と地形発達史(3)(4)-階状侵蝕面-
鈴木 好一・福垣 誠二：地理評， 10, 3, 4, 213-239, 319-349, 1934.

(1) 主として地形図の作業(切妻面，投影断面，山稜線断面)に实地調査を加味して，8段
余りの階状平坦面を識別した。侵蝕面の対比は，近接地域における高度と上下の面に対する順
位関係にもとづいていて，この論文は未完であり，また，侵蝕面の時代についていない。しか
し，(1)(2)の論文で，洪積世としていて，なお，これらの面は，中新世とされる熊野酸性岩を切
っている。

(2) 切妻面から識別した平坦面
面からみとめられるもの

- G<sub>0</sub> 1,800m 大嶺主嶺
G<sub>1</sub> 1,500-1,600余 大台ヶ原山頂，大嶺南部
G<sub>2</sub> 1,300-1,400余 G<sub>1</sub>をとりまく。
G<sub>3a</sub> 1,100-1,200 分布狭し。
G<sub>3b</sub> 800-1,000 地域中央部に広く分布。東北に向い
失滅し，海岸線が面を切っている。
G<sub>4</sub> 700±
G<sub>5a</sub> 400-500余 } 海岸沿い，および，
G<sub>5b</sub> 200-400 } 北山，十津川下流に分布

投影断面および山稜線断
面からみとめられるもの

- P<sub>1</sub> 1,600m±
P<sub>2</sub> 1,400-1,300
P<sub>3a</sub> 1,100±
P<sub>3b</sub> 1,000±
P<sub>4</sub> 900-800
P<sub>5</sub> 700-600
P<sub>6</sub> 500-400
P<sub>7a</sub> 300±
P<sub>7b</sub> 200±
P<sub>7c</sub> 100±

O-84

U-FD-KT-Q

吾妻川流域の地形発達
守屋以智雄：地理評， 39, 1, 51-62, 1966.

(1) 吾妻川流域の火山および段丘地形につき，主として野外調査にもとづいて地形発達史を
編み，地殻運動にも言及した。地殻運動については，
① 低位段丘(伊勢町面)の現河床に対する比高から，中央の古期火山列(荒船山，高
岡山など)が向側の懸念高原・中之条盆地に対して相対的に隆起しており，その傾向は地質学
的傾向や水俣点改刻から知られる傾向とも一致していること。

② 懸念高原の中央部，大津付近の丘陵状の地形は，門貝層堆積時から少くとも懸念層堆
積時以後まで続いた褶曲運動によって形成されたこと(門貝褶曲)を述べている。
(2) 伊勢町面の変位：河床との比高は三原(懸念高原)10m，川原湯(吾妻溪谷)35m，中
之条盆地 25m。伊勢町面は11,000 B.P. よりも新しいので，川原湯は中之条に對
しては，0.78mm/°C年以上，三原に対して1.92mm/°C年以上の隆起を示す。このよ
うな古期火山列の相対的隆起は，中之条面，成田原面にもみられる。

門貝褶曲：裾野と不調和な丘陵，比高100m，NE45°方向に巾2-3km，長さ7-8km，
門貝層，懸念層を褶曲させた小規模な褶曲運動による形成，これは火山活動に先行
する大きな褶曲運動の中の1つのあらわれ。懸念層以後の堆積物を要位させたかかど
うか不明。

O-85

U-CS-Q

本州西端地方における海岸段丘の形成時期の研究

小野 忠 烈：地理評， 36, 7, 391, 1963.

(1) 海岸の砂丘地形が作られた文化期上の時期を明らかにすることを目的として、形成時期の明らかな文化層を継層として、砂丘地形の発達過程と編年とをまとめ、それらから知られる海面の相対的変化と沖積世の局地的な地盤運動とを考察した。海面変化として縄文中期に低下、縄文後期前半に上昇、同後期後半から古墳期中期末に低下、古墳後期後半に上昇、古墳後期末～中世末期に低下、近世にさらさら低下、となる。なお、これは、相対的なものであり、また、縄文後期の極大海進を示す資料はない。局地的な運動をみると、上昇地塊と沈降性の傾動地塊との性格をもつ6地域に分かれ、それぞれの運動様式は有史時代まで続いている。垂直変位量の差は9 mに達する。

(2) 文化層の下限層などから推定した局地的地盤運動は下記の通り6地域に分れる。(値は縄文後期の処女包層の古さ)

- 佐波川以東 5 m、東ほど低くなり、海面下となる。
- 佐波川～榊野川 6～7 m、榊野川～厚東川 10 m
- 厚東川～下関 4 m以下、彦島 7 m
- 彦島～安間半島 4～5 m。

O-86

U-CS-Q

土佐海北東岸の海岸段丘と地盤変動

吉川 虎雄・兵塚 実平：地理評， 37, 12, 627～648, 1964.

(1) 海岸段丘の旧汀線高度の実測と段丘堆積の観察および水準点の改測結果などの資料にもとづいて、海岸段丘の発達史と地盤変動とを論じたもの。H<sub>1</sub>, M<sub>1</sub>, L<sub>1</sub>面は厚さ30 m以上の堆積層から成る所があり、各面形成時に離水下一刻期、その後沈水期があった。旧汀線高度は南東から北西に向って低くなるが、これは地盤の隆起沈降をさし引いた結果である南東から北西への傾動隆起により決定されたものである。この地域の段丘の分化は地盤変動の結果によるのではなく、海面変化の結果であり、その間、地盤変動はほぼ一様な速さで続いていた。その速さは、室戸岬では2 mm/年と推定される。

(2) 旧汀線高度 (P.682の国参照)

- H<sub>1</sub>, 300～80 m
  - H<sub>2</sub>, 265～70
  - M<sub>1</sub>, 195～60 (Riss-Würm間水期約9万年前)
  - M<sub>2</sub>, 125～25
  - M<sub>3</sub>, 20～15
  - L<sub>1</sub>, 15～5 (後氷期海退)
- 何れも南東から北西に向って低くなる。

・室戸岬の絶対的隆起速度 2 mm/年  
・室戸岬付近の傾動速度  
安田に対して古良川は1.2mm/年高くなる。  
(これらは地盤前後の水準点改測資料による。この計算は段丘の高度と良く合う)。  
・行当岬東側に汀線高度急変するところあり。断層か撓曲が予想される (M<sub>1</sub>面で東へ50 m低くなる)

S-1

柳が瀬断層

杉村 新：四紀研， 2, 6, 220～231, 1963.

(1) 柳が瀬断層を活断層としてみた場合、比較的簡単にえられた情報をまとめたもの。測地結果と地質は他より引用；露頭観察は主として岩脈の水平ずれと、小断層面の条痕。断層・運動の年代がよくわからない。

(2) 川の shift 以外は、大体において、柳が瀬断層の左水平ずれを推定する根拠を提供している。

位置：福井県今庄・岐阜県南が原間

水平ずれの量：totalで1 km (木之本南方にて)

FT-CB-KK-Q

U-FD-HK-LP

S-2

5万分の1地質図「藻雲山」

勝井 義雄・佐藤 博之：網走, 49, 1～42, 1963.

(1) 沖積層 a Ma-b, Mp

礫堆積物 T 現世

湖岸段丘堆積物 Yt

砥草原火山灰層 Lt, Ht

河岸段丘堆積物 B Kp, 洪積世

新規屈斜路火山碎屑流堆積物 以下略

中期古期屈斜路火山碎屑流堆積物, 以下略

(2) "美幌層の旧汀線は、飯口(1959)の栗別面(C面)に相当し、およそ海拔12mの高さで追跡される。羽島(1962)はこの面を下末吉面に対比した"(C面は一般に80m)。

他図中における美幌相当層：止別砂礫層(斜里) 札鶴層(斜里岳) 上部砂礫層(小清水)

(摺曲に関する否定的資料)

国府谷etal.(1962)は、札鶴層と仁田層とを対比しているが、仁田層は沖積世のもので、この対比はあまりである。したがって、"知床中軸帯の一大撓曲運動"に帰することとはできない。

S-3 S-HK-R

5万分の1地質図「小清水」  
 島田 忠夫・矢崎 清良：網走、38、1~16、1959。  
 (1) 沖積層 20m > } 現世  
     砂丘 3~25m }  
     河成段丘 } 更新世  
     美幌層（銅路層に對比させる）  
 (2) 沖積層：  
     海岸、藻琴湖・藻琴湖などの湖畔、藻琴川・丸万川・オンネナイ川・浦土別川・止別川  
     などの流域に分布、いずれも層厚数m内外、最厚部でも20m以内。

S-5 U-FD-HK-LP

5万分の1地質図「峰浜」  
 杉本 良也・三谷 勝利：網走、40、1~48、1962。  
 (1) 現河床氈原堆積物 Al } 沖積世  
     砂丘 T }  
     崖堆積物 Rt }  
     河岸段丘堆積物 Tr }  
     米田層 T<sub>2</sub>・T<sub>1</sub> } 洪積世  
     屈斜路火山噴出物 Kv }  
     以下略  
 (2) 第1段丘堆積物T<sub>1</sub>：80~160mの平坦面をつくる。知布泊からオモタイ沢口の間の海食  
     差では、20°前後の傾斜角をもった盆状向斜構造をつくる。この軸  
     は、蒸籠の新第三紀層の向斜軸と斜交している。  
     第2段丘堆積物T<sub>2</sub>：20~80mの平坦面をつくる。  
     米田層：標高20m以上の平坦台地をつくる。T<sub>2</sub>より新しいことから、銅路統には対比で  
     きない、もっと新しいものであろう。

S-4 U-HK-LP

5万分の1地質図「鋸里岳」  
 杉本 良也・長谷川 潔：網走、50、1~42、1959。  
 (1) 氈原堆積物 A、火山岩層堆積物 T、扇状地堆積物 F、摩周軽石堆積物 M } 現世  
     鋸里岳火山岩層堆積物、鋸里岳火山噴出物 Sh・D }  
     河岸段丘堆積物 R }  
     札幌層 Sp・Ssd }  
     屈斜路火山噴出物 Kv } 更新世  
     エトニヒ山砂層 E(標高600m平坦面；古いカルデラ湖か?) }  
     鋸里岳基底火山噴出物 Shd }  
     以下略  
 (2) 札幌層分布地は、標高100m以下の丘陵平坦地。Kvの溶結凝灰岩の平坦面（流走面）より  
     平坦化が一層すすんでいる。  
     この平坦面は、斜里・藻琴山・小清水・網走の各箇所にまで連続している。

S-6 S-HK-R

5万分の1地質図「網走」  
 島田 忠夫 網走、27、1~20、1961。  
 (1) 沖積層 約10m } 第四紀  
     美幌層 約50m Bi(銅路層に對比)  
     以下略  
 (2) 沖積層  
     海岸にはほとんどない。網走川河口の、網走市街地・車止内の沢には30m以覆の沖積層  
     が分布している。



S-7  
5万分の1地質図「樺峯岬」  
猪木 幸男・垣見 俊弘：鋏路，72，1~22，1956。  
(1) 平坦面  
沖積層  
小越面  
ヤンケベツツ面 Y：40~80m  
          { Im<sub>3</sub>：120~160m  
          Im<sub>2</sub>：200~250m  
          } 舌別層  
豊似面 Ty：300m内外  
(2) ヤンケベツツの旧打線の位置は比較的あらかから歌別：約60m  
          △228.2m南方：約80m  
          舌別川：約60m  
          舌別の北方：漸次低下。  
岬の尖端に近く最高点のあることは，小笠原1941により指摘された。  
小越層中より *Mammontiaes primigerias* 産出。

U-HK-LF  
5万分の1地質図「白濁」  
鈴木 泰輔：鋏路，46，1~38，1958。  
(1) 沖積層 現世  
          段丘堆積物 }  
          湖成層 } 洪積世  
          鋏路層 }  
          厚内層群 } 鮮新世/中新世  
          以下略  
(2) 鋏路層  
鋏路市付近では厚さおよそ120m。  
本図中地域には，下限から60m以上は分布しない。  
(佐々 保雄，1969，矢部環歴論文集Iを引用している)。

S-8  
5万分の1地質図「養留」  
猪木 幸男・秦 光男：鋏路，71，1~28，1956。  
(1) 第4段丘面 5~10m 養留岬図中地内  
          第3段丘面 10~40m 小越面  
          第2段丘面 100~200m ヤンケベツツ面  
          第1段丘面 200~340m 舌別面  
          豊似面  
(2) 第3段丘面は，樺峯岬・帆峯岬図中地域のいくらべ非常に低い，旧打線も比較的あきらかである。

U-HK-LP  
5万分の1地質図「養留」  
小山内 照・三谷 勝利：鋏路，37，1~33，1961。  
(1) 水山灰層 } 沖積世  
          沖積層 }  
          段丘堆積物 } 洪積世  
          鋏路層群 } 厚50m+  
          チライカリベツツ層 } 中新世  
          以下略  
(2) 鋏路層群は，図中の北半部に広く発達，基底は南側の標高40~60mにあり，北方にむかってゆるく傾斜している。  
全体で50m以上の厚さをしめす。

S-9  
5万分の1地質図「樺峯」  
舟橋 三男・猪木 幸男：鋏路，70，1~64，1956。  
(1) 第VI段丘 10~20m 養留岬図中地内  
          第III段丘 50m内外 小越面  
          第II段丘 100~180m ヤンケベツツ面  
          第I段丘 260~350m 舌別面  
          豊似面  
          第III段丘堆積層の基底部近くより貝殻化石を多量に産出。  
(2) 樺峯岬より，西岸にそって段丘面が次第に北方へ低下している

U-S-HK-P  
5万分の1地質図「厚岸」  
日高層 先白亜紀  
池田層の露頭が標高130mのところにあるという記載が，たまたま説明書にある。  
(地質図をみれば，もつと高いところ分布しているかもしれない)。

**S-13**  
5万分の1地質図「阿茶」  
水野 篤行・佐藤 茂：銅路，34，1~74，1963。  
(1)

本 著 者	岡崎，1958~1961	羽島，1962
段丘 堆積 層	$t_6$ (2) $t_6$ (1) $t_5 \sim t_4$ $t_3$	低位河岸段丘 銅路段丘 (R-W) 根室段丘 (R)
	$t_2$ $t_1$	→白糠段丘 (M-R) 銅路層群 (M-R)
阿寒火山占期噴出物		多摩面 ? } 前多摩面
銅路層群		

(2) 銅路層群 (更新世前期)  
向斜軸：標茶町土樽路——銅路市大栗毛。基底は、向斜軸部では深さ400 mをこえる。  
段丘の標高： $t_1$  200m,  $t_2$  130m,  $t_3$  110m,  $t_4$  90m,  $t_5$  (1)75m,  $t_5$  (2) 55m  
段丘の対比：飯口(1959)は、大栗毛西部の $t_5$ (2)をC面、阿寒市街~中阿寒付近の $t_4$ ・ $t_3$ をC面、 $t_2$ をI面に属させている。

**S-14**  
5万分の1地質図「標茶」  
齋藤 昌之・北川 芳男：銅路，23，1~30，1963。  
(1) 新期火山灰層 { 沖積層 }  
チャンペンツローム層 / 河岸段丘2 } 更新世後期  
泉川軽石流 / 河岸段丘1 }  
オソノベツ軽石流 }  
栄塚石流 }  
トーロ層 } 更新世中期  
標茶層 }  
シラフルトロ層 } 銅路層群 } 更新世前期  
ルラン層 }  
(2) 銅路層群と地形面との関係：  
佐々(1939)、岡崎(1960)は白糠段丘を銅路層の堆積面とかんがえているが、根室段丘とのあいだに堆積面はなく、むしろ根室面が堆積面とおもわれる。  
銅路層群の年代：岡崎(1961)によると洪積世早~中期。  
主なもの：「標茶」図の東南端から「尾鞍」図巾へ北東から南西へのびる向斜軸(柴崎ら，1958)。  
ともなうもの：標茶市街の南側にこれと平行な背斜軸。

**S-15**  
5万分の1地質図「雄別」  
水野 篤行・白石 浩：銅路，21，1~78，1960。  
(1) 現河床堆積物 } 沖積世  
火山灰層 }  
沖積段丘堆積層 } 後水期  
新期段丘堆積層 }  
"先カルデラ噴出物"阿寒火山占期噴出物 }  
占期段丘堆積層 (高さ230~300mの段丘面) } 洪積世  
← ゆるい波曲構造の形成 } "後期  
銅路層群 } "前期  
以下略

(2) 北海道開発局農業水産部(1959)によると、銅路層群全体は第21図(P.62)にしめすように、非常にゆるい向斜構造をとる(「雄別」図巾地域外)。

**S-16**  
5万分の1地質図「白滝」  
国府谷盛明・長谷川 潔：銅路，33，1~35，1964。  
(1) 現河床堆積物 } 沖積世  
第5段丘堆積物 }  
第4 " } 無土器文化 } 洪積世  
第3 " }  
第2 " }  
第1 " }  
天狗丘燧岩 }  
白滝層 / 白滝燧岩結核灰岩 }  
以下略

(2) 白滝地域を中心とした洪積世後期の編年対比表(P.25)あり。

S-19 U-HK-LP  
 5万分の1地質図「初瀬」  
 森 光 男：旭川，25，1～60，1961。  
 (1) 海岸段丘 段丘堆積層 河岸段丘

---

D面  
 C面  
 B面  
 A面

遠別川河岸段丘  
 登胸内層

---

(2) 海抜  
 C面 20～35m 苫前面  
 B面 40～60m 羽幌面

S-20 U-HK-LP-P  
 5万分の1地質図「蘆富」  
 長尾 捨一：旭川，15，1～42，1960。  
 (1) 現河床花巻原堆積物 } 沖積世  
 泥炭層  
 沼川層 20m土 } 洪積世  
 更別層 500m土 } 鮮新世  
 以下略

(2) 沼川層は，標高80m以下に分布。

S-21 U-HK-LP-P  
 5万分の1地質図「稚内」  
 小山内 照：旭川，3，1～34，1954。  
 (1) 沖積層 Al } 沖積世  
 崖線弱状堆積物 Af }  
 砂丘構成物 As }  
 40m段丘堆積物 Tl<sub>2</sub>  
 80m " Tl<sub>1</sub> } 新期洪積世  
 沼川層 厚さ25m + Nk  
 以下略

(2) 沼川層の分布高度は，天北・宗谷地域全般を通じて，標高90～100mを限度としていて  
 それ以上の高さのところにはない。

S-17 U-HK-LP-P  
 5万分の1地質図「苫前」  
 村馬 坤六・松野 久也：旭川，33，1～16，1954。  
 (1) 沖積層 : 現世統  
 段丘堆積層 } 更新統  
 苫前段丘 }  
 羽幌段丘 }  
 中部丘陵面  
 以下略

(2) 海岸段丘の高さ  
 本図市内 北方約10km「羽幌」図市内  
 20m土  
 30～35m  
 50～60m  
 80～100m  
 60～65m  
 100～120m

S-18 U-HK-LP  
 5万分の1地質図「虻尻島」  
 森 光 男：旭川，28，1～24，1960。  
 (1) 現海浜堆積物 } 沖積層  
 沖積段丘堆積層 }  
 E面 " }  
 D面 " } 洪積層  
 C面 " }  
 B面 " }  
 A面 " }

(2) 西 ← → 東  
 (天売島) (虻尻島) (北海道本島)  
 E面 20～40m 20～40m } 苫前面  
 D面 40～55m 40～50m }  
 C面 60～75m 55～75m } 羽幌面  
 段丘面は全体に東方にゆるく傾斜している。

U—HK—LP・P

S—22

5万分の1地質図「霞川」  
今井 功・角 靖夫：札幌，55，1～52，1957.

- (1) 沖積層 } 現世  
 火山灰層 }  
 段丘堆積層 } 更新世

以下略

- (2) 旧汀線高度  
 a 5 m, t<sub>5</sub> 10～20 m, t<sub>4</sub> 25 m  
 t<sub>3</sub> 30～55 m, t<sub>2</sub> 75～135 m, t<sub>1</sub> 170 m.

FT—HK—P

S—24

5万分の1地質図「茅沼」  
高嶺 正次・上村不二雄：札幌，18，1～46，1952.

- (1) 氾濫原堆積層 } 現世  
 砂丘層 }  
 類似火山・灰層・赤井川火山噴出物 }  
 飛足礫層・奈市川礫層 } 更新世  
 滝ノ瀧砂礫層 }

以下略

(2) 飛足礫層は、國中南西部の飛足村において、新第三系山地の前面に、山脚の高さ100mから……分布する。指後山地に接するところは地形上断層と推定される。断層活動の時期は、これを契機として本礫層が生成されたとおもわれるので、おそらく更新世であろう。

S—HK—P

S—23

5万分の1地質図「札幌」  
小山内 良也：札幌，21，1～64，1956.

- (1) 現河川堆積物 Al } 沖積世  
 低地帯構成堆積物 }

月寒火山灰層 3 m + Tk  
 礫岩段丘礫層 Tr } 洪積世  
 原別砂礫層 7 m + Ash  
 豊平浮石層 40 m + Sto  
 野幌層 50～200 m No

以下略

(2) 野幌層の厚さは、千才町長都においておこなった試錐結果では、400mをこえている。また、「札幌」図中の米里でおこなった結果でも、100m以上におよぶ。

FD—HK—LP

S—25

5万分の1図「石狩」  
垣見 俊弘：札幌，12，1～47，1958.

- (1) 石狩段丘  
 { 低位段丘群 { 高岡段丘 18～25 m IV  
                   { 知津野段丘 25～50 m III  
                   { 富段丘 50～84 m II  
                   { 中位段丘群 { 地蔵沢段丘 65～100 m I

これらは、中野（1956）、漆（1955）が北海道において全般的にみとめた低位段丘・中位段丘にはほぼ相当する。

(2) 知津野・取富・地蔵沢段丘は、高さが背斜部でもっとも高く、それから遠ざかるにしたがって低くなる。

- III : 30 m 60 m 50 m  
 II : 60 m 80 m 60 m  
 I : 100 m 100 m 80 m
- ↑  
背斜

S-28  
5万分の1地質図「国分」  
沢村孝之助：鹿児島，82，1-19，1956。  
(1) ローム軽石層  
水成シラス  
徳良火山  
国分層群（淡水性の水成岩類）  
第三紀安山岩  
以下略  
(2) 国分層群  
・年代：鮮新世末期あるいは更新世初期。  
・分布：通常海拔140m以下にほぼ水平に。  
・急斜斜部：松水部落から春山原にのぼる通路の海拔140m付近には、第4図（P.7）のようなる急傾斜部があるが、おそらく四万十層群の西縁をよぎると推定される断層に平行した、NNE-SSWの断層が伏在するであろう。  
\*日当山町松水部落東方

S-26  
5万分の1地質図「宇部」  
清原 清人：福岡，35，1-22，1956。  
(1) 〔厚東川地区〕 〔厚狭川地区〕 〔企救半島地区〕  
沖積層 沖積層 沖積層  
河原段丘堆積層 河川段丘堆積層  
琴崎層 宇部層群  
古第三紀 宇部層群  
以下略  
(2) 琴崎層  
年代：本層の相当層とみなされる沖見初段坑台坪下（宇部東部図巾内）の粘土層から、*Stegodon orientalis* Owenがしられる。  
厚さ：海底部では試錐の結果によれば約50m。  
沖積層  
海底の砂泥は海上試錐によると、その厚さが120~150mに達するものようである。

S-29  
5万分の1地質図「吉野山」  
平山 健・岸本 文男：京都，75，1-44，1957。  
(1) 沖積層  
洪積層  
竜門層 } 鮮新-更新統  
大淀層 }  
新期火山岩類  
和泉層群  
以下略  
(2) 大淀層  
年代：植物化石から、鮮新世より古くない。  
分布：吉野山北岸の山地のすそ。紀ノ川下流の菖蒲谷層の東方延長。  
断層：大淀町の比曾-西増間の田奈井谷には、和泉層群が大淀層上に断上した露頭。断層は  $\frac{20}{20-30}$ ，断層帯の巾は1m。志井田（1953）は千股断上と名づけた。菖蒲谷時階（鮮新世以後）の中央構造線の運動に相当。

S-27  
5万分の1地質図「近江長浜」  
磯見 博：京都，6，1-51，1956。  
(1) 第四系  
沖積層，石灰岩堆積物  
扇状地堆積物，牧田層  
牧田層  
(2) 牧田層  
年代：おそらく鮮新世末期ないしは更新世初期。  
走向傾斜：NE，25NWまたはNE，25NS。  
断層：東海道線以北の大高付近で、NWN方向の小断層によって北方の古生層と接している。

S-30

U-CB-P

5万分の1地質図「神子元盛」

角 清愛：東京，109，1-33，1958。

(1) 沖積層

河成段丘堆積層 } 第四紀

城層 } 鮮新-更新世

白浜層群 } 中新-鮮新世

(2) 城層

年代：城層の様式地は修善寺図中地域内であるが，田山・新野(1931)のように，膠結度・溝面からの高度からみて，河成段丘堆積層より古いとかんがえられ，城層に対比した。

分布：下田町南方の丘の上 海拔約65m } 3ヶ所  
下田町南西方 海拔約40m }  
須崎北方 海拔60m }

S-32

FT-KS-P

5万分の1地質図「伊万里」

今井 功・沢村孝之助：福岡，69，1-83，1956。

(1) 沖積層

新期砂礫層 } 現世

伊万里安山岩類 } 更新世

有田流紋岩類 } 鮮新世

西が岳玄武岩類 } 鮮新世

田期砂礫層 } 鮮新世

眉山角石安山岩 } 鮮新世

眉山石英安山岩 } 鮮新世

以下略

(2) 貫斜断層：依世保図市内で玄武岩をきり70m北おち，本図市内では少なくとも40mの落差  
国見山断層：40m北おち，玄武岩の活動直前。  
長浜断層：玄武岩の分布からみると約100m北おち。  
桶久断層：玄武岩をきり約60m南おち，  
これらいずれの断層においても，下位の第三系の層間落差と玄武岩の落差とがかならずしも一致しない。

S-31

FT-KS-P

5万分の1地質図「駒ノ浦」

長浜 春夫・松井 和典：福岡，79，1-66，1958。

(1) 沖積層

玄武岩類および凝灰角礫岩 } 更新世

石英安山岩 } 鮮新世

以下略

\* 玄武岩類 { 上部玄武岩類

{ 西海凝灰角礫岩

{ 下部玄武岩類

(2) (P.47より)

西海凝灰角礫岩の生成前後には，断層運動があった。西海村大田和付近に，下部玄武岩類を切る，ほぼ東西の断層があり，南側が相対的に上昇している。

S-33

U-KS-R

5万分の1地質図「日向青島」

木野 義人：鹿児島，84，1-63，1958。

(1) 砂または砂礫

沖積堆積物 } 現世

宮浦層 | 現世

ローム層 | 更新世

シラス灰石層 | 更新世

段丘礫層 | 更新世

梅谷層 | 更新世

宮崎層群 | 鮮新-中新世

以下略

(2) 宮浦層

分布：図中南東隅の宮浦部落；伊比井。  
岩相：貝殻を多量にふくむ粗粒砂層。  
年代：ローム層がないので現世級とかんがえられる。  
標高：海面上約7mの段丘をなす。

S-36 U-TH-P  
 5万分の1地質図「羽前金山」  
 大沢 稜・角 清愛：秋田，57，1-66，1961.  
 (1) 沖積層：現世  
 河岸段丘堆積層 } 更新世  
 山屋層 (90 m-) }  
 真室川層：鮮新世 (および中新世最上部)  
 以下略  
 (2) 山屋層  
 年代：本層中にふくまれる dacite tuffは，東隣鬼首岡巾地域内に分布する鬼首カルデラからの dacite welded tuff (Plio. 末~Pleist. 初) に，岩相・岩質がよく類似しており，本層はほぼこれに対比しうる。  
 分布：岡巾地域南西部の海拔150~200mの定高性をもつ丘陵地域。

S-34 U-CB-P  
 5万分の1地質図「五百石」  
 野沢 保・坂本 亨：金沢，29，1-68，1960.  
 (1) 扇状地礫層 } 第四紀  
 扇折扇状地礫層 }  
 段丘礫層 }  
 呉羽山礫層 }  
 北陸層群 } 中新世  
 以下略  
 (2) 呉羽山礫層  
 本岡巾域内：平野の中心へむかって東部では西へ，南部では北へ約10°かたむく。  
 八尾岡巾域内：東へかたむく。  
 全体として第四紀における造盆地運動の傾向を明日にします。  
 年代：充分な証拠はないが，一応吉期更新世とみなす。

S-37 FD-TH-P  
 5万分の1地質図「近川」  
 今井 功：青森，9，1-45，1961.  
 (1) 沖積層 } 現世-更新世  
 火山灰層 }  
 段丘堆積物 }  
 田名部栗層 (0~120) }  
 砂子又栗層 } 鮮新世  
 以下略  
 (2) 田名部栗層 }  
 砂鉄層がしばしばふくれる；堆積地が一樣に広い；基底面がほぼ平坦などの理由から海成層の可能性がある。地層の連続性がみとめられないので，上北郡地域の模式層序と直接対比できない。真側の地域では4'東へかたむき，西側の地域では西に傾斜，したがって，半島の中軸部が背斜状に隆起したことがわかる。

S-35 S-FD-CB-P  
 5万分の1地質図「八尾」  
 坂本 亨・野沢 保：金沢，28，1-69，1960.  
 (1) 扇状地堆積物および沖積層 } 第四紀  
 扇折扇状地堆積物および段丘堆積物 }  
 高位段丘堆積物 }  
 呉羽山礫層 } 鮮新世~中新世  
 北陸層群 }  
 以下略  
 (2) 呉羽山礫層 }  
 坂本ほか(1957)，地報月報10 IIによると，NNE-SSW方向を軸とした運動をしている。  
 たたとえは中部丘陵北部(斜水丘陵)はdome状に隆起している。  
 扇状地堆積物 (P. 63 第17図)  
 深井(1958)，富山県の地理学的研究(1)によれば，井田川の地下で第四紀層の基底は300m以下深。

S-TH-P

S-38  
 5万分の1地質図「弘前」  
 大沢 謙：青森，28，1~52，1962。  
 (1) 沖積層：現世

岩	{	段丘堆積層 山田野層	} 更新世
水			
大	{	黄金山層	} 以下略
山			
	{	弘前湖盆層	} 鮮新世
	{	高野石英安山岩	}

(2) 弘前湖盆層  
 酒井重治郎 (1960)，弘前地域の水文地質および地下水に関する研究によれば、年代：泥炭層中から *Menyanthes trifoliata* を産するので、法統統；層序は洪積層の最下部を占める。  
 分布：圏中地域東部の地下（少くとも250mまで、……基底の深さはここでは記述してない。、酒井，1960をみられたし）。

S-FT-CS-R-P

S-39  
 5万分の1地質図「鳥取北部・鳥取南部」  
 村山 正郎・一色 直弘：岡山，11・21，1~66，1963。  
 (1) 沖積層

陸	{	砂灘堆積層	} 第四系
海			
岸	{	砂丘層	} 以下略
段			
石	{	段丘礫層	} "鮮新世" 火山岩類
礫			

(2) 古岡・鹿野両地長断層の記載あり。(P.3~6)  
 鳥取平野を構成する地層の中、下部は更新世のものであろうが、鳥取市買蔵では100mの深さでも、まだ岩盤に達していない。(総合庁開発部，1957，全国深井地質資料台帳による。)

FT-FD-TH-LP

S-40  
 5万分の1地質図「福原」  
 平山 次郎・角 清愛：青森，44，1~90，1963。  
 (1) 段丘堆積物

{	揚子層	} 第四紀
{	井川層	} 鮮新世

以下略

(2) 阿仁川そいの縦断面図 (第22図) によれば、米代川北岸の坊沢断層の延長が、蟹沢山山塊の中央部をほぼNNW-SSW方向によきまの横曲によって段丘面が変形したとみられる。

U-CS-P

S-41  
 5万分の1地質図「作用」  
 神戸 信和・広川 浩：岡山，45，1~29，1963。  
 (1) 沖積層

{	段丘堆積物	} 第四紀
{	佐用礫層	} 新第三紀

以下略

(2) 佐用礫層  
 年代：風化および開折の状態，などから大坂層群に對比できるとみられる。  
 分布：圏中直西部で，海拔240~280mに定高性稜線あり。堆積当時の平坦面が推定される。  
 堆積相：海成ではない。



U-S-FD-CB-LP-P

S-42

5万分の1地質図「富山」

坂本 章：金沢，22，1-45，1963。

(1)

地域	二上山丘陵	高岡付近	射水丘陵	吴羽山丘陵
	水見南部	伏木付近		
沖積世	沖積層			
	庄川礫層 友坂礫層 直使礫層			
洪積世	窪砂層	伏木礫層	高岡礫層	
	上田子層	一宮礫層	射水累層	
			吴羽山礫層	

(2) 標曲：吳羽山礫層は、富山平野地下に潜在する背斜構造（立石，1950，地調月報）を形成していると推定される。……地質図に記入してある。  
隆起：窪層は、水見市南部にひろがる海拔25~45mの平坦な台地をつくる海成層で、おそらく下末古溝連に相当するものであろう。  
沈降：射水平野では、新第三紀層は約200mの深さに潜在している（海岸地域におけるボーリング資料による）。

S-44

5万分の1地質図「塩尻」

片田 正人・積見 博：金沢，54，1-52，1964。

(1) 第四紀層については、

小林国夫，1960，*J.Fac.Lib.Arts.Sci.Shinshu Univ.*

小村国夫，1961，*地質雑誌* によって記述してある。

(2) 第四紀層の厚さ：

松本盆地中心部では、100m以上。盆地周辺部たとえば塩尻市大門では、深さ75mで蒸發の古生層に達する（岸・尾崎・菅野，1963，*地調月報*による）。

S-CB-P

S-45

5万分の1地質図「秋葉山」

齋藤 正次・積見 博：京都，48，1-34，1954。

(1) 沖積層

天竜川礫層 第四系

三方原礫層

小笠山礫層

大日砂岩層 新第三系

以下略

(2) 小笠山礫層

U-CB-P

S-43

5万分の1地質図「城端」

井上 正昭・水野 篤行：金沢，27，1-32，1964。

(1)

第四系	崖堆積物	沖積堆積物	および扇状地堆積物
	開析扇状地堆積物	および段丘堆積物	
	戸室火山噴出物	高位砂礫層	
	填生累層	以下略	

(2) 高位砂礫層

分布：図中地域の北西部の東よりの地域、すなわち蟹田丘陵  
高さ：分布域の南端で200m，北端で60mのところでは沖積層下に没する。  
傾斜：平均3~5°北へゆるくかたむく。

S-46

5万分の1地質図「葦津」

太田 良平：新潟，98，1-75，1957。

(1) ↓〔層序順でない〕

沖積統	浅間火山	更新統	菅津白根火山
	四阿火山		燦名火山
	門貝層（新第三紀-更新世）	以下略	

(2) 門貝層 (K)

走向はかならずしも一定しないが、おおむね

45~90°

15~35°

U-KT-P

S-47 U-CB-P

5万分の1地質図「見付・掛塚」  
横山 次郎・坂本 亨：京都，60・71，1-43，1957.

(1) 沖積層  
段丘堆積層  
篠田原礫層・三方原礫層  
小笠原群  
曾我果層  
以下略

(2) 小笠原群  
粘土層の傾斜は5° SW以下であるが，礫層の傾斜はときに30° SWに達する。

更新世  
新  
新世

S-49 S-KT-O

北関東の地質からみた春日部層序試験  
矢崎 清貴・三 梨 昂：地調月報，14，4，378-379，1963.

(1) おなじ号のP.379-380にのっている福田 理の春日部層序試験の坑井地質層序とならべて下にする。

(2) いずれも露頭要旨。

矢崎ら		福田	
(単位m)			
0 ~ 27	有楽町層	0 ~ 4	表 土
27 ~ 42	成田層群	3 ~ 27	有楽町層
42 ~ 890	上総層群	27 ~ 422	成田層群
890 ~ 1,255	揚井層	422 ~ 1,041	上総層群
1,255 ~ 1,667	土 塩 層	1,041 ~ 1,675	揚井層・ 都幾川層
1,667 ~ 2,520	福 田 層	1,675 ~ 2,554	福 田 層
	以下略		以下略

S-48 S-FT-KK-P

放電式音波探査による大阪湾地質構造の研究

早川 正巳・森 喜義：地調月報，15，1，1-28，1964.

(1) 沖積層  
上部洪積層  
大阪層群  
神戸・二上層群  
基盤岩類

の単位程度は識別される。

(2) 仮壁断層・甲陽断層は大阪湾底で大阪層群を急斜させている。

分布：第8図 (P.27)

大阪層群の基底面の深さについて，まとまった記述がない。

S-50

富山礫成堆積層の新生界

坂本 亨・今井 功：地調月報，10，2，75-82，1959.

(1) 富山層群 (第四紀層)

沖積層 } 100m +

現扇状地礫層 } 100m +

田原状地礫層 } 100m +

呉羽山礫層 } 200m +

~~~~~ (不整合) ~~~~~

北陸層群 (新第三紀層)

波曲的運動：NNE-SSW方向

の軸による隆起・沈降を主とした全般的な起状の増大。

呉羽山礫層が10°内外の傾斜をかたむいている。その背斜軸は，地震探査の結果 (立石，

1950，地調月報，14，78-80)，呉羽山丘陵東方の沖積層下に潜存する。

FD-CB-P

富山礫成堆積層の新生界

坂本 亨・今井 功：地調月報，10，2，75-82，1959.

(1) 富山層群 (第四紀層)

沖積層 } 100m +

現扇状地礫層 } 100m +

田原状地礫層 } 100m +

呉羽山礫層 } 200m +

~~~~~ (不整合) ~~~~~

北陸層群 (新第三紀層)

波曲的運動：NNE-SSW方向

の軸による隆起・沈降を主とした全般的な起状の増大。

呉羽山礫層が10°内外の傾斜をかたむいている。その背斜軸は，地震探査の結果 (立石，

1950，地調月報，14，78-80)，呉羽山丘陵東方の沖積層下に潜存する。

S-51

FT-KS-Q

北松炭田地質図説明書

北松炭田 日本炭田図 Ⅱ, 1-130, 1958.

(1) P.72より: 本地域の地質構造は佐々川衝動を境として東西の2地区にこれをわけることができる。

P.12より: 佐々川衝動の層序的落差は約800mにおよぶところがあり、本地域の東縁をN-E-SW方向にはしり、いくつつかの断層を派生している。その北東延長は、志佐川流域をへて鷹島・二島間を通るものとかんがえられる。

P.74より: 断層は佐世保市トノコ島・母島間を通過する。

(2) 佐々川断層

NW上りSEおち: 玄武岩基底面の高さに50~70m差がある。(第28図より抄録者よむ) 段丘面の高さに20mぐらゐの差がある (第27図より抄録者よむ)。

P.より: 玄武岩類は、沢村孝之助によれば洪積世。(段丘のこともよくめ、これ以上の年代記載なし)。

P.79より: 猪瀬断層・平野断層 (いずれも佐々川断層の副断層) は玄武岩岩脈を切る。洪積世に活動。

S-53

U·FT-NJ-P

青葉山層の成因についての1つの考察

生出 藤司: 新生物, 33, 820-824, 1961.

(1) I. まえがき 青葉山層(洪積世) 35m } 仙台市の西南に発達  
仙台東部群(鮮新世)

Ⅱ. 第四系の発達に関係のある構造運動 (下記)

Ⅲ. 青葉山層の成因についての考察

した。青葉山層の成因については、その後そこが隆起して、流路を北へうつした。

(2) 鉤取一奥武士断層: 鉤取付近では、この線の西側に平行にはしる逆断層が高位段丘礫層を切る。

長町一利府線: この線の南東側が沈下するよるな逆断層。長町付近では、青葉山層を切る。広瀬川凝灰岩層(鮮新世中部)の基底面の構造:  $\Delta 212.1$ を中心と隆起している。水采はこより放射。したがってこの構造は第四紀に形成されたものだろう。

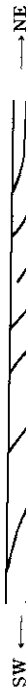
S-52

FT-NJ-P

「鉤取一奥武士断層」の意義について

生出 藤司: 地球科学, 25, 12-20, 1955.

(1) 鉤取断層は断層ではない。しかし、その位置に彎曲帯があり、これを鉤取一奥武士断層とよぶ(双葉構造線の延長)。その線の平面形はS字形で、NW-SEにはしる。断面形は、



(生出, 1955, 地質雑誌, 61, 389, 第5図より)

(2) [どの年代の地層をどれだけ変位させているか、について、明確な記載がない。] (抄録 S 53参照)

S-54

FT·FD-TH-LP

褶曲運動による地表の地形について

杉村 新: 震研業報, 30, 2, 163-178, 1952.

(1) 秋田 新米代川の支流阿仁川 } の河岸段丘の高さの分布をしらべ、阿仁川と小国川では段  
" 雄物川の " 岩見川 } 山形県最上川の " 小国川  
丘面が基盤の地質構造とおなじむきに彎曲していることをあきらかにした。

(2) 褶曲線・断層とも、走向はいずれも南北に近い。

阿仁川: 向斜軸2本とその間の背斜軸1本

小国川: 向斜軸3本とその間の背斜軸2本このうち最も東にある向斜軸のところには、

西おち東あがりの経理原断層がある、この断層は北方に長く追跡することができる。

S-55

U-S-KT-R

Changes in sea level, seismic upheavals, and coastal terraces in the southern Kanto region, Japan (1)(II).

Sugimura, A. & Naruse, Y.: Japan J. Geol. Geogr., 24, 26, 101-113, 165-176, 1954-1955, (1) 水河の盛衰にともなう海面変化を考察して関東南部の洪積世末-沖積世の地史を説明すると同時に、関東南部の渚原段丘の高さの分布が、1923年の関東地震に際する隆起・沈降量とほぼ比例することをおききらかにした。

(2) 最近6000年間の大磯地塊および房総地塊の隆起量: 約(25-5) = 20m ただし5mは海面低下量の推定値(本文では6mとなっているが、ここでは大凡の量として5m単位とする。)

おなじ期間の東京下町の沈降量: 約-(5-5) = 0m (同上)

S-57

FT-CS-LP

貫崎山断中新層に発達する中央構造線

中川 典・中野 光雄: 地質雑報, 70, 812, 52-58, 1964, (1) 中央構造線の活動は、少なくとも2回ある。

1. 段丘礫層以前の高角逆断層 (dipはN $\rightarrow$ 80 $\sim$ 80 $\circ$ ). 北側の和泉層群と南側の三波川結晶片岩との境界をなす

2. 段丘礫層以後の低角断上断層 (下記)

段丘礫層 結晶片岩・和泉層群, 1の断層を不整合におおおう。上位の勢力礫層と芝生礫層にわけられる。

(2) 上記2の断層

N75E $\cdot$ N25 $\sim$ 35, 走向は1の断層と平行, しかしところどころで1の断層を切る。断層帯の中は10m以上, 断層角礫・断層粘土などからなる。しかし, 圧砕岩のようなものはない。(段丘礫層の年代: 洪積世末という以上にはわかっていない)。

S-56

FT-FD-TH-LP

仙台付近の第四系および地形(2)

中川 久夫・相馬 寛吉: 四紀研, 2, 1, 30-39, 1961.

(1) (1)の論文にはI章-IV章。

V章 仙台市付近の地形面転位(下記)

VI章 第四系の花柳分析

VII章 青葉山層および仙台上町段丘堆積物には寒冷気候をしめすものがふくまれている。第四系火山灰層の重鉱物組成

4層あり, 段丘対比の有力な手段としてもいられる。

(2) 第1図に示めされた青葉山層は, 複雑断層構造をしめす。すなわち, NWSE方向の(A)(B)(C)(D)NWSE方向の(A)(B)(C)(D)線と(いずれも, SW上り, NEおち), NESW方向の(E)(F)(G)(H)線と(EとGは背斜, Fは向斜, HはNWあがりSEおち)がまじわっている。

S-58

FT-CS-LP

阿波・池田町白地および飯野の"中央構造線"

中川 典: 徳島県理科学会誌, 5, 9-11, 1963 or 1964.

(1) 段丘礫層 { 上部礫層 (和泉層群からの礫のみ) 厚さ70m以下  
下部礫層 (結晶片岩礫をふくむ)

和泉層群: SsとShの互層, 35 $\sim$ 65, 北部に発達

三波川結晶片岩類: green schist, 60 $\sim$ 75, 30 $\sim$ 40 南部に発達

(2) 中央構造線の活動

1. 段丘礫層以前の逆断層運動

断層面: 60 $\sim$ 80, 75 $\sim$ 85 巾10m以上の断層破砕帯

2. 段丘礫層以後の断上断層運動

断層面: 25 $\sim$ 35, 75 $\sim$ 85, 垂直転位量は50m

3ヶ所(池田町)に盛頭あり。2ヶ所は和泉層群が, 1ヶ所は上記1の破砕帯がいずれも下部礫層上に衝上。

S-61 U-HK-P  
 5万分の1地質図「岩見沢」  
 松野 久也・田中 啓策：札幌，14，1～168，1964。  
 (1) 現世 { 沖積層  
           { 段丘堆積層  
 更新世 { 茂世互層 (非海成層)  
           { 傾斜不整合：褶曲・断層  
           { 峰延層 (海成層)  
           { 中新世 退分層  
           { 鮮新世 (火山活動)  
 (2) P.136より：第四系は、褶曲・断層によって転位・変形した新第三系以下の断層をおおって、ほぼ水平によこたわる。  
 P.135より：茂世互層の厚さは最大数10mに達する。  
 地質図上より抄録者がよむ：峰延層の露出地域の最高は海拔100m。

S-62 S-CB-P  
 長野県上水内郡豊野町試掘地付近の地質  
 井島信五郎：地測月報，11，4，221～236，1960。  
 (1) 試掘地は、富貴背斜の西方に並走する背斜構造列の南部にある。豊野町付近には、多くの油徴・ガス徴があり、平原内のガス徴地の1つが試掘地にえられた。その結果、155 m以下に数ヶ所のガス徴、533 m以下に油徴がみとめられた。  
 層序：現世 砂礫粘土層  
           更新世 豊野層  
           中新世 論地層 (泥岩)  
           以下略  
 (2) 沈降の資料：  
 沖積層の基底：86 m (主として礫層) 豊野層 (洪積層) の基底。  
 豊野層 (洪積層) の基底：6.0 m以上 (600.7 mまで) で掘どめしている。  
 \* 本当に沖積世のはじまりがこの層準なのかどうかあやしい (抄録者註)。

S-61 S-CB-R  
 越後平野の古地理の問題によせて  
 阪口 豊：四紀研，3，5，284～289，1964。  
 (1) 越後平野の沖積層基底の深さについて、と  
 越後平野の汀線と河道の変遷との2節からなる。前者は、白根市のボーリングコアを花  
 粉分析した結果の解釈である。後者は、白根付近と、その東の信濃川をへだてた亀田付近との  
 表層地質の解釈から、古地理の変遷を推定し、信濃川河口の西につづく海岸線がもと信濃川の  
 河口であったとしているもの。  
 (2) 沖積層基底の深さ  
 井岡流にG層の基底をとれば153.0 m。  
 阪口はG層の上限をとっている：147.5 m (それは最盛期がおわって海面があがりは  
 じめたところ、すなわち 15,000～20,000 B.P.)。  
 白根-亀田地区の傾動  
 6,000～7,000 B.P.以来、白根地区は亀田地区にくらべらべら4.5～4.7 m沈降している。ほ  
 かにも、この付近で西南へむかう傾動の証拠がある。

S-60 S-TH-P  
 庄内地域油・ガス田と産床生成の時期  
 鬼塚 貞：石油技術，29，7，341～349，1964。  
 (1) 庄内地域礫層層序 (第1・2図より)  
 第四系火山岩 (島海山南部地区で350 m)  
 庄内層群 (生石ガス田で550 m)  
 (砂・礫・粘土) { 潟西階 } 対比  
                   { 堀川階 }  
 常禅寺層 (生石ガス田で190 m)  
 (砂・泥質砂) { 笹岡階に対比 }  
 観音寺層 (生石ガス田で220 m)  
 (砂質泥岩) { 生石ガス田で220 m)  
 (2) 庄内層群の途中に、第四紀のはじまりがあるとおもわれるが、その層準は不明。  
 庄内層群の一番厚いところは、第3図によれば、庄内平野の海岸よりのところで、1,000  
 m。(図上で抄録者測定)

S-65 FT-KK-P  
美が原近傍における侵蝕面の性質について  
小林 国夫：地理学，21, 4-6, 172~173, 1948.  
(1) pd面に對比される小起伏面が地塊運動により何段かの高さの分布する。(美が原はホルストをなす)その上を溶岩流がおおっている。地形はやや複雑。地形面は高い方より美が原侵蝕面(2,000m±)  
袴越山面(pd面，溶岩基底面，武石峠礫層面)  
ノタツバラ面(1,300~1,400m)・出峰面(1,600~1,000m)  
高位段丘面(以下略)  
袴越山面の標高は1,700~1,900m  
(2)

S-66 U-CS-P  
仁淀川流域の地形  
中野 尊正：地理学，21, 4-6, 173, 1948.  
(1) 久万高原をつくる侵蝕面は，高い方から順に第1・第2・第3面と呼び，第1面は緑色片岩を，第2面は石垣第三系(Mio.)を切っており，両者いずれも北方へ傾く。第3面は安山岩を切っており，この面のみ，南方へ傾く。これだけ逆にかたむくのは傾動のせいではなく，流路のむきがかわったため。  
(2) 久万高原の高さは700~800m

S-67 U-FT-FD-SJ-P  
Tectonic development of the median zone(Setouchi)of Southwest Japan,since the Miocene  
Huzita,K.;J.Geosci.Osaka City Univ. 6, 4, 103~144, 1962.  
(1) 副題：with special reference to the characteristic structure of central Kinki area  
瀬戸内は2つの活動帯の中間にあり，その中央に近畿三角地帯がある。  
新世界を { 第2瀬戸内統(Plio-Pleist) }  
 { 瀬戸内火山統(Upper Mio) }  
 { 第1瀬戸内統(Middle Mio) }  
の記載・各統の構造をのべている。西南日本を4地区に分ける。瀬戸内区の中で近畿三角地帯の説明がくわしい。最後は第2瀬戸内統後の六甲変動を詳論。  
(2) 隆起：地層の分布図に高さがはいていないので，つかえない。別紙Fig.9のみわずかにつかえる。  
断層：新しく活動した断層の分布は，Fig.6・7・8・11・13にのっている。  
褶曲：おなじく，Fig.15-C, 13にのっているが，15-Cは大きな図で正確にはつかえない。

S-64 U-FT-TH-CB-LP-P  
東北地方の構造発達史における第四紀  
中川 久夫：日本地質学会総会論文集資料“東北日本の特長”，70, 64-73, 1963.  
(1) I. はじめに 東北地方で第四紀が特殊かどうかという問題。  
II. 東北地方の地形・第四系概観  
1. 分布：別紙第1図，200~400mをさかいにしとして山地と丘陵地に分ける。  
2. 第四紀の支配基準面；3. 地形および第四系の転位；地塊の北方への傾動および地塊の境で南おちの断層運動。  
III. 東北地方第四紀地殻運動の特性  
1. 基準面変動の性格：海面変化について一般的に論じている。  
2. 地殻運動の傾向：南北方向の運動+種々の地塊の北方への傾動  
IV. 結論：第四紀は特別な時期ではない。  
(2) 魚沼層群だけが山地(200~400m以上の地域)に分布する鮮新統である。丘陵地の接合面は140~350mの範囲内にあり，一般に内陸方へ高く，海岸方へ低い。九戸段丘の堆積面はこれにつづく。西津沢の礫作段丘の削削面もおなじ。  
一関・肥後川流域間における撓曲運動の文献：  
小野寺，1957，地質雑誌63, 238；関東ローマ・信州ローマ研究会，1963，地球科学no.62, 1；no.63, 10；村田，1939，地理評15, 134；中田ほか，1963，地質雑誌，69

U・S・FT-KT-LP・P

S-68

東京の自然史

貝塚 英平：紀伊国屋新書，C，8，1～186，1964。

(1) 東京付近の第四紀学をまとめたもので，地殻変動の資料は，一部にしかない。

(2) P.55～58：武蔵野の地殻変動

1. 典型的な扇状地の形をとっていたとすると，多摩川ぞいの地域にくらべて，武蔵野面形成以後，川越付近が40～50m沈降した。

2. 荒川ぞいに，川越一川口間に断層が隆曲があり，北東おち，落差は下末吉層で60m，淀橋面で10～20m。

P.170～174：関東造盆地運動

房総半島中部付近で1万年あたり10～13m沈降

S-70

全津地方の地質構造と地蔵との関係

小林 学：地蔵，15，312～320，1943。

(1) 地質：洪積層；砂礫層よりなる段丘。

鮮新統：石英安山岩，重炭を挟在する。

中新統：{ 荻野層 (耶麻化石動物群) }

{ 緑色凝灰岩を主とする地層 }

地殻変動：中新世以後鮮新世以前；鮮新世以後洪世以前；洪積世以後の3つにわけて記述。

歴史に記録されている全津地方の地蔵と地形の変化：流路の変化についてはのべている。

水点の変化；昭和11，18年の全津地蔵

(2) 1. 鮮新世以後洪積世以前の地殻変動

全津盆地東西両縁で，鮮新統が，盆地にむかって急傾斜～垂直構造をしめす。

2. 洪積世以後の地殻変動

盆地東縁の東山村，院内において，湯川の段丘層中に 40 の断層がみられる。

50/ [運動のむきは書いてないが，正断層であろう]

S-FT-TH-P

S-69

河岸段丘 一その地形学的研究一

町田 貞：古今書院，1～244，1963。

(1) 河岸段丘の一般論と主として群馬県における河岸段丘の調査研究。

(2) P.38～89：河岸段丘の地形分析。

1. 久慈川中流西金付近の曲隆と

2. 荒川中流秩父市付近の曲隆とが推論されている。

P.93～162：地盤運動に関する研究。

1. 荒川流域では，北方への傾動と小幡付近の曲隆 (軸は南北) が推定される。

2. 関東山地北縁部で，第55図のような傾動を推定。

3. 荒川中流流域では，中央構造線をさかいとして，内帯側山地の方が隆起量が大きい。

S-71

5万分の1地質図「上野弘」

田中 啓義：旭川，16，1960。

(1) 段丘堆積層 ← (後期) } に構造運動がおこなわれた。

更別層 ← (前期) }  
勇知層 ← (前期)

後期の構造運動は，本図西部に NW NE の2方向の構造をつくった。

NW NE

(2) P.60より；

浅茅野構造盆地の南部～南縁の敷音知図中にみられる，ほぼN-S方向にのびる軸を有する緩傾斜の褶皺曲構造は，古い構造と斜交し，後期の運動 (更別層堆積後) によってできたとかんがえられる。

U・FT-FD-KT-CB-LP

FD-HK-P

S-72 FD-HK-P

5万分の1地質図「敏音知」  
 猪木 幸男：旭川，20，1959。  
 (1) 河岸段丘堆積層 } 岩質からは区別できないこともある。  
 更別層 } (一般にゆるい傾斜)  
 (2) 更別層：(P. 4, 36, 37より)  
 1. ゆるやかな向斜・背斜構造をしめす。  
 2. 部分的、とくに蛇紋岩の分布地域に接する付近では、いちじるしく傾斜し、とき  
 にはほとんど直立していることがある。

S-74 U-KT-CB-KK-P

第四紀(上)  
 小林 国夫：地学双書，17，1~194，1962。  
 (1) 略  
 (2) P.120 多摩丘陵 (T<sub>1</sub>面) 100~200 m  
 " " (T<sub>2</sub>面) 60~90 m  
 P.138 松本付近(大峰面) 1000 m  
 P.125 明石北方(明美礫層) 200 m ±

S-73 U-FT-SJ-P

第四紀(上)  
 小林 国夫：地学双書，17，1~194，1962。  
 (1) 略  
 (2) P.127 山口県下(瀬戸内面) (100~) 300~400 m  
 " " 四国(瀬戸内面) ~200 m  
 P.128 岡山県下(瀬戸内面であらう) 300 m ±  
 " " 岡山県後月群( " ) 300~330 m  
 P.134 愛知県南設楽群(三河準平原) 500~600 m  
 " " 中津川盆地の東側( " ) 1,000 m ±  
 " " 阿寺断層以南の地帯( " ) 500 m ±  
 P.135 狭高面や、土岐砂礫層の堆積面 400 ± 20 m  
 P.137 塩濃栗層/塩濃台地 370 m  
 P.143 中津川付近(土板面) (150~) 200~250 m (~500 m)  
 " " 土岐盆地( " )  
 " " 瀬戸方面( " )  
 " " 木曾川上流地域(地蔵峠礫層) 1,500 m  
 P.139 阿寺断層の北東(塊麻峠面) 1,500 m ; 南西(美濃準平原面) 1000 m ; 転移500 m  
 " " 岐風山断層 ; 転移600 m

S-75 U-J-LP

第四紀(上)  
 小林 国夫：地学双書，17，1~194，1962。  
 (1) (ここには、本書発行当時の著者の意見にしたがって、下末吉面・下末吉層相当のもの  
 の高さを集録する。)  
 (2) P.49 横浜付近(下末吉台地) 40 m ±  
 P.64 福島県太平洋岸 小高~中村間(篠原層) 15 m  
 P.69 能登半島周辺(地形面III) 35~55 m  
 P.124 兵庫県南岸(西八木面) 30~60 m  
 P.130 愛知県(熱田面) 10~32 m  
 " " 岐阜県( " ) 55~100 m  
 P.154 函館付近(中位段丘) 70 m ±  
 " " 釧路周辺(釧路段丘) 40 m ±  
 P.155 阿武隈山地東縁(第3段丘) 40~100 m  
 P.156 岩沼付近30~40 m ; 原町一高岡25~50 m ; 平一勿来40 m ; 高萩一日立30~40 m ;  
 那珂台地25~50 m (いずれも"下末吉面")  
 P.157 那珂台地(大倉の中位段丘) 30 m



S-76

FT-CB-LP-P

Geomorphological studies on the western area of Tenryukyo, Nagano Pref.

有井 珠爵：東学大研報， 8, 357~370, 1956.

(1) 天竜峡の西域を、駒場盆地、三穂丘陵、天竜川右岸帯の3地形区にわけた。この区分の大よその生成は、断層運動によってもたらされたものである。断層は、洪積世以前にでき、現在まで活動しており、西へかたむきさがる逆断層面の特徴づけられる。

(2) 下伊那一竜断層 (Fig.1の1-12)：段丘-机山層を切る。延長25km, ほぼ南北, 西あがり, 川路一竜断層 (Fig.1の13-16)：机山層を切る。延長8km, ほぼ南北, 西あがり, 新田断層 (シンテン) (Fig.1の17-18)：崖堆を切る。延長1~2km, 北西-南東, 西南あがり20m

駒場断層 (Fig.1の19) 延長不明, ほぼ南北, 西あがり, 崖堆を切る。

留々川断層 (トドメガワ) (Fig.1の22)：机山層を切る。延長1~2km, 北東-南西, 西北あがり

S-77

FT-CB-KK-R-LP

Active rock folding in Japan

Otuka, Y.: Proc. Imp. Acad., 17, 10, 518-522, 1941.

(序) 褶曲運動は地質学的に推定されるが、まだ実証されていない。

[瑞穂フォッサマグナ褶曲運動は洪積世までつづいた。

[河岸段丘の変形] 小国川沿岸と鷹ノ巣町付近とで、段丘が向斜のところで収束し、背斜斜にむかってひろがっている。

[水準標石の変位] 能代・大館間など4ヶ所で、水準点変位と褶曲構造とがpositive agreementをしめす。

[結び] 瑞穂フォッサマグナ褶曲帯では、現在でも褶曲が活動している。褶曲のメカニズムを手近かに研究する道を見出した。

[小国川麓、果町の両方とも、その後、杉村 (1952) および平山・角 (1963) の調査があるため、ここに使用しうる資料は、あとの文獻に仰ずる。]

S-78

FD-TH-R-LP

活動している褶曲構造

大塚弥之助：地誌， 14, 2, 46, 1942.

(1) [河岸段丘]

米代川：古い方からa~g面にわけていいる。c~eが向斜と相関。

(水準点改測) 青森・緑が沢間, 米代川, 秋田・黒沢尻間, 長岡・直江津間の4ヶ所で質と改測結果とが相関

(三角点改測) 男鹿半島：展開するようなむきうごいた。静岡・南関東：収縮するようなむきうごいた。

(構造地質学と地誌) 陸羽・能代・大町・関原・男鹿等の地誌は、瑞穂フォッサマグナ帯内の地震である。

(2) [小国川については、その後、杉村 (1952) の調査があり、米代川についても、平山・角 (1963) の報告があるので、この論文から資料をぬきだす必要はない。]

S-79

FT-CB-KK-R-LP

Atera fault and its displacement vectors

Sugimura, A. & Matsuda, T.: Geol. Soc. Am. Bull., 76, 509-522, 1965.

(1) 段丘面および段丘崖のずれから、断層の垂直変位と水平変位とを測定した。その結果をつかって、断層面上に、7つの変位ベクトルを算出した。これによると、

(1) 水平変位は垂直変位の約5倍に達する。

(2) 現在までの断層運動は、つねに左ずれである。

(3) 断層運動のはやさは、約2~4m/1000年ではほぼ一定らしい。根尾谷断層が阿寺断層とはほぼ平行で、これも左ずれなことは、注目すべきことである。中部日本

本の水平ずれ断層についてまとめられてある (Fig.13)。

(2) 高部段丘生成以後現在までの

時間： { 26,000 ± 1600 years B.P.

垂直変位： 27.5 ± 2.0 m

水平変位： 140 ± 35 m

[これらもつづいて計算すると、垂直変位は1m/1000年、水平変位は5m/1000年で、抄録に示したはやさは約2倍となる。]

S-80  
FD-CB-LP  
On the Quaternary sediments and molluscs in the Tokai region, with notes on the late Cenozoic history of the Pacific coast of Southwest Japan  
Tsuchi, R.: Japan J. Geol. Geogr., 32, 3-4, 437-478, 1961.

(1) 大量の礫からなる洪積世海岸段丘の発達は、後背山地のいちじろしい傾動隆起のせいであり、全域を通じてみられる昇降運動(氷河性)のくりかえしのせいでもある。新生代後期を通じて、2つの地殻運動が個々に作用した。1つは、中央構造線に平行な波状の屈曲で、そのため盆地が発達した。もう1つは、これと斜めにまじわる規模の大きな曲隆曲降で、これは、北側の山奥の隆起をとまなっており、かつ、新生代後期の盆地を制御している。

(2) 段丘面の層曲の分布: Fig. 2 にしめす通り。  
段丘面の年代に関する資料  
小笠原: 赤褐色に風化、クサリ礫、滲美地域では堆積サイクルが2つ、サギノ田地域からSegodon. 面の間析と堆積相から群風浦層に對比。  
牧ノ原階: 面は平坦、黄褐色に風化、礫の厚さは約50m、南方系の淡水貝をふくむシルトをはさまむ。下部(抄録者註: 下位ではないか)の古谷・佐浜泥層よりPaleozoicon. 下末古層に對比。

S-81  
FT-CB-P  
常念岳東方の断層地形に関する一考察  
小林 国夫: 地理評, 24, 11, 377-381, 1951.

(1) 断層地形を以て、唐沢山背後——角蔵山背後の谷にそって、断層線がはしっているかどうかを地質学的に検討した。  
積極的なアータタはえられなかつたが、断層の存在を示唆する若干の事実がわかつた。たとえれば、この付近では一般に古生層の走向に concordant に花崗岩が分布するが、この谷にそって境界線は、古生層の走向に discordant である。

(2) 断層の名前  
糸魚川静岡線北半の一部に飛騨山断層崖(辻村, 1926a)がある。これは大澤華、天狗山、常念岳の各断層崖よりなる(辻村, 1926b)。  
断層運動の年代  
小林 (1951, 信大紀要) は、洪積世前半の後期ころではないか、とかがんがえている。  
断層崖の大きさ  
辻村によれば、崖高2,000m、長さ30km。

S-82  
U.S.FD-CB-P  
東海地方の段丘変位から推定される地殻運動  
土 隆一: 日本地質学会講演要旨, 1966.

(1) 小笠原(与多摩期)以後の隆起沈降量のコンコタンター図をしめした。  
このうち、小笠原付近および滲美半島の隆起は西南西—東北東方向の背斜軸とかがんがえることができる。

S-83  
FT-KS-O  
長崎県崎戸赤島坂田呼子ノ瀬戸断層運動について  
長浜 泰夫: 地質集, 68, 799, 199-208, 1962.

(1) 目的: 呼子ノ瀬戸断層両側間における古第三系の岩相・層厚・不整合の状態などの比較検討から、この断層の形成過程について若干の考察をこころみた。  
結果: 断層の西側には、下位から古第三系の赤崎・寺島・松島・西彼杵各層群が分布するのに対し、東側には下部の3層群を欠き西彼杵層群が結晶片岩類を重複おおう。寺島~松島期には東側が上昇、西彼杵層群堆積後は西側が上昇した。

(2) 呼子ノ瀬戸断層 (Yobikonoseto Fault)  
位置: 大島町寺島と西彼杵半島との間  
方向: NNESSW  
変位: 先第三紀からくりかえしおこなわれた、おもに上下方向。  
北方延長: 佐々川断層につづくらしい。  
(佐々川断層は、沢田秀徳, 1958によれば、洪積世・沖積世にも活動している。) (抄録S51参照)

S-84  
S-KK-LP-O  
大坂湾の地質構造的意義  
藤田 和夫: 松下記念論集, 133-141, 1966.

(1) 目的: 大坂湾のもつ沈降部としての構造的特徴を、主として音波探査の資料に基づいて考察する。  
内容: 大坂盆地の基盤の形態  
重力分布と試錐によつて概観している。  
音波探査結果からみられた大坂湾内の地層分布(第4図)  
沖積層A, 沖積層B, 上部洪積層, 大坂層群(未区分), 区分した場合の同下部などにおわけている。  
沖積層の分布からみられた大坂湾の沈降運動  
第2図(下記)と第1図(等層厚線)にまとめられる。  
第2図は、池辺etal(1965)による試錐の結果である。位置は第1図にしめす。  
(第2図全体の沈降量をこれより推定することができる。)  
第2図は、“沖積層”基底面とその“隆起面”をしめす。[後者より、洪積世末期のある地形面の沈降量をしめることができる。]  
(第四図全体の最大沈降量は、陸上の地下の中では大坂湾(Loc.no.2)の約500 mとおもわれる。]  
(洪積世以前の最大沈降量は、大坂湾中心部の65-70 m。)

(3) この論文の抄録は、沈降関係と断層関係とにわけました。

S-85  
U.S.FD-CB-P  
東海地方の段丘変位から推定される地殻運動  
土 隆一: 日本地質学会講演要旨, 1966.

(1) 小笠原(与多摩期)以後の隆起沈降量のコンコタンター図をしめした。  
このうち、小笠原付近および滲美半島の隆起は西南西—東北東方向の背斜軸とかがんがえることができる。

S-86  
U.S.FD-CB-P  
東海地方の段丘変位から推定される地殻運動  
土 隆一: 日本地質学会講演要旨, 1966.

(1) 小笠原(与多摩期)以後の隆起沈降量のコンコタンター図をしめした。  
このうち、小笠原付近および滲美半島の隆起は西南西—東北東方向の背斜軸とかがんがえることができる。

S-85

大阪湾の地質構造的意義

藤田 和夫：松下記念論集，133-141, 1966.

(1) 大阪湾をめぐぐる断層系：

目的：陸上部地質と浅底部地質との比較および直接音波探査記録にあらわられた反射面の形態から、大阪湾をめぐぐる構造線について検討する。

結果：第1図

仮屋断層や沖の瀬flexureは、それらを境として、沖積層の厚さが変化し、断層の落ちの側で厚くなる。

(2) 泉佐野推定断層：陸地部と湾内の地層分布から推定した。西落ち、北方延長は、上町台は、上町台地の西縁を通り、千里丘陵西縁の仏念寺断層につづくらしい。

仮屋断層：淡路島東岸にそってほしる。露頭もあり、また音波記録でひきずり形態を認め、南東落ち、南方延長は、直線の上に陸上へつづぶかず、由良方面へまがる。沖の瀬flexure：仮屋断層に平行に、大阪湾内をほしる。音波記録で地層のflexureを認め、南東落ち、北方延長は、甲陽断層と伊丹断層とにわかれる。

(3) この論文の抄録は、沈降関係と断層関係とにわけました。(S84)

S-87

The birth and development of the Matsumoto basin.

Matsumoto Branch of A. G. C. J. : Guide Book to Geological Excursion around Matsumoto, 1, 1-4, 1966.

(1) 松本盆地の地史を概説している。(前半)

1. 古信州酒時代：中新世前期

2. 中央隆起帯の出現：中新世中期以降

3. 沈降時代：大峰面は、第三紀末～第四期初に、比較的短期間につくられた侵食面である。松本盆地は、大峰面形成の後に沈降した。

松本盆地の地下構造を概観している。(後半)

松本盆地の中心部で、武蔵による基盤までの深さは200m以上、

堆積物は主として、扇状地堆積物で粗粒である。

(2) [第四紀はじめ]以来の浸食地沈降量は、200mに近いと考えてよいだろう]

FT-KK-LP

S-86

諏訪湖北方、横河川上流の結晶片岩(横河川変成岩)

河内 洋佑・山田 哲雄：岩鉱，56, 1, 21-29, 1966.

(1) 目的：赤石山脈北端にある三波川変成岩の北東延長と、かねてからかんがえられていた横河川変成岩を、地質構造および変成作用の観点からしらべらる。

結果：横河川変成岩は、いわゆる無点紋帯といわゆる無点紋帯とにわけられ、前者が北西に、後者が南東に位置する。これらの岩石を、赤石山脈北部の三波川変成岩とくらべると、構造上も変成度もよく似ていることがわかる。フォッサマグナ地域に分布する新第三紀層中の結晶片岩の一部は、この地区にその起源をもとめるべきであろう。

(2) 断層：フォッサマグナ西縁の糸魚川静岡断層にそって、北側の横河川変成岩と南側の三波川変成岩とのあいだに、12㎞だけの左本平ずれが推定される。

西側の変位量の根拠：赤石山脈北部では、地層面と等変成度面(アソソグランド)とが約10°斜交している。この関係が横河川変成岩にも通用できるとすれば、中央構造線の横ずれをはかった。

S-88

Final stage of depression of the Matsumoto basin.

Matsumoto Branch of A. G. C. J. : Guide Book to Geological Excursion around Matsumoto, 1, 5-8, 1966.

(1) 1. 鉢伏山西斜面の地形

7つの地形面に区分。このうち波多段丘相当額は松本盆地に向って急斜。

2. 松本南方の中山丘陵の地形

中山丘陵の西麓にそって、年代の若い小断層に由来する奇妙な地形がある(下記)。

3. 梓川扇状地の段丘

新しい方より Kamikaido, Moriguchi, Hata, Osakada などの段丘面の概説。

(2) 断層：五福寺断層

N30°W-S30°E

地形：断層崖・先行性のなれ Wind gap などがみられる。

地質：一カ所で、礫層の下に基盤岩が露出しているが、はげしく破碎されており、

かつ、熱水溶液により変質している。

(3) 地形図を複写すべきかもしれないが、ガリ版なので資料となしにくい。

FT-CB-LP

S-89

神戸市および隣接地域地質図説明書

藤田 和夫・笠間 太郎：神戸市調査室調査月報，16，62-92，1965。

(1) 目的：昭和37・38年度事業として実施された神戸市域の地質調査の結果は、5万分の1の縮尺の地質図にまとめられた。本説明書では、地質図の凡例にあげられた岩石や地層について年代の古いものから順に説明し、さらに、地質構造の項と応用地質的諸問題の項とををつけ加えたものである。

地質構造の項：新生代層の発達史と断層系との2つにわけて説明されている。前者は第四紀の隆起の問題に、後者は断層の問題に關係がある。(p.81-88)

(2) 隆起：六甲山地の大坂層群の分布高度からわかるように、大坂層群生成開始以後、比高500m以上上昇したと考えられる。

断層：五助橋断層：副断層の溝が森断層は高位段丘礫層に断層する。その変位量は少ない。

会下山(えげやま)断層：大坂層群をききる北落ちの断層。

石垣・コンクリート層などの最下部から亀裂の入っている場所を地図上に記入すると、図-8のように本断層線上に集中。

U・FT-KK-R-LP-Q

FT-FD-KT-CB-P

S-91

Crustal deformation and igneous activity in the south Fossa Magna, Japan.

Matsuda, T.: Crust of the Pacific Basin, 6, 140-150, 1962.

(1) 南部フォッサマグナの地殻変形の型と火成活動の型との間のいちじるしい対応關係をべている。

中新世前期：広域沈降、2万立キロのソレニアイト・アルカリ玄武岩、中新世後期：波長20km程度で、隆起域と沈降域とにわかれる。カルクアルカリマagmaの活動(内縁岩・安山岩)

鮮新世および洪積世：強い圧縮をうけ、褶曲と衝上のくりかえしからなる。鱗片構造をつくる。しかし、火山活動はきわめて少ない。

なお、伊豆半島との比較に言及している。

(2) p.148に、"衝上のうちいくつかは、第四紀層を切っているから、現在でもうごいているとおもわれる"とある。著者に質問したところ、これは入山・田井湖断層のことであると、

p.148に、"大部分の変形は、鮮新世末と洪積世とにおこなわれた"とある。著者に質問したところ、これは、すべての地層(最後は鮮新世初期)をいっしょに変形させているから、とこたえた。

S-90

FT-CB-P

本曾山脈・伊那谷の形成機構に関する地形学的研究

有井 琢簡：自費出版，1-35，1964。

(1) 目的：本曾山脈とその東方にある伊那谷の地形を関連的に考察する。

方法：第I章では主として研究史。

第II章では、地形の叙述、断層の記載、地史。

第III章では、形成機構についての推論と、北米・N.Z.の地形との比較。

第IV章では、一般に地盤・地溝の地形の分類。

結果：このうちで、第四紀における隆起量(具体的な数字をあげたもの)にふれた部分はなく、断層が中心である。

(2) 資料として複写した第5図中の断層番号にするす。

断層名：1 奈良山、2 神谷(著者は神谷峠としているが原典の片出正人は神谷としている)。

3 上松・清内路、4 馬籠峠、5 阿寺、6 野風山、7 東郡山、8 上伊那電西、9 三州街道、10 飯田、11 駒場、12 下伊那電西、13 下伊那電東、14 中央構造線。

このうち洪積世に活動したものは：3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12

洪積世に活動した可能性の強いもの：1, 4

変位量(洪積世の)のわかっているもの：3は50m東あがり、10は80m西あがり、9は20m西あがり。

S-92

FT-KK-P

大和高原の断層地形

椎子 二郎：辻村先生記念論集，39-49，1961。

(1) 大和高原の断層系をその走向によって、次の3つの群に分けておける。

1. 春日断層群：南北

2. 柳生断層群：北微東-南微西

3. 伊賀断層群：北東-南西

これらのうち、1だけは、第三紀のころよりずっと活動しており、洪積世前期末に、1・2・3の3つとも現在の断層地形をつくるような活動をした、と結論している。すなわち、2と3とは、洪積世にのみ活動したという推定である。

(2) 資料として採写した図のローマ字記号をもちいて、本文中の記載を抜き出す。

K: 洪積世下部層が機曲している。

O, T, N, N: 洪積世下部層がドラッグをうけている。

S-93

FT-TH-0

北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史—  
中川 久夫・岩井 淳一：地質雑報，69，812，219～227，1963。

(1) 北上川中流沿岸には第四紀河成段丘が広く分布，その大部分は菅梁山脈よりの支流にそ  
う扇状地の段である。最新の段をのぞき，南部・中部地区では火山灰におおわれる。古い方より，  
西根・村崎野・金ヶ崎の3段丘群に区分，火山灰は，栗駒・焼石火山に由来。古い方より，  
一首坂・前沢・黒沢尻の3層における。これらの生成順序は，西根→一首坂→村崎野→前沢→  
黒沢尻→金ヶ崎。段丘の分布・配列の変化から，北傾が推定される。南部地区では，西根期の  
段丘は一首坂段丘，村崎野期の段丘は，黒沢尻段丘，金ヶ崎期のは水沢段丘といふ。

(2) 肥沢・水沢両段丘の高さは東へ漸減するが，とくに，肥沢村出店・駒籠線にそい高さが  
急減する。一首坂段丘背面の急斜部もこの線の延長上にある。村田(1939)はこれを出店渡曲  
線とよんだ。その南方延長の前沢町西方向駒籠—平泉町毛越寺・中尊寺付近—一関市蘭梅山・釣  
山・真柴—同市南方油島付近の線にそって，小野寺(1967など)は中・鮮新統中に渡曲構造を  
みとめた。これは，出店渡曲線のつづきとおもわれるから，両者を一括して，肥沢—油島渡曲  
線とよぶ。

S-94

FT-CB-R

水島断層の構造

村松 郁栄・梶田 澄雄：岐阜大学芸研報(自然科学)，3，3，308～317，1964。  
(1) 1891年濃尾地震のときにできた根尾谷断層の一部である，水島断層周辺の地下構造をし  
らべた。

方法：電探，平板，水準測量。  
結果：沖積礫層の厚さは20m以下で，その基底面は，1891年の断層崖と同じ場所  
同じ程度に，くいちががっている。すなわち，このことから，1891年にできた断層崖は，基盤の  
岩石内の断層運動によるものであること，および，1891年以前には，最近地質時代に，同じ断  
層は活動していないことがわかる。

(2) F<sub>0</sub>:4は，1891年濃尾地震，1948年福井地震のときの垂直変位をコンタターでしめしたも  
の。数字は単位m。

原点：1891年について：大森房吉，1894，岐阜調査所報告  
" 1900，震災予防調査会報告  
Koto, B., 1893, J. Coll. Sci. T. I. U.  
陸地測量部，1903，同部出版物。  
1948年については：Nasu, N., (1950), Rep. Sp. Comm.  
なお，水平変位は矢印と2M，1Mなどの数字でしめしてある。

S-95

FT-KK-R

但馬地震の震源調査報告

山崎 直方：震予報，101，31～34，1927。

(1) 但馬地震：1925，05，23° 烈震

〔抄録者註〕理科年表によれば，M=7.0

津居山湾付近の地形：断層崖とおもえるものが数本ある。たとえば，津居山・城ノ崎を  
むすぶ円山川西岸の崖は直線上で，断層面をおもわせる。次にしるす田結層は，これとほぼ平  
行しており，両者は地溝状に相対し，なかに津居山湾がある。したがって，田結断層は，この  
地形をつくった運動の新しい活動に外ならない。

(2) 田結(タイ)断層

位置：複写図をみよ(省略)。2列からなる。延長1,600m。2列のあいだの間隔400m。

走向：N45°±E(抄録者図上測定)

変位：NW落ち，最大1m\*普通10～50cm，まれにSEもある。

\* 水平的移動ヲナルセルコト，ソノ鮮カナルモノガアツタ。

僅カニ6cm位デアアルガ水平移動ノ明確ニ現ハレ

とあるが，左ずれか右ずれか書いてない，残念。

\* ハチガナナル(鉢が成)付近。

S-96

FT-CB-R-P

坂下断層—阿寺断層の最近の運動—

岡山 俊雄：陸台史学，18，34～56，1966。

(1) 発見の経緯：はじめ付知川で断層崖をみつけた。坂下は空中写真による。

段丘面：新しい方より西方寺面Sh・坂下面Sk・高部面Tb・松源地面Sg。高部面は水  
皆川火山泥流の堆積面。西面の下に礫層がある。坂下は坂下礫層の堆積面。礫層の下は花  
こう岩質の基盤岩。西方寺中位面・坂下上位面：高部面の山側には旧流路がある。土壌は一般  
に断層のおちた側で礫上，あがつた側で砂質である。坂下面地域では，断層のおちた側には基  
盤岩露出せず，あがつた側だけ露出している。等々，坂下町で観察されたことを，事ごまかに  
記載している。

(2) 阿寺断層の変位：地形から判断し垂直に700m。地質から判断し水平に3kmあまり(片  
田・鶴見・山田ほか，1961)

坂下断層崖の変位：P.45の表に，小林ら，および杉村らの測定値を表示，水平変位につ  
いては，小林らの欄は1段づつさげべきである。

坂下断層崖の走向：N45°W

坂下断層崖の南東延長：南よりにカーブして，馬籠北東の一等水準点(630.16m)付近  
にいたる。その途中で，小断層面のdip65°NEが測られている。

S-97

香川県地質図(10万分の1)

著者 美・坂東 裕司:1962.

(1) 説明書なし

凡例抜粋

三疊(ミトヨ) 累層:メタセコイア層……………Pliocene.  
(中略)

和泉層群……………Up. Cret

(2) 三疊層に和泉層群が thrust している。

長さ 15km

走向 N 70 E

北おち

FT-CS-P

S-98

濃尾平野の地下構造とその構成

著者 勲・森原 徹:伊勢橋台風災害の調査研究報告, 14-39, 1964.

(1) I, II, 濃尾平野の地形概説と地質概説

III, 濃尾平野の地質

1. 矢田川層・徳山層・八事層・熱田層・大曾根層・南降層

2. 沖積層の構成とその堆積相

IV, 濃尾平野の地下構造: 次項「資料」欄に抄録

V, 総括および結論: 11項目あり, そのうちより2項目次の如し,

1. 濃尾沖積平野の形成過程の概要を図4に示す,

2. 矢田川累層の上限: 瀬江で-343m, さらに西へ斜降している,

長直川河口で-272mにもりあがっているのは局部的背斜のため,

(2) (次の各段層の位置については, 抄録S90の付図をみよ)

鳴海・天白川断層: 矢田川累層上限の深さ(ボーリングによる)のくいちがいより推

定, 北落ち,

大垣・今尾断層: 両側の更新統にくいちがい, その程度は不明,

伊吹・養老断層: 付随的なもの,

笠原断層: 庄内川が平野部へ流入する付近まで延長してきている, このため, ここで

は 大曾根面が北落ちにくいちがう,

篠原・黒筆断層} 南落ち

篠投・埴川断層}

S-99

沿海低地帯における地盤沈下の研究—とくに濃尾平野南部の地盤沈下—

著者 勲・松沢 勲: 災害の地域的特異性に関する基礎的総合研究, 16-33, 1966.

(1) II, 濃尾平野と濃尾傾動地塊: 西縁は伊吹・養老断層, 南縁は鳴海・天白川断層—篠原

黒筆断層—篠投・埴川断層,

III, 濃尾傾動地塊の傾動運動と地盤沈下

1. 地下構造からみた濃尾傾動運動: 少なくとも矢田川層堆積以降から進行してきている,

2. 地形にみられる傾動運動

3. 水準測量結果にみられる地盤の沈降

IV, 軟弱地盤と圧密沈下: V, 地下水の過剰揚水と地盤沈下,

VI, 濃尾傾動地塊の傾動運動と鳴海・天白川断層の活動(「資料」欄)

VII, 濃尾平野における地盤沈下の要因,

(2) 篠投・埴川断層: 東南へ衝上する高角度逆断層 } 矢田川層がこのためおまがる,

篠原・黒筆断層

鳴海・天白川断層: 矢田川層上面が, 名古屋港付近では, この断層の南側で, 30m内外

の深さにあるが, 北側では, 150m以上300m内外に低下している, [したがって, 少なくとも

100mの北落ちが推定される, 元来傾動している場所なので, 断層だけの落差は推定しにくい,]

これらは, 伊吹・養老断層とともに, 現在も動きつつある活断層である,

S-100

S-FT-KK-U

阪神とその周辺の地形—現地討議と今後の課題—

著者 水山高幸ほか9名: 地理評, 40, 11, 585-600, 1967.

(1) 1966年秋のエクスカージョンのポストプリントである,

内容区分と執筆者: I まえがき, II 阪神とその周辺の地形に関する研究小史(高橋・守田),

III 大阪平野の地形面とその変位(岡), IV 生駒山地の断層崖(前田), V 北摂山地南縁の地形面と

砂陵層(井上・加藤), VI 六甲山地における花崗岩の割れめ・風化と地形(池田), VII 琵琶湖西岸

の段丘(大橋), VIII 今後の課題(水山・高橋・羽田野), このうち, 特に地殻変動の資料をよくん

でいる部分は, III と IV である, 以下には, この2節より摘録する,

(2) III: 伊丹台地—埴市南東部の30kmの間で, その中央が両端に対し,

I 面 60m沈降……3万年間(本文の3,000はミスプリント)

S 面 100m沈降……下末吉期(岡氏私信より)

Ma8層 200m以上沈降

IV: 生駒断層: 大阪層群をきき, 落差1,000m程度, 西おち, また, 大阪層群を不整合に

おおう礫層・砂層もききつつあるので, 運動が最近まで続いていたことが推定される,

その他の断層は, ここでは単に断層崖としるされているのみ,

S-101

U-FT-CB-LP

静岡県庵原郡東部の地質構造

大塚弥太郎：震研叢報，16，2，415～451，1938。

(1) 結論：この地域の地質学的な位置，研究史，本報告に至るまでのいきさつ，謝辞など。

地影概要

層序：沖積沉/富士溶岩/段丘礫層/鷹ノ田礫層/（以下略）

地質構造：植物化石より，鷹ノ田層は（昇風満期）

地質構造から推定できる地殻運動：富士溶岩以後現在までに，富士川に沿って増傾斜運動

あり，小さな山の急急点が150～200mの高さにあるので，最近100～150m隆起。

(2) 入山逆断層：今野・大塚（1933）命名，井上の室野河沿線はその一部，走向南北，北端で北東を向く。傾斜角は，60～90°西，東落ち，段丘面を著しくは変位させていないが，鷹ノ田礫層を切る。段丘以後の年代は却って，これと平行な次の2断層が活動。

水沼断層：走向南北，傾斜垂直，富士溶岩を不貫す，その下に重なる鷹ノ田礫層を切る。東落ち。

月代(Gendai)断層：走向南北，傾斜垂直，西落ち，富士溶岩を切る。落差20m。

S-103

FT-CS-P

福山地方の福山果層（非海成中新統）と福山衝上について

今村 外治・楠見 久：愛媛の地学，永井記念，96～103，1967。

(1) 層序：現世シカルト層，泥礫層，洪積世礫層，新世福山果層，基盤岩類

洪積世礫層……洪積世である証拠はないが，福山果層との間には不整合で，礫は第三紀層に由来する軟質の田礫をふくみ，固結度が低いから，洪積層の可能性が強い。

(2) 福山衝上：南落ち，走向N60～80°E，傾斜は35～70°N。

位置：図1にあり，その東方延長は藤取断層（今村・楠見，1951）に連続する。西端は，N20°E方向の宮本断層で切られている。延長は，藤取断層をふくめて14km。

露頭：洪積世礫層を切るところは6（河田眞正氏発見），そこでは落差少なくとも5m。

露頭④と⑥のスケッチがあり，抄録には省略。

類似の衝上断層：河合（1957）の美作衝上，今村（1966）の日応寺衝上，今村（1953）の船佐・山内衝上など。

S-102

FT-TH-R

庄内地震に関する地質学上調査報告文

小藤次次郎：震研叢報，8，1～22，1895。

(1) 1. 日本海海岸北半の地質概略

2. 庄内の地質および地影

3. 過去の地震

4. 昨年の大震（この項目の中に，震因図線という小項目があり，矢流沢断層が記載してある）

(2) 矢流沢（ヤダレザワ）断層

分布：付属図版の通り。

方向：N55°E，北落ち（落差は記していない）

水平ずれ認められず。

S-104

FT-CS-P

広島県の新生界

多井 義郎：広島県地質図説明書（20万分の1），103～123，1964。

(1) 県下の新生界は，中新世層と，これを薄くおおおう，主として更新世およびそれ以後の流岩層からなる。後者は，中部以南に主に分布し，火山灰層を主とするものは，北部の高位地帯に限られる。

層序：現世；沖積層，三瓶火山灰層

更新世～現世：新期玄武岩類，段丘堆積物

更新世：旧期玄武岩類，西条砂礫層

鮮新世～更新世：未区分礫層，甲立礫層

山砂利

船佐・山ノ内衝上（今村，1953，1959による）

甲立礫層の上に衝上している。南おち。

走向：N75～80°W，傾斜：40～50°N。

新期粘土の厚さ：10～20cm。

船佐衝上

山ノ内衝上は，船佐衝上の延長上にあるか，雁行状につながるのか不明。

これらの露頭のうち3カ所は，天然記念物に指定されている。

S-105

広島県の地質構造

小島 丈見・今村 外治：広島県地質図説明書(20万分の1)，21~30，1964。

(1) I. 西府日本地体構造における広島県的位置

II. 先三疊紀岩類の地質構造

III. 中生界の地質構造

IV. 新生界の地質構造

V. 北東一南西系構造谷と断層運動：起源は古いのが、新期にも活動しており、六甲変動に相当する。この方向に多くの直線状河谷があり、断層谷と考えられている。これに対して、断層線谷と考へるべし、という主張がある。

(2) 三原断層：竹山(1933)が見出したもの、砂礫層からなる。最新世の尾道層を切る。小起伏面も変位している。

毛無山断層：旧期世玄武岩メサを切り、みことな断層崖を残している。東北にあり。

船佐・山ノ内衝上：砂礫S104をみよ。

冠山断層：辻村(1926)命名。甲立礫層(Plio-Pleist.)に対比される滝ノ沢礫層とその上の玄武岩・安山岩を切る。

上根断層：今村(1963)が見出した。上根群礫層を切る。また、崖壁をも切るところがある。地溝をなす。

S-107

U-FT-KT-Q

大礫丘脈の tephrochronology とそれともとづく富士および箱根火山の活動史

町田 洋・森山 昭雄：地理誌，41，4，241~257，1968。

(1) 東京軽石層と箱根新期軽石流との関係

1. 東京軽石層についての問題点

2. 東京軽石層の確認：確認の方法など。

3. 箱根新期軽石流：その先駆として東京軽石層が噴出。

4. 1)起源，2)大礫丘陵における分布，3)軽石流台地の変位(下記)

III. Tephra の層序と諸地形面との関係

4. 諸地形面に關する若干の問題：2)塊状変動の速さ(下記)

IV. 富士および箱根火山の活動史。

(2) 軽石流台地(武蔵野期)の変位。

松田・国府津断層：軽石流を100m以上ずらせ(図5の左半)，河岸段丘面(立川期?)を70~80mずらせている。西おち。

淡沢断層：北おちに軽石流を切る断層多く，これらは，淡沢断層崖に平行，その東方延長は桃曲線(図5の右半)。

地殻変動の速さ。

沖積世の隆起速度：5m/1000年。この速さで吾沢面(下末吉層に對比できる)が隆起したとすれば，実際より高くなるはず。つまり最近に急激化したであろう。

(3) 上記の2つの断層は，大塚弥之助(1930，地理評，6巻，1号，p.1~20)も画いてる。

FT-CS-P

S-106

FT-CS-P

岡山県津高町日松寺より Miogypsina kotoi の発見と岡山市周辺のいわゆる第三系の地質時代

今村 外治：岡大地理学研報，1，1~10，1966。

(1) II. 日松寺第三系の層序の概要：上部層，下部層

III. 日松寺第三系の地質時代：下部層は戸笥層

IV. 日松寺衝上(下記)

V. 岡山市周辺の夾礫炭第三系の地質時代

日松寺上部層や下部層に対比している。

VI. いわゆる帯江貝層の地質時代

従来第四紀層にしていたが，日松寺上部層に対比する方が妥当。

(2) 日松寺衝上

ここだけでは，中新層を切るだけで，年代はわからぬが，船佐・山ノ内・福山衝上(砂礫S103，104をみよ)は，明らかに最新世の形成で，これらに平行な本衝上も，最新世である可能性は否定しえない。SEおち，礫頭の地点にあり，それらはN40Eの方向に並ぶ。各露頭での断層面の走向：N40~55E，傾斜：40~85NW，断層粘土の厚さ：15cm±。

S-108

Younger Tertiary geology of the Mabechi River valley, northeast Honshu, Japan.

Chanzei, K.: J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Aec. II, 16, 1, 161~208, 1966。

(1) 馬淵川流域の第三紀層の層序と地質構造とを記載する。この地域は，北上古期岩体と，新第三紀の粗骨岩である奥羽山脈との間にあり，浅い盆地構造をしめす。新第三紀層は，堆積層の特徵により，上部の三戸層群と，下部の白鳥川層群とに分ける。これらはそれぞれ，中新世末一鮮新世後期と，中新世前～後期に当る。地質構造は，北上山体と奥羽山脈との隆起に強く支配されて発達した。

(2) 折爪断層(辰ノ口巻曲をふくむ)

分布：Text-fig.12に図示，東おち。

変位：北端ノ辰ノ口巻曲のところ，Text-fig.24に図示されているように，段丘面を变位させている。最も古い面(金田一面)では，70mに達する。この面は，多摩面に相当すると考えられる。また，58年間の水準観測結果にもあらわれているようにみえるが，明瞭ではない。

全変位量：三戸層群堆積開始以後600m。

(3) なお，Q.T.M.には，岩手県発行の10万分の1地質図に画かれていた断層線を参照して，折爪断層の南方延長も書き加えてある。



|   |   |
|---|---|
| <p>Y-1<br/>和泉山脈北麓の断層線と地形との関係について<br/>前田 昇：陸学大紀， 12, 127-139, 1964.<br/>(1) 和泉山脈北側の断層については存否の二説があるので，その検討を目的とする。和泉山脈朝山北斜面には，ほぼ東西に走る断層系があり，前山の山麓線にそって断層崖を形成している。<br/>(2) 多くの断層は逆断層である。断層運動は大坂層群堆積後の少くとも2回が認められる。地形を決定するなどの断層運動は，高位段丘断層堆積前に一応終った。</p>  | <p>FT-KK-Q<br/>U-FT-KK-Q<br/>Y-4<br/>大和国紀の川流域の地形 I<br/>中野 章正：資源研報， 9, 47-50, 1946.<br/>(1) 中央構造線にそって，北側を断層崖に限られた盆地がつかられ，その中に外帯山地から供給された sediment によって紀の川層が堆積し，露上部は東から西に流れる旧紀の川の堆積物がのる。紀の川層下の結晶片岩は東から西に傾き，紀の川層は西に厚くなる。(紀の川層=河田の轟溝谷層)。<br/>(2) 紀の川層堆積後，竜門ヶ岳断層崖は再活動したが，西部では変位がわずかであったため，紀の川層は変位することなく，和泉砂岩を不整合におおおうように見える。block movement 後に侵食面の形成があった。紀の川断層角盆地の形成→吉野面の形成と紀の川層の堆積→隆起→吉野面開折・中位段丘形成→隆起→低位段丘形成→隆起(現在)。</p> |
| <p>Y-2<br/>下北半島北東部の海岸地形<br/>大矢雅彦・市瀬由自：資源研報， 40, 16-28, 1956.<br/>(1) 5段の海岸段丘がある。50-20mの段丘面がもっとも広い。270-200m, 200-160m, 100-60m, 50-20m, 15m以下。これらの段丘，海岸地形の調査結果にもとづき，この地域の地形発達史をまとめられている。<br/>(2) 第4段丘の隆起量は岩層納層付近(約70m)。ここから各方向に隆起量は減少する。尻屋崎および大畑付近において隆起量は最大。田名部低地では小さい(約20m)。第1段丘は桑畑山および片崎山付近においても高く，約270mに達する。これから野辺地層堆積後少くとも270mは隆起したと推定する。尻屋崎西縁の断層によって，東に傾動している。</p> | <p>U-FT-TH-P<br/>Y-5<br/>中国山地の概形とその地質時代<br/>大塚弥之助：地学雑誌， 49, 578, 156-162, 1937.<br/>(1) 中国準平原の形成時代に関する従来の説を紹介し，中国準平原は脊稜山脈にのこる1,000m以上の平坦面と700m以下の山麓面状の小起伏面に分けられる。低位小起伏面は中新統堆積以後で，Miocene末よりPliocene間に形成された。中新統を堆積した海は脊稜山脈を刻む谷に侵入し，リアス海岸を形成していた。したがって中新統堆積初期には，高位平坦面はすでに山地となっていた。</p>  |
| <p>Y-3<br/>日本海岸低地地形に関する若干の問題<br/>中野 章正：陸古史学， 2, 59-72, 1952.<br/>(1) 日本各地，とくに関東地方各地の低地のホーリング資料を用いて，それらの地形発達史をまとめた。<br/>(2) 諸磯期以降の陸地の相対的隆起量は最大約25mである。かかる隆起は日本各地で均等ではない。関東地方では，南より北に小さくなる傾向的隆起であった。</p>  | <p>FT-CS-Q<br/>Y-6<br/>讃岐地方地学雑誌<br/>佐藤 源郎：地学雑誌， 44, 520, 522, 333-339, 436-449, 1932.<br/>(1) 尾島の上には河成堆積物があり，この付近のメサとともに，地盤の開折されたものである。準平原化→溶岩台地の形成→多少の剝削作用→地塊運動→瀬戸内海の形成。</p>   |

昭和48年3月27日 印刷

昭和48年3月31日 発行

編集兼  
発行者

国立防災科学技術センター

東京都中央区銀座6丁目15番1号

電話 (03)541-4721 郵便番号 104

印刷所

(株)昭和工業写真印刷所

東京都港区三田5丁目14番3号